
魔法少女リリカルなのは～ザ・ウォークス

亜嵐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはザ・ウォーカーズ

【Nコード】

N9871K

【作者名】

亜嵐

【あらすじ】

ワールド・ウォーカー
世界渡航者

そう呼ばれる存在がいた。

世界を助け、救い、殺す者。彼らは時に世界の代行者であり、時に世界に刃向かう者。その存在は時空管理局といえども知る者は居なかった。

時に新暦65年。管理局に吉報が舞い降りる。闇の書の消滅。そしてこれを期に管理外世界の『管理』を強行する本局。

そして、彼らは対峙する……。

あ、この作品は原作キャラアンチが有りますのでご注意ください。それとヒロインは人間キャラじゃないので、それが気に入らない方はブラウザの閉じるを押してください。

序章「プロローグ」

魔道戦記ワールド・ウォーカーズ

序章「プロローグ」

魔法。

それは、神々が起こす神秘たる奇跡の代名詞。

人の手ではどう足掻いても起こす事の出来ないもの。

神と世界が認めた者のみしか、起こす事が許されないモノ。

故に人は、其処に至る神秘を求める。

そして人間が手にするは小さな神秘。

だがそれは、人が時間と労力えお費やせば至れるモノ。

しかし、これこそが魔法への確かな第一歩であり、神秘と奇跡の
体現の一端でもあった。

故に人々は魔法への尊敬と希望を込めてこう呼んだ。

……『魔術』……と。

そして、それらに関する知識、技術を『魔道』と呼んだ。

人々は魔道を志し、魔術を昇華させ、魔法へと至ろうとした。

しかし、その道のりは遥かに険しく厳しい者だった。

だが、人は己の欲望の為なら何処までも勇敢に、残虐に、冷酷になれた。

しかし、それでも魔法へは至らなかった。

それでもなお、人々は諦める事はしなかった。

そして、幾年月の年月が流れる……。

時に新暦六十五年。

第一管理世界ミッドチルダにて、時空管理局本局に吉報が舞い降りる。

闇の書の消滅。

さらに闇の書改め夜天の魔導書の主は管理局に従事。

強力な手駒を手に入れた管理局は、過去の闇の書事件を盾に管理世界を増やしていく。

まるで自分たちこそが闇の書事件解決の立役者であるかのように……。

そして新暦六十六年。

物語は此処から始まった……………らしい。

それより少し昔の話。

ベルカと呼ばれた国のとある場所に、その男はいた。

周囲を機械に埋め尽くされた空間で、ソコの中央だけがぽっかりと空間を作っている。そしてソコに彼はいた。

ボサボサの白髪に腰まで伸びた長い頭髪を首の所で一つに束ね、唇が何処にあるのかも分からないくらい伸びたヒゲ。前髪も目元を覆い隠し、辛うじて眼鏡を掛けているのが分かるくらいである。服装も作業着に白衣と繋がりが無い。

しかし、男の瞳はその中で透き通った銀色をしているのが分かる。

男の周囲には十数個に及ぶウィンドウパネルが、恐ろしいほどの勢いでスクロールしている。そして男の手元には二つの操作パネル。男の手の速度も認識するのが難しいほどの速度でパネルの叩く。

それらはすべて何らかしかの数式が写っていた。

「やれやれ、ようやくコイツも完成に至ったか」

ウィンドウパネルの間から一冊の本に、男の目はいつていた。

「魔道書型リンカー術記録端末。まったく注文の多いベルカ王だったこと」

ぼやきながらも、男の口元が笑っているのが髭越しにも分かった。そしてウィンドウパネルの数が徐々に減っていく。

どうやら作業ももうすぐ終了のようだ。

「そう言えば、まだコイツの名前を決めてなかったな」

本来なら持ち主に付けさせるのだが、自分にこんな事をさせた意趣返しに、付けてしまおう。

「そつだな……、『夜天』とでも名付けるか」

男の弦きを聞く者は居ない。此処に居るのは男と魔道書のみ。

そしてそれは、誰の知る事でもなかった……。

主人公紹介（前書き）

と言う訳で主人公の紹介。

ところでチートの線引きって何処からだろう？

何を持ってチートなんだろう。

相性？ 属性？ 効果？ 概念？

とりあえずスペックかな？

主人公紹介

主人公

名前：神無 銀狼（かなな ぎんろう）

年齢：外見23

身長：183

体重：78

頭髪：灰色に近い銀

瞳：淡い銀

顔立：ラナロウ・シェイドの目元を狼目にした感じ。

髪型：前髪はウルフヘア、腰まである長髪を首に所で一つに束ねただけ。

服装：濃紺のジーンズ、黒い長袖シャツ、濃緑の革ジャン、軍用ブーツ、ハーフグローブ。

備品：縁無し銀蔓眼鏡。白い宝玉を首から下げている（普段は服の中）。

性格：自由奔放で、基本的に物事は気分次第な破天荒な性格。

放浪癖があり時たま訳も無くフラリと散歩と言う名の旅に出る。

特技：魔法以外の技術体系を体现する事が出来る程度の能力。

つまり、魔法以外なら何でも可能。魔術は魔法系統に属するので不可。

能力：神技摸倣体现。

神の奇跡の類を、体術で再現する事が可能な能力。佐々木小次郎と同じく鍛錬で魔法に至った存在。

時空間転移体術、縮地。

仙術の類だが、銀狼はこれを体術で体現した。移動先に必要な空間さえ有れば、結界も素通りできる。知覚範囲内及び一度行った場所、目視可能な場所。月にも瞬間移動が可能。タイムラグがゼロの為、戦闘においては間合い取りの絶対的なアドバンテージが取れる。

妖術、しゅくち。

『いぬかみっ！』のようこと同じ能力だが、攻撃もしゅくちする事が出来る。物体の運動エネルギーはそのままなので、射撃攻撃がチート射撃を通り越す。白井黒子と似たような能力だが、物体に触れて無くても可能であり、敵の攻撃をそのまま反す事が可能で方向は変更可能な為、使い方によっては鬼畜になる。

亜空間物質収納能力、蔵

ゲイト・オブ・パレロン

王の財宝と同じだが、蔵の中では時間の経過が無い。ナノマシンからデス・スター（スター・ウォーズのあれ）まで収納してある。ただし銀狼は殆ど食料庫扱い。

黒槍。

全長二メートルの黒い槍。この黒槍は銀狼の超能力の一つで無限に生み出す事ができ、蔵から撃ち出す又は取り出して投擲する。強度はデュランダルと同等。普通の槍としても使用可能。

黒鎖。

エンキドゥ

黒い鎖。天の鎖の黒い版。ただし此方は対魔属性のため魔法に対して驚異的なアドバンテージを誇る。大抵は捕縛用だが、それ以外の使い方も可能。

炉心。

ありとあらゆる力の源を生み出す銀狼の心臓。但し半分はアストラル機関の為、消滅させたところで世界から情報を持って来て修復される。

魔力に気力、霊力、仙力、神力、冥力、天力、体力、精力も生み出す、チートな無限エネルギー生成機関。

趣味：散歩と読書。ただし散歩は次元世界規模。

備考：銀の世界渡航者と呼ばれている男。
ワールド・ウォーカー

ウォーカー内では百万の魅技、もしくはミスター・シルバールと呼ばれる。

非常識なほどに人外に好かれる体質で、当人も人間より動物や幻想種の種族の方が好きだと公言している。本人曰く「人間の女より犬猫の方が顔の区別がし易い」との事。

また、銀狼の精子は人間との受精率が非常に低いが、人外つ娘相手だとほぼ100%任意で妊娠させる事が出来る。そして子供は母体に99%外見が酷似した雌が生まれてくる。ただし素質や能力は母体を凌駕する。その為銀狼の精子は、絶滅の危機にある種族の間では、一族を揚げて手に入れた代物であり、それを巡って種族間戦争や同種族間の派閥争いが時たま起こる。

大抵は銀狼が調停に行つて、両陣営に食べられて終戦になる。端から見ればハーレムだが人間は一人も居ない場合が殆ど。

ちなみに銀狼の精液は美肌豊胸膨乳若返り効果もあるため、常に狙われている。

二つ名。

「百万の魅技」「神業の体現者」「銀の世界渡航者」「常時後宮」
フルタイム・ハーレム

「幻想種娘聖域」「絶倫種付超人」「人外フェロモン」「人外の花婿」
ファンタジック・ガール・サンクチュアリ

「てかあのニイちゃん魔法が効かねんだけど」「すみませんウチの種族に新しい種をくれませんか?」「豊胸魅手」
バストラップバー

最初の三つ以外は冗談半分で付けられて定着したもの。

武装：刃渡り三尺三寸（約一メートル）の長刀。弧狼

一尺六寸六分（約五センチ）の中太刀二本。双牙

黒い緋々色金で出来た長さ二メートルの分解式八節棍。黒耀

コルトパイソン四インチマグナム。

大型オートマチック礼装銃二丁。外見はDMCのダントの

銃。マテリアル&アストラル

腰布。布戦術用だが拒絶の概念が掛かっている。流天鎧布

偽名：銀狼が本編で名乗る偽名。

七篠 権兵衛

アラン・スミシー

ジョージ・マウンテン

以下増量予定。

ボイス集

「魔法？ 何ソレ？ おいしいの？」

「今必殺の！ 魔法のマジカルパンチ！！」

「戦場生存技巧、見盗覚技、霞月流、神無銀狼。推して参る」

「腹を空かせた子供に、パンとミルクを与えてやれなくて、何が

魔法だ！！」

「じゃ、おつ始めるとするか。魔法が無くたって出来る事を……」

「魔法で何が出来ると出来ないじゃない。何が出来てしまうのかを理解してなきゃいけないんだ」

「殺す覚悟も無いのに、何で力を振り翳す。傷付けるのがイヤなら、力なんて持つな」

「目からビーム！！ 口から怪光線！！ 魔法要らずの世界救済フラッシュユ！！」

「魔法なんて下らねえぜ！ 俺の歌を聴けえー！」
「俺は生きる。生きて人外ツ娘とニヤンニヤンする！」
「人間が他の種族の雌に欲情しないんだから、人外の俺が人間の女に恋愛感情を抱くわけ無いだろう？」

イメージ声：山崎 たくみ

嫁。

現在、銀狼と肉体関係を持つ娘達
久遠、ヴィヴィアン（PSP02）、コスモス、テロス、アシエ
ン・ブレイデル、カルディア・バシリツサ、以下増量予定。
ただし、スポット参加の場合あり。

主人公紹介（後書き）

なお、キャラクターの設定に関しては、常時更新をしていきます。

第一話「降り立った者」

第一管理世界ミッドチルダ。

それは、新暦66年の春先に起こった事件だった。

ミッドチルダ首都クラナガンのとある銀行でその事件は起こった。

「おらおら！ 死にたくなかったらとつと金を持って来い！」

ミッドチルダにおいて禁忌とされた道具。質量兵器をその右手に持ち、銀行内にいる人たちにその銃口を向けるのは一人の男。左手には銀行の女性職員が捕まっている。

銀行強盗。そう呼ばれる類いの事件である。

そして、男の仲間と思われる人物が三人。

うち二人は自動小銃と散弾銃を片手に銀行の職員を監視する。

残るもう一人はその右手に『デバイス』と呼ばれる魔法発動媒体を持っている。

魔導師。このミッドチルダにおいて、絶対と言っているいい力を持つ

た人間だ。そのデバイスの先から放たれる魔法は容易く人を殺せるだけの力がある。

強盗犯は全員頭に覆面を被っているので人相は判明できないが、デバイスを持った男は明らかに場違いな服装をしている。

バリアジャケット。そう呼ばれる魔導師の防護服は拳銃程度なら、その威力を痣が出来る程度に弱める事が出来る魔導師の鎧である。

幸いな事に昼時だった為か、銀行職員以外の人質は四人の男性客のみである。

そして、その男性客四人にデバイスを向け、ニヤニヤと顔を歪ませて笑っているのが魔導師の男である。魔導師の男は自分が魔導師である事からの余裕なのか、男たちを縛ろうともしていなかった。

銀行の防犯シャッターは既に下りており、犯人の逃走を一役妨害していた。

しかし、それに錯乱した犯人の一人が天井に向けて一発発砲。

悲鳴が銀行内を飛び交う中、散弾銃の男が金庫から金を出すように要求。

質量兵器に恐怖した店長が、強盗犯のバッグに金を詰め込んでいるが、恐怖の所為か震えていて入れるのに時間がかかっていた。

「しかし、テメエ等も運が無かったな。俺様が銀行を襲う所に居合わせちまったんだからな」

魔導師の男が四人の男性客に声をかけた。

「全くだ。折角これから愛しのヴィヴィアンちゃんと『明日の朝までしっぽりニヤンニヤン今夜は寝る暇も無いほどにハッスル』をする予定だったのに。これではヴィヴィアンちゃんが悲しむ」

男性客の一人。灰色に近い銀髪を腰まで伸ばし首の所で一つに束ね、縁無しの銀蔓眼鏡を掛けた銀眼の男が発したのは、魔導師の男が望んでいた、恐怖に震え命乞いをするモノではなかった。

魔導師の自分がデバイスを向けているのだから、魔力を持たないコイツは恐怖に震えて泣き叫ばなければ成らない。

そう考えていた男は、この銀髪の男が言った言葉に自分が舐められていると感じた。

「貴様！　これが見えないのか！　俺はAランクの魔力持ちでデバイスを持って貴様に向けているんだぞ！！」

銀髪の男からは魔力は欠片も感じなかった。それどころか他の三人も魔力は一切感じられない。

つまりこいつ等は非魔導師でリンカーコアも持たない存在。自分のような選ばれた存在に媚び諂うべきなのだ、魔導師の男は信じていた。

だが、先程の態度は何だ？　魔導師のはずの自分に生意気にも口を利くどころか、馬鹿にしたような態度をとってきた。しかも今まで恋人が一人も出来た事が無い自分に向かって、女といちゃつける余裕を見せた。

だから、自分を馬事にしたこいつは、選ばれた存在たる自分に、コロサレナケレバナラナイ。

そう思い至りデバイスに魔力を込めスフィアを生み出そうとした。

他の強盗犯たちは何やらヤレヤレと言った表情から、魔導師の男は過去にも何回か似たような事をしてきたのだろう。

銀行の職員たちは銀髪の男が殺されると思い、目を瞑って顔を逸らす。

しかし、デバイスから魔法が放たれる事は無かった。

コンッ。

非常に軽い音を立てて、魔導師の男の手からデバイスが真上に跳ね上がる。

「へ？」

ただ茫然と自分のデバイスを目で追った魔導師の男は、次の瞬間に訪れた死ぬほどツライ衝撃に、意識を手放すのであった。

其処から先は一瞬だった。

銀髪の男以外の三人の男性客は、即座に行動に出た。

すぐ側にあったペン立てに入っていたボールペンをペン立てから抜きざまに投擲。

それら二つの軌跡は狙いを違える事無く、強盗犯たちの右手に突き刺さる。

強盗犯全員が、痛みに銃を放り出す中、銀髪の男以外の三人は一秒と掛からずに間合いを詰め、鳩尾、延髄、顔面に衝撃を受け、意識を手放す。

それはあつという間の出来事であつた。

数分後、落ち着きを取り戻した職員が防犯シャッターを解除し、其処から意気揚揚と四人の男たちは出て行つた。

その五分後にようやく現場に到着した管理局局員が見たものは、両肩両股関節を外され、四つのバッグに詰め込まれていた四人の強盗犯の姿だけだつた。

本来なら新聞の片隅にしか載らない出来事であつたが、魔力資質無しの間人が、魔導師を倒したと言う事に時空管理局の魔法至上主義者は顔を歪めた。

魔力資質無しの間人が魔導師を倒してはならない。

その考えに固まつた者たち。特に本局の者たちは、直ちにその四人の搜索を地上本部に要請した。

しかし、そんな事に割く人員も費用もない地上本部はこれを一蹴。この事に本局は焦った。魔導師より強い存在は居てはいけないと言う本局は、ある部隊に搜索を命令するのであった。

だが、本局の者たちは別のことで焦っていた。

それは、捕えた魔導師のリンカーコアが消滅していた事である。

これでは折角確保できた駒が戦力にならない。そのため、本局は密かにその四人組を犯罪者として指名手配したのだ。

ただ強盗事件当時、銀行内のカメラはすべて機能を停止しており、魔導師の男のデバイスも記録が一切残ってなかったため、教員たちの目撃証言だけを頼りに彼らを懸賞金にしたのだった。

銀髪銀眼の男：三百万

特徴。腰まである長髪。眼鏡。ヴィヴィアンという女がいる。身長百八十以上。年齢二十代前半。

黒髪の男：五十万

特徴。右目が黒、左眼が白のモノクロオッドアイ。アタッシュケース。身長百七十前半。年齢二十代半ば。

金髪の男：五十万

特徴。琥珀色の瞳。身長百六十後半。年齢十代後半。

茶髪の男：五十万

特徴。黒い瞳。身長百七十前後。年齢二十代半ばから二十代後半。

事件当時銀行の職員たちも、混乱状態にあったため、これ以上の特徴を思い出す事は出来なかった。

そして、この四人の捜索には、偶然にも本局まで帰還していた、闇の書を消滅させた事件の解決者。アースラのクロノ・ハラオウン執務官が任命された。

そしてこれが、彼らと彼女たちの出会いと戦いの幕開けになるとは、管理局は誰も予想していなかった。

所でその四人組はその後如何したかと言うと……。

「おい！ もう少しタイミング良くバーントラップEX発動させる！ 当たってねえぞ！ ブレイバー」

「そつちこそしっかり敵の攻撃惹きつける！ 何の為に高いHPと防御だ！ ハンター！」

セイバーとシールドを手に持った銀髪の男と、両手にナツクルを填めた茶髪の男が罵りあいながら、紅の草原の支配者と呼ばれる二本の尾をもつ巨大な火を吐く原生生物と、戦闘を繰り広げる。

「チャージショットするからシフタ頼むわ」

「了解」

その後方ではライフルを担いだ金髪と、ウオンドを持ち傍らにマドウグを従えた黒髪が、原生生物の頭部を狙い打つ準備をしていた。

「よし。狙い打つぜ！」

フォトンの弾丸がその頭部に向かって放たれる。

「目標を駆逐してやる〜！」

セイバーからフォトンが解放され、そのスキルが敵に迫る。

「その巨体。破碎する！」

ナツクルのフォトンを解放しスキルが敵に向かう。

「フォースは楽でいいぜ……って。ぎゃあああああ！ こつち来たあああああああ！」

迫る巨体に逃げる。

此処は母なる太陽と三つの惑星を持つ『グラール太陽系』。

今日も彼らはお宝レファアイテムのために戦う。

第一話「降り立った者」（後書き）

どうも亜嵐です。

主人公勢の名前が出てきませんでしたが、それは次回までのお楽しみと言っ事です。

なお、お金の金額に関しては日本円と同等と考えてください。

第二話「邂逅する世界渡航者と時空管理局」(前書き)

誤字脱字があつたら御免なさい。

それと、なのは達の扱いが悪いかもしれませぬ。

いやな方はブラウザの閉じるをクリックで。

第二話「邂逅する世界渡航者と時空管理局」

第二話「邂逅する世界渡航者と時空管理局」 ワールド・ウォーカー

第12管理外世界「ダンディルス」。

ミッドチルダの十分の一と言う大気中の魔力の薄さと、三世代ほど遅れた文明。そして何より魔法技術及び文明が無い事からこの世界は、管理局創設の時代に既に発見されていたにもかかわらず、未だに管理外世界となっている。

97管理外世界「地球」の中世を思わせるこの世界の、とある町のとあるカフェに男はいた。

腰まである灰色に近い銀髪を首の所で一つに束ね、縁無し眼鏡をかけた男だ。

名をシルバルフ・カーナー。この世界に散歩に来ていた所、急にこの場所に呼ばれたのだ。

シルバルフの対面に座るのは、黒いローブで顔を隠した人物。

「で？ おれを此処に呼んだのは、何か依頼か？ ダンディルス」

狼を彷彿させるその瞳は、相手の正体を正確に見抜く。

ダンディルス。そう呼ばれた人物はローブのフードの下で小さく頷く。

正体はこの世界の意味。

世界には意思がある。

誰が言ったのかは分からないが、その存在は高次元体としてシルバルフは認識していた。

「貴方にどうしても採ってきて欲しい物があります。場所は「レイントス」と言う世界にある。星の息吹の結晶と呼ばれる物です」

フードの下から発せられた声は、とても清んだ女性の声だった。

「名前から察するに随分と大層な物のようだが？」

星の息吹の結晶。名前だけなら星の命の一部が詰まっていそうな代物である。

「近々、といっても数年ほど猶予はあるのですが、この世界で大規模な地殻変動が起きます。その際に発生する火山活動の動きを緩和させる事が出来るのが、その星の息吹の結晶なのです」

話を聞くだけなら、天変地異を押さえる事が出来る代物である。

「採ってくるのはいいのだが、その話はレイントスには？」

「いいえ。これから行くとういう時に、偶然貴方の存在を感知しましたので、私が行くより貴方に行ってもらった方が世界の負担も少

ないので、散歩中のところ悪いとは思ったのですが、声を掛けさせていただきました」

ダンディルスは頭を下げながら理由を話す。

「お願いします。この世界も漸くここまで文明を築き上げてきました。今此処で大規模地殻変動と火山活動が起きれば生物の半数以上が死滅しかねません。どうかお願いします。銀の世界渡航者、ワールド・ウォーカー神無銀狼」

銀狼。それがこの男の本名だ。シルバルフは世界に合わせて名乗った偽名である。

「分かった。よっぽどの事がなけりゃ、三日もあれば採って来れるだろう。受け渡しは世界境界間空間でいいか？」

「はい！」

フードの下からでも喜んでるのが分かるダンディルスの声に、銀狼は口元を緩めた。

その日、時空管理局本局所属の時空航行艦、アースラに一つの指令が届く。

「魔導師を素手で倒す非魔導師の搜索！」

その指令が届いた時、クロノ・ハラオウンは驚愕の表情をする。

偶然その場に居合わせた、高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、八神はやたとその他大勢も驚きを顔に表している。

魔力を持たない者が魔導師を倒す。これは時空管理局にとっては容認し難い話だった。

「馬鹿な！ 魔力を持たない人間が魔導師を倒せるはずが無い！」

もしこれが本当なら、自分たちの圧倒的優位が覆される事に他ならない。他の面々もクロノの言葉に賛同するように頷いている。

ただしシグナムとザフィーラはその考えに賛同的ではないようだった。

「魔導師を素手でか。一体どれほどの体術者が一度手合わせしてみたいものだな」

「主の守護獣の前に、男として拳を交わしたいな」

ザフィーラも素手で戦う者として一部思うところがあるらしい。

「何を言っているのシグナムさんにザフィーラさん！ 魔導師を素手で倒せる存在がいたら、私たちにとって凄く危険な事なんだよ！」

自分にフェイトという友達と、必要とされる存在をくれた魔法。

これが魔導師同士だったら、魔法で人を傷付けるなんてと少し怒

った程度だろうが、その魔法を使わないでとなると、まるで自分の魔法を否定された気持ちになり、なのはは憤慨した。

「なのはさんの言う通りです。魔導師を素手で倒せると言う事は、魔導師にとって非常に危険な存在。すぐに捜査を開始します」

もしその人物が魔力資質持ちだったなら、管理局に奉公させれば良かったのだが、情報では倒された魔導師の男が相手のリンカーコアが無いのを確認している。

魔法以外の技術と魔力以外のエネルギーはクリーンではない。よって廃絶しなければならない。

時空管理局本局が掲げる思考に染まった、リンディ達はその四人組の足取りを追うべく捜査を開始するのであった。

幸いにも彼らの行き先と思われる地名はわかっていた。

『パルム』と呼ばれる世界に彼らは向かったようである。

管理局が見つけていない世界ではあるが、無限書庫に勤め出したユーノに資料を請求すれば見つけてくれるだろう。あとは管理局の技術が在ればソコの世界に行くのは容易い。

そう考えてアースラは一路進路を時空管理局本局を目指す。

それから数日が立ったが、彼らは未だにパルムを見つける事が出来ないでいた。

そんな時であった。

「第38観測世界からロストロギア反応!？」

無人であるため観測世界となっている世界「レイントス」。ここで解析不可能なエネルギー反応を感知した、巡回中のアースラは、すぐさまそれをロストロギアと断定。

彼らはソレがなんなのかも深く考える事もせずに断定する。

魔力以外のエネルギーはクリーンではない。そんなエネルギーを使うのは質量兵器かロストロギア以外には考えられない。

魔法に凝り固まった彼らは、魔法以外のエネルギーを理解できないでいた。

それ故、ロストロギアがなんなのであるかも考えもしないのである。

ロストロギアはすべて管理局が回収し管理すべきである。

その考えに毒され染まったのはやフェイトも、それに賛同するのであった。

一向に進まない搜索を紛らわす為、クロノはなのは達をその世界に向かわせる事にした。

未だにリハビリ中のはやてとそれに付き添うシャマルとザフィーラ以外が、第38観測世界「レイントス」へと転送されていった。

そして彼らはそこで出逢う。

世界を助け、世界を救い、世界を殺す、世界の旅人に。

たった一人の少女の為なら世界を敵に回し、世界の為ならその世界の人類を滅ぼす、その存在に……。

ミッドチルダの五分の一の大气魔力と人間が住んでいない事から観測世界となっている世界。

この世界には原生生物以外には、知的生命体は存在していない。

そんな世界に、なのは達は侵入した。

「エイミー。ロストロギアの反応は何処から？」

執務官を目指し始めたフェイトには、指揮訓練を兼ねて今回のまとめ役をしていた。

『そこから十キロほど南下した所にある山脈地帯からだね。でもさつきから反応が揺らいでいるの』

「きつとロストロギアに何か以上があったんだ。早く行って回収しようよ」

「うん。ロストロギアなんて危ない物は早く回収しないと」

深く考えずに出てきた回収と言う言葉、しかし、その行為が一体何を起こすのか、彼女たちは理解していない。

なのは、フェイト、アルフ、ヴィータ、シグナムの五人は、反応のあった場所へと飛んでいく。

とある山中で、銀狼はある存在と出逢っていた。

漆黒の鱗に深紅の瞳を持ち、十メートルを越えるその巨体に人間を圧倒する力を内包した、この世界の覇者たる存在。

ドラゴンと人は呼ぶ。

そんな存在相手に銀狼は……

「ねえねえ、俺に君のその綺麗な鱗磨かせてくれない？」

ナンパをしていた。

ドラゴンもまた両手を頬に当てて、「やだ、綺麗だ何てそんな、照れちゃう」といった仕草でその巨体をくねらせていた。

端から見ればその光景は異様を通り越して非常識に他ならないが、当人たちは割と真面目であった。

銀狼は折角廻り逢えた別嬪に声を掛け、ドラゴンも久方ぶりに出逢ったオトコに少々興奮気味であった。

言わなくとも気付いたのであるが、このドラゴンはまだ五十歳を越えたばかりの若い雌である。

数が多いわけではないが、この世界に生息するドラゴンは雌の個体数が雄の五倍以上である。

繁殖期にならない限り遣って来ない同族の雄以外で、自分を雌と感じさせられた存在。

種族として強い雄の遺伝子が欲しい彼女は、銀狼に一目合った瞬間に惚れていた。

早く巢に『お持ち帰り』したい彼女は、銀狼にその身を寄せる。

と、その時であった。銀狼は遠くから此方に遣って来る存在に気が付き、視線を其方に向けた。

ドラゴンもまた、銀狼に次いで顔を遣って来る存在に向けた。

その者達は空からやって来た。そしてこう言う。

「時空管理局です。貴方をロストロギア不法所持及び、時空管理局観測世界への無断侵入の現行犯で逮捕します。今すぐ武器を捨てて投降して！」

ココに世界渡航者と時空を管理したい局は邂逅した。

ワールド・ウォーカー

つつまたせ

第二話「邂逅する世界渡航者と時空管理局」(後書き)

次回は多分戦闘……。

更新は週一くらいに遅いですので気長に。

それはそうと投降してから一日でPV三千超えた。ユニークも七百。

読者の皆様方には多大なる感謝を致します。

第三話「魔法不要戦闘術VS管理局式魔法」(前書き)

お待たせしました。

はっきりって戦闘シーンがかなり単純です。

第三話「魔法不要戦闘術VS管理局式魔法」

第二話「魔法不要戦闘術VS管理局式魔法」

第38観測世界「レイントス」

其処で起こった小さな戦いは、管理局に大きな衝撃を与える事になる。

Aランクオーバーの空戦魔導師五人。

対するはリンカーコア非所持の人間一人。プラス？ドラゴン

結果を見るまでも無く、射撃魔法の一発で相手を倒して終わり。

なのは達は勿論、アースラのクルーも結果は既に分かり切っているものだと、信じて疑わなかった。

対峙した両者に数秒の沈黙が流れる。

「ロストロギア？ そんな物俺は持ってないぞ。生憎この身に身に付けている者はすべて俺が製作した作品だ。故にお前たちが強奪したいロストロギアは持っていない」

対峙していた男。銀狼が放った言葉は、降参でも抵抗でもなく、否定の言葉だった。

「ふざけないで！ 貴方からロストロギアの反応があるのは確認済

みです」

銀狼と接触した時、フェイト達は即座にロストロギアの反応を感じていた。

「その、ロストロギア反応とは何だ？ 何をもってロストロギアなのだ？ ……相変わらず時空を管理したい局は捏造と自作自演と詐称が大好きと見える」

ロストロギア。それは管理局が理解、解析出来ない物の総称である。

銀狼は後半の言葉をフェイト達には聞こえないように小さく呟く。

「分かりました。貴方に投降の意思が無いなら、公務執行妨害の現行犯で逮捕します」

しかし、その言葉を抵抗としか捉えていないフェイトは、銀狼にフォトンランサーを一発放つ。

たったそれだけで終るはずだった。相手はリンカーコアも持たない人間。対して此方はリンカーコアを持ちAAAランクの魔力を持った『時空管理局魔導師』。

魔導師で無い存在が、勝てる筈が無い。

全員そう考えていた。

飛来する魔力弾。それを銀狼は冷めた眼差しで見つめ、スツと右手を上げる。

ペチン。

まるで虫を払うかのような動作で、フェイトの魔力弾は叩き落とされた。

『!!!???』

その場にいた者、モニター越しに見ていた者。その全員が驚愕に目を見開き、動きを止める。

しかしソレも、次の瞬間には彼女たちは更なる驚愕に襲われる。

右手を銃のように無造作に構えた銀狼は、その指先をフェイトに向け、

「ばぁん」

お遊びのような動作に、フェイトが上体を仰け反らせる。

まさに一瞬の出来事だった。

『フェイト（ちゃん）（テストロッサ）!!!??』

彼女たちは全員『何故』『どうして』という言葉だけが頭を埋め尽くしてた。

自分達はこの犯罪者を魔力弾一発で気絶させて、持っているロストロギアを回収（強奪）して、それで終わりのはずだった。

なのに魔力弾は虫の如く叩き落とされ、気が付けばフェイトが倒されていた。

落ちていくフェイトを尻目に、その間に銀狼は動く。

0・10秒も掛からない時間で、右脇のホルスターに収めてあった一丁の礼装銃を取り出す。

『アストラル』。

『精神』という意味をこめて名付けられた白い銃身に黒い装飾の自動拳銃を左手に、銀狼は狙いを赤いゴスロリ服の少女にむける。

発砲。

銃口からマズルフラッシュが発せられ、そこから発射された三発の弾丸は、狙い違う事無くヴィータの右腕と左わき腹を抉り、デバイスをその手から弾き飛ばした。

「ガアアツツ！」

『ヴィータ（ちゃん）！』

鮮血を撒き散らしながら地面へ落ちていくヴィータ。それをシグナムが追いかける。フェイトもまたアルフが追いかけていた。

間一髪地面に落ちる前にその身を抱き止めたシグナムとアルフは、なのはの方を見る。

フェイトとヴィータの身を心配した彼女は、銀狼を視界から完全

に外していた。

銀狼は既に次の行動に移っていった。

足元に落ちている五センチほどの小石を拾うと、振りかぶる。

「魔法のマジカルストレート！」

全く魔法でも、マジカルでもない投げられた小石は、なのはのデバイスをその手から弾き飛ばした。

「えっ？」

衝撃に右手を見れば、其処には何も握っていない手。

「レイジングハート!?!」

慌てて衝撃が来た方向とは逆の方を探し、地面に落ちていくレイジングハートを追いかけてその両手を伸ばす。

完全に銀狼に背を見せていたなのはは、後ろから迫り来るモノを認識出来ずにいた。

『なのは(高町)!!!』

アルフとシグナムから突然掛けられた声に、なのはは小さく驚くも、その意図を理解できないでいた。

レイジングハートを拾う為地面近くまで降りてきていたなのはの背後に、銀狼はいた。

「魔法の……」

その言葉に後ろを振り向くのはの目に映ったのは、

「棒切れ一閃！」

左薙ぎにした杖を握っていた銀狼だった。

「高町！ おのれキサマア！」

ヴィータを抱えたまま、シグナムは激昂する。

しかし、そんなシグナムを尻目に、銀狼は杖を上段に振りかぶる。シグナム達の方を向いて。

「レバンティン！」「プロテクション！」

アルフとシグナムは攻撃に備えて慌ててバリアを張る。

明らかに原始的で野蛮な男の攻撃。フェイトはどうやって倒されたのか分からないが、既に此方は二人もやられた。しかも、ヴィータは見るからに重症。こんな事はないと思っただがしかし、

ありえないなんて事はない。

この言葉が示すように、ありえない事が起こっていた。

「棒切れ、一閃」

振り下ろされた一撃は光をもって二人を呑み込んだ。

アースラに乗っていた管理局員は全員、驚愕にモニターから目を逸らす事が出来ずに、動きを硬直させていた。

AAAランク以上の管理局の魔導師（正確には囑託）三人を、二十秒とかわからずに倒し、さらに解析不能の力をもって、シグナムとアルフをバリアごと倒したその力に、リンディもクロノもその思考を停止させていた。

モニターの向こうでは、銀狼は手に持った杖を捨て、革ジャンの左内側に手を突っ込むと、其処から黒い銃身に白い装飾を施された質量兵器（自動拳銃）を取り出す。

その行動に、リンディは思考を取り戻し弾かれたように叫ぶ。

「まさか彼女たちに止めを！？ いけない！ クロノ、すぐに現場に跳んで！」

「しかし、今からじゃとても間に合いません！」

おそろくなのは達は殺されてしまうだろう。だが、犯人は捕まえる事が出来る。

しかし、銀狼はその銃口をこちら（モニター越しに）に向けた。

「サーチャー2、破壊されました！」

奉仕期間中のヴォルケンリッターの監視の意も含めて、なのは達には五機のサーチャーが付いていた。

とはいえ、サーチャーにはステルスの魔法が掛かっている。しかし銀狼は、空に漂う風船を撃つように、サーチャーを打ち抜いたのだ。

魔導師なら探索魔法で見つけられるかもしれないが、魔力も持たない人間がサーチャーを見つucker事など不可能のはずである。

だが、銀狼は次々とサーチャーを打ち落とす。そして最後の一機に銃口を向けた時、その視線を別の方向へと向けた。

銃をしまうと、銀狼は視線の方向に右手を銃のようにして向ける。

誰もがその行動に眉を寄せる中、『ばぁん』とフェイトの時と同じ事をした。

「ぐはっ！」

誰もが目を疑った。

リンディが椅子から『何か』弾かれたように転げ落ちたのだ。

『艦長！！』

慌てて駆け寄る局員を視界に収めながら、リンディは痛みのある右わき腹を押さえながら、モニターを睨みつけた。

『自分たちが使ってる技術を、魔法とか言ってる割には行動と思考と力と覚悟とおつむが、あまりにもお粗末過ぎやしないか？ 時空を管理支配搾取したい世界遺産強奪犯罪組織の方々さんよ』

サーチャーに向かって言い放つその姿は、大胆不敵。

時空管理局に対し、犯罪組織と啖呵を切るその様は厚顔無恥。

魔法を使わずに魔導師を倒したその姿は、管理局にとってまさに不倶戴天。

『丁度いい機会だ。自己紹介をしておいてやろう。ありがたいと思え』

銀狼の言葉に全員モニターを睨み付けるように見つめる。

『俺は世界連盟政府機関、平穩維持組織、他世界無許可不法介入犯罪組織、時空管理局対策部隊。魔法不要世界制作委員会、第十三副委員長。第八機動艦隊総司令官。』^{マギウス}『魔導師殺し（マードー）』の七篠檀上上座乃介天封師権兵衛特務少将である』

この言葉を理解できた人間が果たしてアースラにいたか。

『喜べ、時空管理局。待ちに待った貴様らの、最大級の天敵のご登場だ』

銀狼（権兵衛）はモニターの向こうで素敵に笑う。

と、いままで完璧に空気扱いだっただラゴンが声をあげる。

『ああ、待たせてごめんよレディ。君のつぶらな瞳に僕は今クマー
—————!』

奇声を上げてドラゴンに向かっていくと、ドラゴンは前足で銀狼をホールドすると、音を立てて飛び去っていった。銀狼の意味不明な悲鳴を残して……。

それから十分後、現場に転送されたクロノはなのは達を回収し、アースラに収容する。

既にその世界から、ロストロギア反応が無い事から、銀狼が盗み出したと断定する事しか出来ないアースラは、銀狼をS級次元犯罪者として広域指名手配をしたのであった。

しかし、ここで一つの難問が持ち上がった。

モニターに記録されていた銀狼の姿が、其処だけ修正液をホワイトぶちまけたようにモザイクが掛かっていたのであった。なのは達のデバイスの方もすべて同じような状態になっており銀狼の顔を表示する事が出来なかったのだ。

また、彼の言った組織、政府を各管理内外世界で調べ上げたが、ソレらしい情報を掴む事はおろか、噂を聞く事すら出来なかったのである。

時に新暦66年の初夏の出来事であった。

ちなみに銀狼には四千万の報奨金が掛けられた。

第三話「魔法不要戦闘術VS管理局式魔法」(後書き)

ちなみに銀狼が名乗った偽名は、
ななしの、だんじょう、かみざのすけ、てんほうし、ごんべえ
と読みます。戦国風でかなり適当です。
略して読むと、七篠権兵衛となります。
そう、名無しの権兵衛が元です。

報奨金に金額に関しては基準が分からないのでワンピースを基準に
考えました。

四千万なのはAAAランク四人を倒したと言う事で。
アルフは使い魔なので管理局が除外しています。

ついでに、今回銀狼をお持ち帰りしたドラゴンですが、実は人型に
なれる種族で巣に持ち帰った後は、銀狼のテクで逆に……という脳
内設定。

シーンは各人頭の中で妄想してください。
ちなみに人型はワールドデストラクションのあのドラゴン娘がデレ
たものだと思っておいてください。

では次回。

追記。

聖痕のクェイサーは新EDは何気にエロいと思った。

第四話「魔法不要世界制作委員会」(前書き)

第四話投降です。

話のほうはあまり進んでいませんが、それでもいいならどうぞ。

誤字脱字は報告され次第修正します。

第四話「魔法不要世界制作委員会」

第四話「魔法不要世界制作委員会」

第38観測世界「レイントス」での戦いから一週間がたった。

銀狼こと七篠権兵衛によって傷を負わされた、なのは、フェイト、ヴィータ、リンディは本局の病院で大事を取って入院していた。

アルフとシグナムは目立った外傷はおろか掠り傷一つ負っていないため、簡易診察だけで入院にはならなかった。

なのはも、銀狼の一撃は腹部への衝撃だけで彼女を気絶させただけの様で、一日の入院だけで済んだ。

外傷が酷いはずだったヴィータは、銀狼の弾丸が内臓を傷付ける事無く綺麗に貫通しており、三日と経たずに傷口は塞がり、一週間で退院出来るほどだった。

逆に酷かったのがフェイトとリンディで、フェイトは首をむち打ちされており、リンディに至っては右のあばら骨を三本砕かれていたのである。

骨というものは折れるとくっつく時により強靱になって治るようになっている。（作者も子供の頃に腕を折った事があります）ただ、骨の折れ方が複雑になればなるほど治癒には時間がかかる。今回のリンディの場合は複雑骨折よりも厄介な状態で、まるで自動車のサ

イドガラスのように骨が砕けていたのである。

なまじ魔法治療に頼り切りで、外傷を塞ぐ程度しかない治療魔法では、内臓系の疾患治療が殆ど出来ない管理局の医療技術では、リンディのあばら骨粉碎骨折に対して手の施しようが無かったのである。

生命操作技術やプロジェクトFの技術恩恵があっても、管理局では他の管理外世界や、科学技術発展型世界に対して、人体工学では遅れをとっていた。

管理局の治療法はあくまで魔法主体で、魔力と表層外傷程度しか治療できないのである。

そのためフェイトは二ヶ月、リンディにいたっては半年の入院を余儀なくされたのである。

「絶対に許さないの！ フェイトちゃんとヴィータちゃんとリンディさんに怪我をさせて、魔法も使えないのに力を振るうなんて絶対に間違っているの！」

アースラの食堂にて、なのはは握り締めた両手をテーブルに叩きつける。

許せなかった。

魔法が使えるようになって初めて出来た親友。自分の事を見てくれる本当の友達。そのフェイトを傷つけた七篠権兵衛。魔法も使えないのに力を振るう。管理局の管理する世界の平和のために力を使わない。

高町なのはは、先日的事件において自分たちから逃げた男を、不倶戴天の仇敵として悪態を述べていた。

そのなのはに賛同と言わんばかりに頷いているクロノ・ハラオウもまた、その顔を歪ませていた。

「管理局の人間でもない者が勝手に力を持って、さらには魔法を使わないで管理局の魔導師を倒すだなんて、こんなのは絶対に間違っている！　すぐにでもあの男を捕まえて管理局法で裁くべきだ！」

「そうなの！　あんな悪い人は今すぐ捕まえて刑務所に入れないといけないの！」

「まったくだ！　フェイトをあんな目にあわせたアイツは今度会ったら、ぶちのめしてギツタンギツタンにしてやるんだからね！」

ヒートアップしていくなのは、クロノ、アルフを余所に、隣のテーブルでは八神家が席に付いていた。

「それで怪我のほうは大丈夫なん、ヴィータちゃん？」

「全然平気さはやて！　弾は綺麗に貫通していたから後三日もすれば傷痕もなくなるさ」

そう言って、捲り上げた袖の下の腕は、僅かな色の違いを見せる

皮膚が有るだけである。

「それにしても、バリアジャケットを貫通するなんて、一体どんな銃を使ったのかしら」

「映像を調べようにもすべて白く塗りつぶされてて、解析もまともに出来なかったらしい」

首をかしげながらシャマルが謎を挙げるが、返ってきたのはシグナムの言葉。

「あの後現場に落ちていた石や枝も調べてみたが、何の変哲もない石ころと折れた木の枝だったそうだ。石はともかく、枝のほうは絶対何かあると思ったのだがな」

「ってことは、あの七篠って人の稀少技能^{レアスキル}ってことかいな？」

「おそらくはそうでしょう。でなければあの結果は納得がいきません」

稀少技能＝レアスキル。

管理局本局が、管理局の人員及び戦力確保をしている裏には、この稀少技能保持者を確保して、その力を管理外世界の管理に企む本局の思惑が有った。

希少性の高い能力を持った人間ほど、選ばれた存在である。だから管理局に入らなければいけない。世界を管理する為にその力を使わなければいけない。そんな考えに凝り固まった、本局の人間たちが掲げる夢想思考。

フェイトとシグナムの魔力変換能力。

はやての魔法蒐集能力。

ヴォルケンリッターの古代ベルカ式。

これらは管理局が、咽喉から手が出るほど欲しい能力の一つであった。

しかも当人たちは、魔力ランクも魔導師ランクも高いと一石二鳥。

されにフェイトに到っては、基礎理論止まりだったプロジェクトFの完成体。しかも、オリジナルとなった人間はリンカーコアを持たない人間。

もしフェイトの技術を利用すれば、リンカーコアのない人間のクローンでも、魔導師として『作り出す』ことが出来る。

高ランク魔導師を戦力として確保したい海の連中は、いちにもなく此れに飛びついた。

母親が生涯を賭け、ただ自分の愛した家族のために完成させた技術を、非人道的な事に使われているとはフェイトは知る由もなかったが……。

「にしても、世界連盟政府機関平和維持組織他世界無許可不法介入犯罪組織時空管理局対策部隊。魔法不要世界制作委員会第十三副委員長。第八機動艦隊総司令官。『マキウス魔導師殺し』の七篠檀上座乃介天封師権兵衛特務少将か……、つてか長すぎるわこの名前！ しか

もなんやねん七篠檀上上座乃介天封師権兵衛って、名無しの権兵衛の帕子名やんか」

「高町や管理局の人間は気づいていない様ですが、明らかに偽名だと私は思います」

「っていつか、間の檀上なんたらは何なんだ？」

「うちもよく覚えてないけど、前呼んだ『日本の偉人』って本の中に、織田信長の本名が似たような名前だった気がするな」

正確には織田弾正上総介吉法師信長になるが、これは官位と別名と幼名が一緒たになっており、別名と官位の時期が違うので、本当の意味でこの名前は正しくはない。詳しく知りたい人は国立図書館にでも行つて資料をあさってもらいたい。

はやての言っている事も少し間違っているのだが、十歳の少女が気付くには少々難問である。

「それで上の人達は、この組織をなんて呼称するんやろな」

「対策本部は魔法不要世界制作委員会の頭文字をとって『魔不世』^{マフセ}と呼ぶようです」

「なんや、マフティーみたいやな」

「まふてぃー？」

「うづん、こつちの話しや気にせんといて」

こうして時空管理局本局は『魔不世』討伐に乗り出すのである。

ちなみに『パルム』に関して発見できたのは、地球産のマルチアイスのパルムだけであり、製作会社に乗り込もうとしたのはと、それを止めるヴィータの姿があったそう。

とある管理外世界の宇宙空間。

「それで、アイツは俺たちの存在をバラしたのか？」

暗闇の中、複数の人影が会話を交わす。

「いや、アイツはそういう事は最後の最後まで取って置くタイプだ」

「しかも、死に際とか、去り際にその単語だけ残していくタイプだ」

「世界から聞いた話だと、なんでも『魔法不要世界制作委員会』とか名乗ったらしいぞ」

「管理局の対策本部は、『魔不世』と呼ぶようだ」

「どこの世界撲滅委員会や世界救済委員会だ」

「ちなみに名乗った後、ドラゴンの雌にお持ち帰りされたらしい」

「……。アイツらしいと言えはらしいが、もう少し如何にかならんのか？ あの人外種馬は」

「仕方ないだろう？ 人外フェロモンの持ち主だぜアイツ。おまけに人外愛護馬鹿だし」

「それに関しては放置プレイしとこう。それより問題は管理局だ」

「ああ。おそらく管理外世界や反管理局組織のある管理世界に強行武力捜査をしかねない」

「さすがにこれ以上他世界に介入されると、世界間のバランスに歪みが生じるぞ。今でさえ結構ギリギリの所で持っているって言うのに……」

「ふむ、ではいつそ魔不世を作るか？」

「作るのには面白そうだが、何をやるんだ？ コズモなんたらか？ それともソレスタルなんたらか？」

「この次元世界は、管理世界と管理外世界で分けられている。一部観測世界と呼ばれている所も在るが、殆ど管理局の管理世界扱いだ。故に……」

『故に？』

「管理するに値しない管理外ではなく、管理出来ない管理外。管理不可能世界を作り上げてみては如何だろうか？」

「……なるほど。管理できない世界。管理不可能世界か」

「あるいは管理不能世界、絶対不干涉世界と言ってもいいがな」

「んじゃ全部繋げて、絶対管理不可能不干涉世界とでも名付けますか？」

「まあ、名前は制作過程で名付ければいい。まずは時空管理局に『変革の楔』を打ち込む」

「ソレビーか？ 『宣言』はどうするんだ？」

「宣言はしない。制作は秘密裏に行なう。それと同時に奴らの行動を妨害する組織を作る」

「それなら名前は『次元を管理させない局』なんてどうだ？」

「悪くないな、いやむしろ同じ『管理局』なだけに、奴らを逆撫でさせるには都合がいい」

「それで『委員会』と『局』はどうするんだ？」

「委員会は俺たちが勤めればいい。局は管理外から勇士を募ろう。なるべくリンカーコアを持たない異能力者や超能力者、人外の種族がいい。人外の種族に関しては銀狼にやらせよう」

「じゃあ俺は兵器と科学を提供しよう」

「俺の方は超能力者を何人か連れてこよう」

「転生者や憑依者とかの、観測世界の人間が出て来たらどうする？」

「敵、味方、中立。このどれかを選ばせる。ただし、味方の場合は

一兵卒扱いだ。力と能力と実力と覚悟があつて、漸く班長か分隊長と言つた所だ」

「大抵の転生者つて若造が多いからねえ。下手に理想を掲げられても、口先だけしか語らない奴もいるし。偶に古強者が現れるけどそういうのは中立が多いな。中立者に関しては徹底的に不干渉を貫かせよう」

「たとえ能力がどれだけ特殊だろうと、創る世界はそれを『必要としない世界』だ。だが、行過ぎた世界でも駄目だ。ある程度は『才ある者が活躍出来るかもしれない』世界。そんな世界を目指してみよう」

「流石にそれつて無茶無理無謀のどれかつぱくね？」

「指針の一つ程度で構わない。ある程度で妥協しなければ世界は破滅へ向かいかねない」

「それもそうだな。じゃあ、まあ……とりあえずは楔約の四人を選びましようか」

誰にも知られる事なく、事態は進行していく……。

ミッドチルダから遙か遠く離れた世界、グラール。

「温泉温泉た・の・し・み・だ」

「おんせん おんせん」

「おいおい、あんまりはしゃぐと転ぶぞ。エミリア、ユート」

道行く一行の先頭ではしゃぐのは、金髪の少女エミリア・ミュラーと、部族の衣装に身を包んだ耳が尖がった少年ユート・ユン・ユンカース。その二人を追うのは髭面のむさい男「うるせえ！」クラウチ・ミュラー・ギツチョン。「だれがぎつちよんだ！」

「さっきから誰に言ってるのクラウチ？」

「いや、なんとなく……」

クラウチに声を掛けたのは翠の髪にユートより長い耳のじゅく…
…美女の、ウルスラ・ミュラー。

「私は温泉もイイけど、料理の方も気にナルヨ」

金属で出来た耳に、人工物とは思えない見事なオツパイと谷間の女性、チエルシー。

「俺としては、魚より肉が食いたいぜ」

「何言ってるのよ。温泉宿と言ったら魚よ」

「いや、肉だ」「魚よ」「肉」「魚」

子供と変わらない身長の二人組み。褐色肌のトニオ・リマとその妻リイナ・リマ。

「ぶるらあああ。なんで私が荷物持ちなのだ。納得がいかぬ」

若本ヴォイスで紅いボディに白い頭髮と額に角の男は、レンヴォルト・マガシ。

「子供に夫婦に女。男の俺らが荷物持ちなのは当然だろう」

マガシと一緒にあって背中に両肩両手に荷物を持つのは、銀髪銀眼の青年、ギンロウ・カンナ。

「ナノトランサーに入りきらない程の荷物を、最初から私たちに押し付ける気だったのだぞ」

「じゃあ、文句言って来い」

「それが出来たら苦勞はせんわ。あのキャストの女、フルエン・カーツより威圧があつたぞ」

「カーツの訓練時代の教官だったらしいぞ。二つ名持ちの」

「……………」

『はあああああああ~~~~』

目の前の現実には、思わず涙が出そうになる『紅の戦鬼』と『少女を救った英雄』。

「その二人何しているの！ 早く来ないと置いていくわよ！」

『だったら少しは『ナニ？』何でもありません！ すぐ追いつきます！』

ウルスラとチエルシーに睨まれて文句の言えない二人。

がんばれ、温泉宿までもう少しだ……。

母なる太陽と三つの惑星からなるグラール太陽系。

惑星ニューデイズにて、リトルウィング。社員慰安旅行の真っ最中だった。

第四話「魔法不要世界制作委員会」（後書き）

なんか書いていたら、なのはの扱いがかなり悪くなっていた。
でも後悔しない。

ヒロインに関してはクロスして持つて来るのもいいかと思っ
ていま

す。
コスモスとかMS娘&MS少女とかミクとかルカとか茶々丸とか
…。

武装戦姫？だっけ。これもいいけどキャラのほうをよく知らないの
で現在模索中。出来たら資料が欲しいです。

とりあえずヒロインに関して「狐の嫁入り」は基本かと…。

あと、MS少女はALICEをヒロインにしようかと思う。

人外っ娘ヒロイン。募集してます。

身長、体重、スリーサイズ、種族、その他を明記の上でよろしくお
願いします。

但し、性格に関してはこちらで変更する場合がございますのでご注
意願います。

牛乳戦車……いいよね。

追記。

A・C・E・RのOPムービーをサイトにて閲覧。

アーバレストどうやって空中戦やるんだ？まさか3のガチコみたい

になるのか!?

その前にPS3持ってない……。

画像ダウンで言いからPS2で出て欲しい。

第五話「変革の楔と世界渡航者（ワールド・ウォーカーズ）」（前書き）

お待たせしました第五話。

今回は主人公が出てきません。

相変わらず管理局フルボッコ状態。

設定云々は二次創作と言う事で反論は受け付けていません。

質問があれば可能な限り応えたいですが……。

いつもの如く誤字脱字があったらお願いします。

第五話「変革の楔と世界渡航者（ワールド・ウォーカーズ）」

第五話「変革の楔と世界渡航者達」 ワールド・ウォーカーズ

第6管理世界「エイユ」。

管理局創設時代に反管理局組織が数多くあつた世界だが、管理局の執拗なまでの組織殲滅交戦により、都市機能の八割と食糧生産機能の半数を破壊された事で、管理局の隷属世界へとさせられた世界である。

この世界は今も当時の戦争の傷痕が多く残されており、都市機能の三割を管理局から払い下げられた魔力動力炉に依存しなければならず、食料に関しても三割以上を他世界からの輸入に頼らなければ成らないほどである。

何故このような世界が管理外ではないのかは、この世界出身の人間に理由があつた。

ミッドチルダより三十%も多い大気魔力のおかげで、この世界ではリンカーコアを持った人間が生まれやすかつた。しかも平均してB/Aランクと、管理局にしてみればこれほど効率のいい魔導師生産世界はないと思つていたのである。

そして、長きに渡つて管理局に管理されてきたこの世界は、その思考も管理局のいい様に誘導、洗脳、操作されていったのである。

時に新暦66年秋。

この世界の港に居を構える、管理局本局の部隊の演習場にてそれは起こった。

ソレは新たにお披露目されたストレージデバイスの模擬戦が終わった時に起こった。

空戦AAランクほどの魔導師がターゲットを打ち抜き、悠々と地面に着地した時だった。

『未確認の魔力反応感知!』

オペレーターの声に周囲の人間はどよめくが、新型ストレージを持った魔導師は、おろかにも慢心していた。

そして、その者は現れた。

演習場から一キロ離れた地点。

人気のない倉庫。ソコに二人の男がいた。一人は百九十を越す長身。茶色の頭髮に琥珀色の瞳の二十代半ばの青年。名をゼクナム・シュティボルグ・マクローイ。

「こっちは準備完了だ。そっちはどうだ」

もう一人は百七十程度の身長。山吹色の頭髮に金色の瞳の二十歳前の青年。名はステイ「トレードィエンスフィールド」ブレイブハート。

「モウマシタ無問題だ。いつでもいけるぜ」

ステイが中国語で応えたのを軽くスルーして「すんなよ!」。ゼクナムは倉庫から出て行く。

手甲に具足、胸当てに肩当、そして腰には一振りの剣。なげ

御伽噺に出てくる、戦士か勇者のような格好は、風景に合っていないが、彼の姿は一部の隙もないくらいにそれを着こなしていた。まるで何百年も使いこなしてきたような……。

「ゼクナム「マクローイ。フェイズ1を開始する」

ドライブ オン
魔力 始動

今まで感知されなかった魔力が、ゼクナムから湧き出る。懐からバンプレみたいなサングラスを取り出しかける。

地面に少しだけ足跡を残して、彼は演習場へ跳び上がっていく。

「さてと、それじゃこっちもおつ始めるとしますか」

ステイの全身を放電現象が包み込み、その身を覆い尽くしステイの体は発光現象で見えなくなる。そして足元から放電現象は収まり、その下からは全く別の物が現れる。

熱核バーストタービンエンジンから得られる推力を、余す事無く放出できるスラストターバーニアと多数のマイクロミサイルとハイマニューバミサイルを内蔵した脚部。

可変駆動によりスマートな胴体と帯剣の鞘のように収納移動してあるウイングブレード。

ピンポイントバリア発生装置を内蔵してある腕と、その手に握られているのは毎秒五十発もの弾丸を吐き出すガンポッドと、戦艦の主砲にも耐え切る金属で出来たシールド。

バイザーゴーグル型のヘッドに頭頂部から後方に向かって伸びるレーザー機銃。

アドヴァンスド・ヴァリアブル・ファイター。VF-19Aバトロイド形態の姿がソコにあった。

色は無論レイヴンズ隊仕様の水色である。

「さ〜と。給料の分くらいは働かないとなあ」

ファイター形態への変形とともに、バーニアを噴かして上空へと飛んで行く。

演習場の真ん中、魔導師の正面に着地したゼクナムは、悠然と佇む。

「おいおい、何処のどいつだ？ ま、どっちにしる人様の領土に土足で踏み込んできたんだ。ただで済むわけねーよなー！」

デバイスの先端に魔力をチャージし始めた時、ゼクナムは駆け出すと同時に抜刀する。

「へっ、そんな時代遅れで野蛮なモノが魔導師に効くかよ！ こいつでおしまいだ！ クロスファイヤー！」

今まで幾つものターゲットを打ち抜いてきた、必殺の魔法を発動させる。

ゼクナムは既に眼前にまで迫ってきていたが魔導師の男はそれに慌てる様子がない。

信じて疑わないのだ。自分の魔法は目の前の相手を一撃で倒せると。

オペレーターからの念話によれば、相手の魔力量は精々Cランク。管理局の半数を占める魔導師の魔力と大差ない魔力。そして時代遅れの防具と野蛮な武器。

Aランクの魔導師の自分に勝てる筈がない。そう信じて疑わなかったアレハNST・コーナーサーワは、今日のこの日が命日になるのであった。

放たれた魔力弾をゼクナムは首を軽く倒して回避、右下から振り上げるように相手のデバイスを半ばから、右手をバリアジャケットごと一緒に切り落とす。

「へ？」

あまりの出来事に呆然となるアレハンスト。

目に前の空中には切り落とされた右手が宙を舞う。

ゼクナムはそのまま、上段近くまで降りあがった剣を顔の左で即座に構えなおす。

驚愕に染まり、切れた右手首を押さえようとするアレハンストの左手に向かって、振り抜く。

左腕が半ばから断ち切られ、鮮血を撒き散らしながら、重力にしたがって地面に落ちていく中、ゼクナムは一步踏み込む。

剣を切り返し今度はその切先は、脚部へと向かう。

「（俺は、AAランクで！）」

遅れてやってきた痛みと絶叫を上げながら、アレハンストは自身に迫る絶望のなかで叫んだ。

振り抜かれた刀身は、容易く魔導師の両足をジャケットごと断ち切る。

「（魔導師で！）」

反す剣の切先を、ゼクナムは持ち上げるようにしながら、さらに一步踏み込む。

残っていた四肢の右肩から先を切り落とされたアレハNSTは、その衝撃で胴体が空中に浮かび上がる。

切先は停まる事を知らず、ゼクナムは剣を左肩に担ぐように構え、もう一步踏み込む。

「(時空管理局なんだよ!)」

迫り来る刃は、寸分変わらずにアレハNSTの首に叩きつけられ、何の抵抗もなく振り抜く。

宙を舞う首と胴体の間からは鮮血が飛び散り、ゼクナムの全身を流血色に染め上げる。

地面に落ち、物言わぬ肉塊となった管理局の魔導師を全く目に留める事無く、ゼクナムは演習場の端にいた他の局員に、その視線を移す。

『ひいひいひい!』

血に染まったゼクナムの顔と視線の鋭さ、そして何より彼から発せられる威圧感に、局員たちは恐怖した。

「畜生! 今すぐアイツをぶっ殺してやる!」

「ハンスの仇だ!」

しかし、何人かの局員は、自分が時空管理局の魔導師だと、妄信してデバイスを起動させようとした。

だが、そんな彼らの所にも恐怖と悪夢はやってくる。

突如音の二倍の速度で飛来した何かが、局員たちの胴体や頭や手足、はたまた足元に炸裂した。

それは、厚さ数センチの鉄をも破壊する悪魔の兵器。ミサイル。

演習場の上空二千メートルのところに、ステイはいた。

ガウオーク形態で上空に静止し、カメラとレーダーを駆使して演習場の局員たちをロックオンしていた。

炸裂したミサイル群は、バリアジャケットを展開していなかった管理局の魔導師達に、熱と爆風の牙をむく剥き手足や頭部を胴体からちぎり飛ばし、ミサイルの破片が胴体に喰らいつき臓物を周囲に撒き散らす。

この混乱に乗り、ゼクナムは生き残った魔導師達を、そのバリアジャケット諸共叩き切っていく。

「ヒューッ　肉料理が食えなくなりそうな光景だななこりゃ」

常人なら発狂するか気絶するか嘔吐しかねる光景だが、ステイにとってはこのような光景は、既に何度も見られた光景であった。

非殺傷設定魔法に頼り切り、殺す覚悟と殺される覚悟がない管理局にとって、人の死はよほどの者でない限り縁がない事であった。

ましてや、戦争を知らない者たちが掲げる、魔法以外の兵器廃絶が自然と自分たちが魔法以外に対する対処法を放棄したに等しかつ

た。

故に彼らは質量兵器を、魔力無しの人間が自分達に刃向かわせ、自分達の魔法を認めない存在とし、尚且つ自分達にとって容易に脅威となる存在。

だから時空管理局は質量兵器廃絶を掲げ強行し、自分達の法を管理法とし、それを押し付け合法と言い他の世界を管理と言う侵略行為を今尚続けるのである。

「でも、この程度じゃ俺のサーカスは、幕切れしないぜ！」

脹脛にあたる部分から次々とミサイルを発射しながら、ステイは半径十キロの範囲をレーダーで索敵警戒する。

地上ではゼクナムが管理局施設の管制塔を、塔の根元から叩き切っている所だった。

まずは敵の目と耳を塞ぐ。戦闘において効果的な戦術である。

『ステイ。敵の目と耳は潰した。次は奴らの足を潰しに掛かる』

『オッケー、ゼクナム。敵の船は二マイル（約三・二キロ）ほど離れた港に停泊中だ。おっと、どうやら敵の増援のようだ。停泊所から四十、駐屯基地から八十。全員、五戦魔導師こ丁寧に蠅さんと来た』

ゼクナムの左耳には通信機が装備されている。ソレによる通信である。

『俺はこの場で基地の方からの敵を迎撃する。ゼクナムは敵の船を

斬ってくれ』

『分かった。敵との戦闘回避のため魔力は遮断する。全部そっちに任せる事になる』

『無問題、無問題。熱核エンジンのエネルギーが、あいつ等にとっちやロストロギア反応だ。ジャミングはカット済みだから多分こっちに来る』

『そうか、ところでステイ』

『なんだ？』

『敵艦を切るのはいいが、別に一刀両断してしまっても構わんのだろっ？』

『別に問題ないけど、その台詞はどちらかと言うと俺の台詞だぞ？
しかもソレ死亡フラグだし半分』

『……フツ。死ねるならな』

お互い口元をにやけさせながら、それぞれの目的のために行動を開始するのであった。

第6管理世界と同時刻。第24、31管理世界でも事件は起こっていた。

第24管理世界でもまた、時空管理局の時空航行艦の停泊港が襲われていた。しかし、この襲撃に地上部隊が動く事はなかった。

襲撃された場所が時空航行艦の停泊港だったため、海の連中が自分たちだけで解決すると言い、陸からの救援を拒否したのだ。しかも、海の連中は被害における救援活動を放棄したまま、襲撃者の逮捕のみに全力をあげていたのである。

被害にあっていたのは全て時空航行艦のみだったのだが、時空航行艦の破壊による二次災害で負傷しているのは非魔導師の局員達ばかりだった。

彼らは魔力を持たないため、デバイスを所持できず、バリアジャケットを纏うことも出来ない。

しかも、彼らを放置したまま犯人逮捕に向かうのは海の連中ばかり。何とか軽症だった者達が他の重傷者を助けている状態だった。

そんな中、海の魔導師たちは、現場にて絶望を味わっていた。

たった一振りの大剣を手に持った、二メートルを越す大男。顔の左半分は白い仮面で覆われており、上半身はノースリーブのジャケツトを着ているだけである。

魔力反応は一切なし、ロストロギアの反応も感知できない。相手は魔導師たちの魔法を全てその身で受けながら、一切歩みを緩める事無く停泊港を歩く。

射撃魔法は勿論、砲撃魔法も効いてない。拘束魔法は身動き一つで碎け散り、封鎖魔法もその手に持った大剣で切り裂き出てくる。範囲魔法や空間魔法に至ってはそよ風にもなっていないかった。

自分達の魔法が尽く通用しない。

ソレは自分達が築き上げて来たものが、全て無用の長物であることを指定しているかのようであった。

そして残念な事に、第24管理世界にいた海の魔導師には、近接格闘や近距離戦闘をできる魔導師がいなかった。

海の魔導師たちは全員、男が投げる音速を超えて飛来する大剣に、その体を上下左右に両断されて死んでいくだけであった。

襲撃から三十分と経たずに、停泊港の時空航行艦は全て大破轟沈。

それから数十分後に、生き残っていた局員の救援により、漸く駆けつける事が出来た地上部隊が見たのは、無残にも破壊し尽くされた時空航行艦と体を二分されて地面を紅く染める海の魔導師たちの死骸だけだった。

また、この襲撃によりこの世界の非魔導師と地上部隊は、海の連中が信用できなくなり、溝を作る事になる。

そして、第31管理世界で起こった、時空管理局時空航行艦停泊港襲撃事件も似たような結果で終わっていたらしい。

ただし、此方の場合は魔導師の死因が全て、質量兵器で頭部を打

ち抜かれての死亡だった。

三つの管理世界で起こった、時空管理局時空航行艦停泊港襲撃事件。

この事件における被害は、死者六百三十二名。重軽傷千四百十三名。時空航行艦三十七隻。

対して、襲撃者の被害はゼロ。

管理局史上において、此れだけの被害を一方的に受けた事はなかった。しかも、相手の戦力は合計でたったの四名。

相手の行動は全て時空航行艦の破壊が目的だったようで、犯人は全員共犯者であると本局は断定した。

しかし、甚大な被害が出たにも関わらず、この事件が他の管理世界はおろか、事件が起こった管理世界でさえも事件として取り上げる事はなかった。

自分達の体面と権威と威厳と尊厳と信用を問題視した管理局本局

の連中は、各管理世界の地上部隊に圧力を掛け、これを演習における訓練だと報道陣に報告したのだった。

なお、第6管理世界「エイユ」での魔導師死因は質量兵器による銃殺と爆殺だった。

そして、彼らの映像もまた、銀狼 七篠権兵衛 の時と同じように、すべて白く塗りつぶされていた為に、その人物像を確認する事が出来なかったのであった。

そのため、人物像は生き残っていた局員の証言を元に復元した、筆写画像を貼付する事しか出来ないのであった。

そして、時空管理局はこの事件を起こした四人をSランク次元犯罪者として広域指名手配するのである。

犯人それぞれの特徴から、鎧を着た男はその剣捌きから「剣士」、賞金三千万。

明らかに人間ではなく機械である、人型にも戦闘機にも変形するロボットを「機械人形」、賞金二千八百万。

魔法も効かない肉体と大剣を使う大男は「魔人」、賞金五千四百万。

質量兵器を何処からともなく取り出す男は「魔銃」、賞金五千二百万。

そしてこの事件を期に、時空管理局は管理外世界に対し、魔法以外廃絶を掲げ管理と言う侵略行為を開始する。魔法以外は在っては

ならない。そう称え……。

…。それが、自分が正義だと確信した妄信だと、信じて疑わず……

おまけ。

『は〜い。グラールチャンネルのハルです！ それでは今日のニュースをピックアップ！』

報道番組「グラールチャンネル5」のニュースキャスター、ハルがその日のニュースを伝えていく。

『先の「SEED事変」において問題視された資源枯渇。その問題に対し挙げられた亜空間航行理論。しかし、これも古代文明人カムハーンの謀略の所為で、現在は見送り状態。そこで挙げられたのが、

未だに多くの資源がその過酷な環境の大地の下に眠っているモトウブ。このモトウブに資源採掘に乗り出した企業たち。今日はその企業の一つ。先のカムハーン事件において功労者「リトル・ウィング」を取材してきました。それでは、ピク・アップ！」

以下は音声のみでお楽しみ下さい。

「父ちゃんの為ならえくんやこくら。母ちゃんの為ならえくんやこくら」

「キサマ。その歌は気が抜ける。やめい」

「うるせえ！ 歌でも歌わなきゃやってられんわ！」

「だったらもう少しまともなのはないのか！」

「じゃあ……。マガシは穴を掘る。ハイへ「それは余計にやめる！……え〜」」

「大体キサマが他の奴らをしっかり連れて来れば、私が動く事もなかったのだ」

「よく言っぜ。日がな一日VRTレーニングで電腦の化身クラックばっかやって、マザーブレイン凹って悦に浸ってる奴が……」

「キサマ何故ソレを！？」

「チエルシーとエミリアから。チエルシーはVRのログを見て、エミリアはお前がVRに行くのをユートから聞いてたそうだ」

「あの女どもめ……。ソレより他の男共はどうした」

「イーサンはカレンとニューデイズに温泉。レオは妻子とニューデイズに温泉。トニオはリイナと産休中。ユートはカーシュ族の村に帰省中。クラウチはウルスラにパルムに拉致られ。ヒューガはパルムで相変わらずナンパしているらしく捉まらなかった。シユウ親子は頭脳労働担当だから今回の仕事には向いていない。カーツは最近チエルシーに言われて同盟軍の再強化訓練で離れられない。ネーヴとダルガンは揃って腰痛でダウン。タイラーとボル三兄弟は運び屋の仕事が入ったりしい。以上他の野郎達が来ない理由だ」

「理由は分かったが、半分近くがガーディアンズではないか」

「仕方ないだろう。俺は四年前はガーディアンズにいたんだから…

……」

「さて、ソレは初耳だぞ」

「言っていないし」

「……」

「まあ、一応応援は呼んでおいた。二人捉まったからな」

「二人？」

「なに、もうすぐ来るはずさ」

『「ここかニヤ？ ギンロウが言った場所は」』

『こんな所にレアアイテムがあるとは思えんミヤ』

「ほら、来た」

「まで、まさかキサマが呼んだのは……」

「忙しい時は猫の手もなんとやらと言っただろう？ ……まで、なぜ TRUE HASHを俺に向ける？ 何故アング・ジャブロッガを放とつとする！？」

「ぶるらああああああっ！……！」

「ぎゃ~~~~~~~~~~~~っ！……！」

『ミヤ（ニヤ）~~~~~~~~！！ 落盤が~~~~~~~~！！』

落石や瓦礫と共に映像が切れる。

『どつやら資源採掘作業は、難航しているようです……（汗）
それでは皆さん！ また見てね！』

終わり……。

おまけ②。

リトル・ウィング。ギンロウのマイルーム。

「（ピキユンツ！）……っは！ ご主人様の身に何か、とても危険な（見逃しては損をする）出来事が、起こっている気がします！
これはさっそくチェルシーさんに頼んでモトウブに急行しなくては
！」

GH452「キャナル」。

銀狼の魔改造の所為で、非常によく出来た性格のパートナーマシンナリーに仕上がっていた。

「待っていて下さいご主人様！ 今、貴方の危機（非常に面白い出来事）にキャナルが参ります！！」

ちなみに彼女が作った『ご主人様観察日記』は、ブログネットにおいて週間チャート三位に入る人気であった。

マジで終われ……。

第五話「変革の楔と世界渡航者（ワールド・ウォーカーズ）」（後書き）

おまけに関しては、一切文句は受け付けていません。ってかしない
で（泣）。

本編より反応が良いのに複雑な心境ですが、楽しんでいただけてる
ようなら幸いです。

ヒロインに関してですが、久遠は筆頭です。

ただ、主人公を何時海鳴に行かせるかに悩んでいます。

ところで峰不二子のサイズって上から

99・9

55・5

88・8

でよかった筈だよね？

皆さんはバスト三桁超えの人外っ娘は駄目ですか？

最近、まかでみシリーズ読みながら萌えと魔法を復習中。
銀狼にはいつたいどの仮面をかぶせ様か……。

宣伝。

電撃文庫の「よめせんっ！」にて人外っ娘勉強中。

猫耳か……。モデルは誰が良いだろう。

質問。

ミッドチルダの金の単位って何？

円、ドル、ユーロ、元、ポンド、ウォン、ペソ、マルク……。

為替相場は日本円と同じで大丈夫だろうけど、通貨の単位が分からない。

第六話「動き出す者達」(前書き)

お待たせしました、第六話。

話の方はあまり進展してませんが、少し重要なお話です。

何時もの如く、誤字脱字があったらご報告お願いします。報告を
認次第修正しますので。

第六話「動き出す者達」

第六話「動き出す者達」

時空管理局本局。

「ええい！ まだ奴らは見付からないのか！！」

本局内にある会議室の一室で、一人の局員が机に手を叩きつけながら叫ぶ。

三つの管理世界での時空管理局施設襲撃事件から半月。

襲撃犯四人の情報を、各管理世界に流し目撃情報を求めているのだが、各管理世界からの返答はいずれも「いまだ発見できず」である。

「剣士」「機械人形」「魔人」「魔銃」と名称をつけられた四人の襲撃犯。しかも襲撃したのはいずれも本局の次元航行艦停泊港や駐屯基地。しかも事件で殺されたのは海の魔導師ばかり。

襲撃のあった管理世界の海の戦力は、その世界の地上部隊から引き抜いているので問題はないが、破壊された次元航行艦は修復不可能の状態なのが事の事態を難解にさせていた。船の動力炉と艦橋は完全に破壊され、格納庫や資材庫、食料庫にデバイスメンテ室も軒並み破壊されていたのである。

「例の四人は『剣士』を除いて魔力を持っていないため、見つけるのが困難なようです。ロストロギアで動いていると思われる『機械人形』に関しても、強力なジャミングとステルス能力を持っているらしく、ロストロギア反応で探しても見付かっていません」

「各管理世界の地上部隊は何をやっている！ 犯罪者の一人も満足に見つけられないのか！ これだから陸の奴等は無能揃いの穀潰しで困る。怠慢もいいところだ！」

悪態を吐く局員に賛同して、周りの局員も頷くが彼らは知らない。

各管理世界の地上部隊が、どれだけ苦勞して治安を維持しているかを……。

手柄や功績、ロストロギア回収や管理世界を増やす事しか頭にな
い海の者たちは、治安維持に掛かる勞力を紙面でしか捉えていない。

それに高ランク魔導師が少ない地上部隊では、魔導師による犯罪
に対して、後手に回らなければ対処できないほど人員も人材も不足
している。高待遇で海が無理やり引き抜いてしまふのと、超過労働
による過勞で殉職が後を断たないのである。

しかし、海はソレを地上部隊の怠慢だと罵る。

しかも、海の部隊は事件が起こる度に事件を横から攫って行く。
手柄と犯人だけを連れて。後に残っている事後処理は全て地上任せ
なのが殆どなのだ。

おまけに事件のたびに地上に協力を要請しながら、地上からの協
力要請には「忙しい」の一言で拒否していると言つ有り様なのであ

る。

「とにかく陸の奴らにはしっかりと命令しておけ。これは管理局の威信に関わる問題なのだから」

あまりに自分本位な考えだが、この場にソレを指摘できる者は存在しない。

「この次元世界は管理局が管理してやってこそ、真の平和を与えてやれるんだからな」

傲慢な考え、そして自分たちこそが正義だと信じて疑わず、ソレが他者にとってこの上ないほどに害悪で在ると理解していない確信犯な者達。

その思考が自分たちを破滅へと導く事を、彼らは知らない。

ミッドチルダ地上本部。

レジアス・ゲイズ少将。そう呼ばれる男がいる。

「ええい、おのれ！　またしても海の奴等は地上から戦力と人材を

攫って行くか！」

拳を握り締め、音を立てて机を叩くその形相は怒りに満ちている。先日起こった管理世界時空航行観停泊港襲撃事件。その損害における人員補充に、地上部隊の高ランク魔動師を軒並み連れて行かれたのだ。

しかも中には、逆らえば犯罪者にするなどと脅されて、已む無く移動していった魔動師たちもいた。

ミッドチルダの平和を守りたい。ただそれだけのために戦っている者達を、自分達の戦力と言う名の駒にする為に、半ば誘拐紛いで連れて行かれた地上部隊の局員たちの思いを、ソレは代弁しているかのようなのである。

毎年多くの者が管理局に入り、何人もが地上で働きたいと願う中、魔力ランクが高いと言うだけで、平気で本局に持って行かれるのことに、何度も苦渋を飲まされていたが、流石に今回は我慢の限度を超えるものだった。

地上部隊は高ランク魔動師がいなくなった所為で、違法魔導師犯罪に対して手をこまねいている事しか出来なくなり、この半月で犯罪の検挙率が大幅に下がってきているのだ。しかもソレに比例するかのように犯罪率は上昇。

このままではミッドチルダは無法地帯と化してしまう。

時空管理局のお膝元でありながら、犯罪が闊歩するなどと言う事になったら、目も当てられない。

間の前に打ち付けられた未来に、レジアスは頭を抱える。

「ワシはどうしたらいい。ゼスト、アラン」

思わず口にするのはかつて共に夢を語り合った友の名。

一人は今も首都防衛航空武装隊でその実力を発揮し、ミッドの平和に貢献し続けている。もう一人の友は、昔行方不明になって其れつきり音沙汰は無い。アイツの事だからきつとどこかで生きているだろう。そう思っていた。

「なぐに、こんな事も在ろうかと思って」

そんな言葉が口癖で、いつも二人揃ってアイツに振り回されていた。

「ああ、アイツはいつもそんな事を……」

さて、今の声は自分の幻聴か？

慌てて顔を上げ、声が聞こえてきた方へ向ける。

分かれた時と全く変わらない。

「オ、オマエは……」

いつも口元をにやけさせ、不敵に笑うその顔は今思い描いていた友人。

「何、鳩がアルカンシエル食らったような顔をしてやがる？ ってか少し見ないうちに太ったんじゃないのか？
レジラス」

灰色に近い銀色の頭髮。透き通った淡い銀眼。縁無し銀蔓の眼鏡を顔に掛けた人物。

「アラン！ アラン・スミシー！！」

「うおう！？ いきなり大声出すなよレジラス」

元時空管理局地上本部、第八特殊資料課、機動隠密非魔導師。アラン・スミシー一等陸士（M I A二階級特進）が其処には居た。

「鳩がアルカンシエルを喰らったら消滅して顔など判別出来んわ！」

「イヤ待て、何故そっちの突っ込み!？」

あまりの突然の再会。今までの感情よりも、思わずあの頃の癖が出てしまっていた。

「貴様。死んだのではなかったのか？」

「え？ 俺死んだ事になつてたの!？」

十年以上も昔、友人 いやこの悪友は ロストログアの暴走でM I Aとして死亡扱いになっていた。

「いや、実はあのロストログア、並行世界へ転移する代物だったらしくてさ、ほんの数日前に漸くこっちの世界に戻って来れたんだよ」

並行世界。其れは在りえたかもしれない可能性の世界。最も近くて最も遠い世界。

「エネルギーを貯めるのに二年もかかっちゃまったよ。しかし驚いたね。たった二年でお前さんが少将になるなんて」

「二年？ おいアラン。今新暦何年だ？」

ふと引つ掛かった疑問。

「何年てアレから二年だから……54年だろ？」

「……今は66年だ」

「……66？」

茫然とした呟きに、しっかりと首を立てに振ってやる。

「うっそおおおおおお！！！！」

目ん玉と舌が勢いよく飛び出た。眼鏡を突き破って。

相変わらず面白いリアクションを取る奴だったが、向こうの二年で更に磨きが掛かったようである。

「マジで！ 俺、浦島太郎！？」

誰の名前かは知らないが、おそらく似たような出来事を起こした人物の名前なのだろう。

「どろどろりでレジアスの顔が二年の割には、老け過ぎてて太りすぎてると思ったよ」

「まてアラン、何だその判断基準は!？」

「だってお前とゼストって、見た目以上に老け顔じゃん」

ぐさり、と少し気にしていた事を言ってくる。

「そっか、こつちじゃアレから十四年も経っていたのか。そう言えば奥さんとオーリスちゃんは元気？」

「……妻は五年前に他界した」

「……そっか。あとで墓の場所教えてくれ。オーリスちゃんは怎么样了。今66年だから18か？」

「ああ、オーリスなら……」

ドサリ。

開けられたままだったドアから、書類が落ちる音が聞こえた。

「え……? ……ウン」

入り口に立ったままの女性は驚愕し、その口から声が漏れる。

「いよう! オーリスちゃん!」

振り向いたアランは右手をシユタツと上げて挨拶をする。

十四年前と変わらぬ姿で、彼は戻ってきた。

幼きあの日、母に強請って連れて来てもらった管理局。

そこで出会った父の友人。一人は今も父の良き友人で、今も首都防衛航空武装隊で活躍するゼスト・グランガイツ。

そしてもう一人。母親とはぐれ迷子になっていた時、見たことも無い道具や玩具で、はぐれた寂しさで悲しかった心を慰め、暖め元氣付けてくれた青年。

それから、しばらく彼のもとに遊びに行くようになった。彼の所にはいつも、自分が見たことも聞いた事も無い者が沢山あった。そして幼かった心は、彼に淡い恋心を抱いていた。

しかし、それから一年と経たずに別れが来た。別の世界での任務中にロストロギアの暴走に巻き込まれ、行方不明となり、そしてMIAのまま死亡扱いとなり、任務中の死亡により殉職扱いで二階級特進。

父から死んだ事を聞かされた時は、大いに泣いた。泣き止んで訪れた彼の部屋が、既に何も残っていなかった時、寂しくなってまた泣いた。

それから十四年もの間、そんな悲しみをしたくない一心で、男との接触を避けてきた。最近では鉄面皮や冷血冷徹女などと呼ばれて

いるが、下手に仲良くなつて死に別れた時に、あんな悲しみはしたくないの思いで他者と距離を開けてきた。

そして、幼き日に見た彼の背中を追いかけたくて、管理局に入つた。

父親には反対されたが、せめて彼のような目に遭う人を出させない為に、そしてせめて彼が死んだと言う証拠を見つけたくて、情報資料を扱い管理する資料課に入った。そこで事務能力の高さを見込まれ、将官付きの秘書に命じられた。転属先が父親の下だったのは人事の計らいだろうか？ 仕事に合間を縫ってはロストログアなどの資料に目を通した。管理世界では完全否定されているオカルトの類の資料にも目を通して回った。

在りえないなんて事は在りえない

彼の口癖の一つだった言葉を思い出しながら、彼を見つける方法を探した。

中々有用な資料が見付からない中、父親の下に資料を運んで行く途中だった。

開け放しだった部屋の中から声が上がり、何かと顔を覗かせた時だった。

管理局の制服を着ていなくて、最初は部外者かと思ったが、その後姿は見覚えがあった。

そして何より自分の事を「オーリスちゃん」と言った。

自分の事をちゃん付けて呼ぶ人物など、この管理局地上本部には存在しない。尚且つ年上の男では、後にも先にも彼だけだった。

そして父は彼をこう呼んだ「アラン」と……。

「アラン……お兄ちゃん！」

気が付けば足が勝手に走り出していた。

恋しくて、切なくて、愛しくて、彼に向かって抱きついた。

今自分の目の前では、十四年前のあの日以来、滅多に泣く事も笑う事もなくなつた娘が、大粒の涙を流しながら友人に抱き付いていた。

泣いてはいるが、その泣き声は歡喜の泣き声だ。

娘の気持ちには気付いていた。しかし、それは叶わない物だとも何も言つたが、娘は諦めなかった。せめて死んだという証拠が欲しい。そう言つて資料に目を通す日々を送っていた。

事務能力の高さから自分の秘書として転属させてからも、其れは変わらなかつたから、ならばと権限と階級を与えとことんやらせようと思つた。

自分もどこかで望んでいたのかもしれない。せめて死んだという証拠が欲しいと……。

そんな矢先だった。管理局次元航行艦停泊港襲撃事件が起こり、

地上の人員と戦力減少に頭を悩ませていた時だったのだ。彼が戻ってきたのは。

「ごめんな、オーリスちゃん。たくさん心配懸けちゃったみたいだな。ありがとう」

「いいんです。アランお兄ちゃんが戻って来てくれただけで」

感動の再会に水を差す気は無かったが、何となく自分を忘れられる気がしてきた。

せめて自分にも、ごめんの一言も懸けて欲しかったなと思った。

「しかし、見ない間に随分と綺麗になったじゃないか。オーリスちゃん」

「そ、そうですか！？ あ、ああ、ありがとうございます！ それと私の事はオーリスと呼んでください。もうちゃん付けする歳でも在りませんし」

「そうか。分かったよオーリス。じゃあ、俺の事もお兄ちゃんと呼ぶのは止めてくれ。流石にこの歳にもなってそう呼ばれるのは恥ずかしい」

「分かりました。アランさん」

しかし、何だろうか？ この腹の底から沸き立つような感情は。

ああ、そうか。これが娘を何処ぞの馬の骨に盗られた父親の心境と言っやつか……。

「ウオツホン！」

思わず声を上げた自分は悪くないだろう。

「!? お、おおお、お父様!? 何時から其処に!?!」

「……最初からワシは此処に居たぞ」

もう、泣いてイイだろうか? ここで泣いた所でワシ、悪くないよね?

胸の奥で、心の汗をそつと流した。

「……話を戻すが、アラン。お前が最初に言っていた、こんな事もあるのかと、というモノを出してもらおうか?」

落ち着きを取り戻したレジアス・ゲイス少将執務室。

「あれ? 覚えてたの? まあいいや。モノと言っても資料の類だな」

テーブルを挟んでソファーに座ったレジアスとオーリスの前に、綴られた紙束が幾つも出される。

何処からとか、何時の間になどと言う突っ込みはしない。アランが何処からともなく物を取り出すのは、二人にとってよく見慣れた

光景だし、準備にしたところで彼は元々第八特殊資料課。書類制作など造作もない。

それぞれ手に取って、ページを捲って見る。

『……………！！！！』

二人の顔に驚愕の表情が浮かび上がる。

「アラン。……………これはまさか！？」

もし、この書類に書かれている事が事実なら、今の地上の現状を引っ繰り返す事が出来る。

「採用するかどうかはお前の判断に任せる。まあ、他の地上部隊の意見も聞いてみてくれ」

「聞くも何も、こいつは即採用だ。これに賛成しない地上部隊は余程の愚か者だ」

人員不足と戦力不足。両方が解決するわけではないが、少なくとも戦力を充実させられる事は確実だ。

「おそらく、海や空の連中の批判が激しいだろうが、地上部隊の現状をシツカリと教えてやれば、余程の阿呆でない限りは反対できない筈だ」

「ああ。だが、問題はこれの有効性と有用性をどうやって示す？資料や卓上理論では本局連中は首を縦に振らないぞ」

「それに関しては俺に一つ考えがある」

「考え？」

アランの言う考えに、レジアスは若干悪寒を感じた。

「作戦名は『ナイトメア・オブ・ダークネスの絶望と希望』作戦だ」

アランから作戦の概要を聞いた特、その奇策性に思わず頭を抱え
たくなった。

だが現状を打開する為には、どうしてもこれは必要な事であった。

そして時に新暦66年夏。

後に『闇の悪夢』として、時空管理局本局魔導師が最も恐れられ
る存在がここに誕生する。

ちなみにオーリスは、再会に浮かれてて、十四年来の思いを伝え
そこない、その落ち込みに思わずレジアスは、娘の不憫さにもう一
度、胸の奥で心の汗を流した。

ミッドチルダ、ベルカ自治領聖王教会。

その年聖王教会において行なわれた、カリム・グラシアのレアスキル『予言の著書』において、新たな予言が発表された。

人間の世界に舞い降りるは、渡り歩く者。

世界は彼の者に、安寧の闇を求めろ。

しかし、人間は彼の者を悪夢として恐れる。

リンカーの核は輝きを失い、砕け散りて魔より人を救う。

闇の悪夢はかの地に舞い降りて、無限の欲望を人へと導く。

魔に魅入られた人間は、魔に固執し、魔に見捨てられ、魔に滅ぼされる。

渡り歩く者達が織り成す、舞と踊り。奏でる神楽。

遊びの刻はやって来る。

しかし、教会と管理局はこの意味を理解できなかった。

ただ分かったのは、リンカーの核がリンカーコアを指しているのだから、と言う事くらいしか理解できなかった。だがリンカーコア

が砕け散るといふ事は、魔導師にとって何か重大な出来事が起こる前触れなのは判断できた。

そして何より、「魔」といふ言葉。解釈できない者達は、闇の悪夢がその元凶になると考えた。

魔とは一体何なのか？

百年以上に渡り自分達の技術を魔法と謳ってきた彼らは、魔法と言ふ言葉に魅入られていることも、固執している事も分かっていない。

キーワードになるのは渡り歩く者、闇の悪夢、無限の欲望、これが鍵を握る人物。

そして彼等は知るだろう。

魔法が何なのか、魔が何なのか。

おまけ

すでに、四回目になるファンタシスター小話。

今回はネタ不足のため一発ネタでご勘弁を。

マガシ。

「テクニクなんざ使ってんじゃねえええ！」

「じゃ、レスタ使ってんなよ」

イーサン。

「愛と怒りと悲しみのお！ イーサン・ウェーバー・ソード……！」

「次はナツクルでフィンガーか？」

ルミア&ルウ。

「エッチなのはいけないと思います。ところでギンロウさん、ご飯はまだですか？」

「三杯目はそつと出せよ」

エミリア。

「マドウーグ殴ってテクニクを使えば、ディバイン・バスター出来るかな」

「先にナツクル使えるようになれ」

トニオ

「誰がウルトラ豆粒ドチビーストだところらあ！」

「小ビーストとしか言っていないだろうが」

クラウチ。

「軍事会社は戦ってナンボ。社員は働いてナンボなんだよ」
「だったらテメエも働け」

ウルスラ。

「クラッド6、HTBCシークエンス開始！」

「変形できても合体は出来ないぞ」

チエルシー。

「私も昔八『紅の殲滅姫』と言われていたことがアルネ」

「道理でカーツが恐れるわけだ」

カレン。(ミレイ)

「さあ、皆さん。精霊に祈りを込めて歌いましょう。グラールの平和を願って」

「何故に歌？」

シズル。

「やはり活動する時は仮面を被るべきか」

「何処に反逆する気だ」

おわり。

不調だ……。

第六話「動き出す者達」(後書き)

おまけに関しては完璧に中の人ネタなので、あんまり突っ込まないで下さい。

カリムのレアスキルのプロフェーティン・シュリフテンですが、漢字表記が分からなかったので適当に付けてあります。

ちなみに作者は次回予告をしても、平気で次話の内容を変更する性格のため、基本的に次回予告はしません。

と言っておきながら次回予告もどき。

「始めましてだな。時空を管理したい局」つつもたせ

「誰ですか！？ あなたは！？」

「神無銀狼。貴様らの存在に心を怒らせた男だ！」

ついに邂逅する銀狼と管理局。七篠権兵衛とばれないのはご都合主義。

「馬鹿な！地球に魔法文明は存在しない筈！」

「たかが百年程度の組織が、五千年以上の歴史を持つ地球の何を知っている？」

千年以上培われて来た陰陽術を管理局は理解できない。

「世界を管理する為に武力を行使する。侵略行為と変わらないぞ時
空管理局」

「管理局が管理してやっているから、平和を与えてやっているんだ
ぞ！」

「その考え自体が傲慢そのものだ。誰も貴様らにそんな事を頼んで
ないし、思つてすらいない。貴様らの存在そのものが鬱陶しい、こ
の世界から居なくなれ！」

己の罪を自覚できない確信犯たちは、世界から拒絶される。

「ジャアアアアアアアステイスウウ！ 地獄、魔導師殴り！」

「お前はジャステイス地獄武術^{アーツ}使い！」

「私は、己が信念を貫く漢だ！」

そして現れる、謎のジャステイス地獄アーツ使い。

次回、魔法少女リリカルなのは〜ザ・ウォーカーズ〜

第七話「ミリオン・マスターとジャステイス地獄アーツ使いと時
空管理局魔導師」

多分題名は変わる……長いから。

追記。

ちよつとした雑学な国語授業。

確信犯とは、自分のやってしている事が正しいと信じてやっている。

自らの正当性を信じてなされる犯罪のことを言う。

罪の自覚や悪しき行為だと自覚している者は、確信犯ではないので注意。

学がある、学がない。「学」とはまなぶと言う意味。学がないは正確な意味は学ぶ事がないと言う意味。学があるとは学ぶべき事があると言う意味。

教養や学力がないと言う意味で、学がないとは実際は使えない。教養もしくは学力ときちんと言わないといけないので注意。

「学」を「学ぶ事」と捉えると、「学がない」は「もう学ぶ事がない」と言う意味になるので、「学がない」人間はこの世界には存在しない。

千葉トロン先生直々の教え。皆もよく覚えておいて卓袱台！

落語家などに聞くと詳しく教えてくれます。

では、また。

第七話「海鳴市での邂逅」(前書き)

お待たせしました。

今回、かなりの独自解釈と独自設定があります。

だから最初に謝っておきます。

いろいろとごめんなさい。

誤字脱字がありましたら、何時もの如くよろしくお願いします。

第七話「海鳴市での邂逅」

第七話「海鳴市での邂逅」

第97管理外世界「地球」。

管理局期待の新星、高町なのはが生まれた世界であり。また、夜天の魔導書の所持者八神はやてが生まれた世界でもある。

時に新暦66年秋。

高町なのはは管理局の嘱託魔導師ではあるが、それと同時に彼女は義務教育課程を終えていない、小学四年生なのである。

「なのは、最近どうしたの？ 何か元気無いみたいだし。また前みたいに魔法の厄介ごと？」

休み時間に机に座ったまま、ぼくっとしていた所に声を掛けてきたのは友達のアリア・バニングス。彼女の後ろには月村すずかの姿もあつた。

「あ、アリサちゃんにすずかちゃん。うん、この前任務でちょっとね……」

親友のフェイトは漸く首のギブスが取れて、リハビリ運動中だが、リンディは未だに病院から退院できていない。

親友と自分の能力を必要と言ってくれた人を傷付けた男、七篠権兵衛。この男を捕まえてお話をしたいなのは、寝る間も惜しんで仮想トレーニングをしており、最近少し寝不足気味なのである。

「魔法が使いたいのも、管理局の仕事がしたいのもいいけれど、少しは学校の方にも顔出しなさい」

「はいこれ、この前の授業の写し。なのはちゃん最近授業に遅れ気味だから気を付けないと駄目だよ？」

「うん、ありがとう」

此処最近のなのはの学力は、算数を除いて下がる一方だった。

しかしそれも、学校をまともに行かずに管理局の仕事に従事していれば当然の結果だった。

「また前みたいに、夏休みに補習で登校する事になるわよ」

「うにゃああああああ。それを言わないでアリサちゃん」

ちなみに補習は国語と社会。理科は何かセーフだったが、この二つ、特に国語に到っては壊滅的な点数を取ってしまい、兄から力ミナリを貰ってしまったほどだった。

「そう言えばそろそろ運動会だけど、二人は何の種目に出るか決めた？」

季節は稔りの秋。食欲、芸術、運動、読書と色々な秋があるが、

小学生の彼女たちにとっては、すぐ其処まで迫った運動会に関心が行く。

しかし、哀しいかな。高町なのはにとって運動会は、自分の運動能力の低さを公表する、非常に屈辱的な行事なのである。

「私はとりあえず借り物競争と二人三脚ね。すずかは短距離走とリレーよね」

「うん。それと障害物競走もだよ」

楽しそうに会話をする友達二人。

それを横で眺めながらなのはは、マルチタスクで七篠権兵衛対策の為に、仮想シュミレーションをするのである。

だが、魔法で戦おうとする限り彼には絶対に勝てない事を、彼女は知らない。

名は存在を示すもの。そしてそれが偽りなら、存在そのものも偽り。

彼の名は、名無しの権兵衛。

故に彼は存在そのものが偽りで、彼の言った事もまた偽り。つまり嘘なのである。

あれ以来七篠権兵衛の情報は無い。アースラは今も七篠権兵衛を探しているが、他の次元航行艦の部隊は、先の事件の管理局次元航行艦停泊港の襲撃犯捜索に余念が無い状態なのである。

実際の所は本局の幹部らが、なのは達と「剣士」たちと接触して倒されては困るので、アースラにはリンディのみ、襲撃犯の情報を渡されている。

しかし、現在リンディはベッドの中。そのためなのは達は現在地球で待機状態となっている。

何よりなのは達は、将来有望な時空管理局の駒となると考えている本局上層部は、こんな所で潰されては困ると考えているのである。

夢想家や理想家、野心家が蔓延る時空管理局本局。現実を見ない彼等は、魔法にその幻想を重ねるのである。そしてまた、魔法に魅入られそれしか取り得がないと思ひ込み固執し、少女もまた魔法に幻想を見るのである。

魔法。なんとも甘美な響きを齎すソレは、容易く人の心を侵食するソレはまるで麻薬のように、しかし、人は一度依存してしまうと抜け出せない。そして、己が破滅へと導く……………。

場所は変わって海鳴市八束神社。この神社には一匹の妖狐が住み着いている。

その狐の名は久遠。遙か昔にこの地の霊脈と月の精気が集まり、ソレが意思を持ち姿をとった存在。

「くうくん」

一匹の子狐が、銀狼の膝の上で撫でられる。

アースラを監視がてら弄り遊ぶ為に地球の海鳴にやってきた銀狼は、海鳴の地脈が異様に傷付き乱れている事を知った為、地脈を直す為に霊脈が集う八束神社までやってきたのである。

そこで乱れた霊脈の影響で凶暴化した久遠と遭遇。なんとか沈静化させたら懐かれたという次第である。

それがおよそ三日前の話。

最初は久遠をよく知る者達は銀狼を警戒していたが、銀狼の戦力や術者としての技量、そして何より久遠を全く恐れず、傷付いた彼女の体を癒し、それどころか抱きしめて謝る姿に心を打たれた位だった。

そして銀狼は久遠をよく知る関係者たち、さざなみ寮の者たちに受け入れられたのである。

久遠の毛並みを撫でながら、銀狼は三日前の事を思い出す。

雷を撒き散らしながら力を振るう久遠と対峙した時、狂った瞳の中に彼女が助けを乞う声を聞いた。

誰も傷付けたくない。

誰か自分を止めて欲しい。

誰か私を殺して……。

大地から彼女を助けて欲しいと願う想いを感じた。

天から彼女を救って欲しいと言う意志を托された。

自分には力があつた。ソレを成し遂げるだけの知識、技量、経験もあつた。

そして何より、こんな娘を助けたいと思つ心があつた。

ソレに何より、人外っ娘は俺の嫁という下心と煩惱と欲望と願望が湧き上がった。

久遠のことを管理局に感知させる訳には行かない為、結界は嚴重に張つた。

一時間ほどの死闘の末、久遠を沈静化させ、乱れた霊脈の力を浄化させたのである。

現在は久遠の療養と、地脈の修復の為に神社に足を運ぶ毎日である。

幸いにも管理局は今回の事を感知出来ていない。

その事には安心できたが、逆に久遠が凶暴化した原因の地脈を傷

付けたのが、一年程前に立て続けに起こった管理局が関わった事件だと、地脈の記憶を読み取って知り、怒りを覚えた。

しかもソレをやったのが先日邂逅した小娘ども。

事件の解決だけを優先して、その後の事後処理をまともにはやっていない。

自分達を使う技術を魔法と称して置きながら、何一つ奇跡を起こせていない事に殺意すら芽生えた程であった。

リンカーコアと呼ばれるエネルギー蓄積生成機関と、プログラムによる運用行使技術。

魔力と呼べない地脈に害を与えるエネルギー。

とても魔法と呼べる物ではなかった。

『リンカー術』

彼等のソレはそう呼んだほうがいい代物だった。

名前はリンカーコアとそのエネルギーをプログラムで行使する技術だから。

あの傲慢な連中にはこっちの方がお似合いだ。

既にリンカー術に対しての対策も出来た。

術式を壊す気功術と、エネルギー分子運動を抑制するリンカージ

ヤマー（種のNジャマー似の効果）を発動する装置。さらにデバイスの機能を停止させる特殊電磁波発生装置。ついでに作ったイナーシャルキャンセラー（ベルト&ブレスレット型）。おまけにリンカーエネルギー消滅金属を表面加工に施した銃弾三百発（パイソン仕様）。

これだけあれば三個中隊は相手に出来る（銃弾の数が三百しかない為。弾丸が無限なら一個師団）。

もう三日も足を運べば、久遠の療養も、地脈の修復も終わる。

地脈に関しては長期に渡る修繕が必要不可欠な為、それ様の道具を巫女に渡す予定である。

今日はこの後は他の霊脈の修理と、喫茶店翠屋でのシュークリーム購入を予定している。

「さてと。それじゃ俺は一旦、他の場所の霊脈も見てくるから、久遠は少しここで留守番しててくれな」

「くうくん。行ってらっしゃい、銀狼」

銀狼の膝の上から体を伸ばし、その頬を舐める。

銀狼はそれに応えるように、久遠の額に接吻をする。

「土産にシュークリームを買って来る。待っていてくれ」

狐で在りながらも久遠は稲荷寿司などより、大福や饅頭が好きという現代っ娘な狐である。

靈脈を利用しての療養中の久遠は、まだ八束神社の境内から出すわけにはいかない。

その代わり銀狼はここ三日は、八束神社の社で寝泊りしている。

銀狼から溢れ出す靈力もまた、靈脈の修復に利用しているのである。

もつとも、泊まった初日の夜に、美女姿の久遠に唇を奪われたのは「愛嬌だ。無論デープで……」。

帰ったら毛繕いもしてやろう。

そう思い、「蔵」の中から櫛を検索しつつ、銀狼は海鳴の町へと繰り出す。

オートバイに跨り、海鳴各所の交差点と公園を巡り地脈の簡易修復を終え、駅前で購入した観光雑誌の案内にしたがい徒歩で翠屋を目指す。バイクは蔵の中に収納だ。

途中で誘拐されそうになってた金髪の少女を助け、これまた誘拐されそうになってた紫色の髪の少女を、一緒にいた従者諸共助け、不良に絡まれてた車椅子の少女を助け、横断橋の階段から転げ落ちかけた金髪の女性を助け、河で溺れてた少年を助け、引っ手繰りを

捕まえてハンドバッグを取り返してあげて、トラックに轢かれそうだった青年を助け、道に迷った三毛猫に方角を教え、ようやく銀狼は翠屋に辿り着く。

「なんか此処に来るまで随分と冒険をした気がするな……」

助けた少女、女性、少年に関してはヒーローの如く立ち去り、青年はなにやらテンプレやらなにやら騒いでいたが無視し、三毛猫はお礼にと開關医院と言う所の診察割引券を貰った。

「そう言えばあの三毛猫、猫又だったが……まあ、いいだろう」

残念ながら猫又は雄だった為、銀狼の触手には引つ掛からなかった。

ようやく辿り着いた、喫茶店翠屋。しかし、銀狼はここで視線を感じた。

知覚察知で場所を特定。翠屋正面入り口、高度三十メートル距離五十メートル。エネルギー反応、リンカーエネルギーと確認。術式反応ミッド式。管理局の監視衛星リンカー術、サーチャーと確認。

それと同時に、あいだの電線に雀を確認。

振り向きながら雀を探し、視認。

雀に視線をやりながら、視覚範囲内にてサーチャーを視認。

左掌に蔵の門展開。パチンコ球三発取り出し、一発を折り曲げた人差し指の内側に挟み、親指の爪の上に置く。射線確保。目標補足。

発射。

ビツ、と小さな音を立てて、親指によって撃ち出されたパチンコ球は、音の二倍の速度で目標を撃ち抜く。

ソレを視覚内で確認すると、銀狼は翠屋に入っていく。

久遠への土産は、シュークリームとショートケーキでいいか……。

艦長不在のアースラは現在、その息子のクロノ・ハラウン執務官が、艦長代行を務めていた。

アースラのキャプテンシートに、その小さい体を押し込みパネルボードを操作しながら、情報を整理していく。

現在のアースラに与えられた任務は二つ。一つは七篠権兵衛の捜索逮捕。もう一つは八神はやての保護観察。

そんな彼等の下に、一つの報告が挙がる。

「何？ 翠屋を監視していたサーチャーが壊された？」

「はい。サーチャーが壊される直前の映像には、男が一人写っているだけなのですが、少なくとも五十メートル以上離れた場所からの監視の為、壊す手段が無いはずですよ」

ただの人間に、五十メートル以上離れた物体を壊す事は出来ない。そう思ったクロノはその男が魔法を使ったのではないかと考える。

管理局の許可無き魔法の使用は、犯罪であり重罪だ。

クロノはその男を犯罪者として逮捕しようとする。しかし、その考えは実る事は無い。

「魔法を使って壊したのか？」

とりあえずその男が魔導師かの確認を取っておく。後は男を逮捕するだけだ。

「いえ、映像に解析を掛けたのですが、男からは魔力どころか、リンカーコアの反応もありませんでした」

「じゃあ、質量兵器か!？」

魔法でないなら、質量兵器しかありえない。

「いえ、直前の映像にも男が何かを使った様子はありません」

そう言ってもモニターに映し出されたのは、銀髪銀眼に眼鏡をかけたジーンズとジャケットを着た男。

偶然にも、サーチャーの方向に振り向いた瞬間だ。

「この映像の三秒後にサーチャーは破壊されましたが、男はサーチャーを発見したようではなく、原生生物の鳥を観察する所だったようです」

それもそうだ。リンカーコアも持たない人間がステルス魔法が掛かったサーチャーを見つucker事など不可能だ。

だが、では何故サーチャーは壊れた？

その疑問がクロノの頭に残った。しかし、何も思いつかない。

「とりあえず、その男を此処に連れて来て話を聞こう。抵抗するようなら攻撃しても構わない。その時は公務執行妨害で逮捕しろ」

自分が正義だと信じて疑わない確信犯のクロノは、局員に指示を出す。局員たちもクロノの判断に疑問を持たなかった。彼等もまた、クロノと同じ考えだからだ。

「一応なのはにも連絡を入れておいてくれ。シグナムとヴィータにも出てもらおう」

この判断と行動が、一体どんな結果になるのか、知る者は居ない。

この場に居る全員が思っているのだ。何の問題もなくこの男を此処に連れて来れると……。

久遠への土産のシュークリームとショートケーキを詰めた箱を右手に、銀狼は道を歩く。

テイクアウト用の箱には、夏用にドライアイスを入れる事が出来るので、八束神社までの道程で傷む事は無いだろう。

銀狼が道程短縮の為に公園に入った時であった。

突然周囲から人が居なくなり、空が灰色に変わったのである。

「何だ？ 結界？」

周囲を見回し、上空を見上げる。

薄っすらとはあるが、リンカー術の反応らしきものが、銀狼を中心に敷かれているのが分かった。

「中心に俺が居るって事は、……狙いは俺か」

ジャケット内側に左手を入れると、懐から取り出したように見えるように、蔵から伸縮式スタンロッドを取り出す。

手首のスナップで展開させると、逆手に持ち辺りを警戒する。

おそらくこの結界を張ったのは管理局。

公園に入る前から誰かが付けている事は分かっていたが、あまりにも稚拙でお粗末な尾行だったので無視していたのだが、公園に入った所で行動に出たようだ。

上空から接近する三つの気配を確認。

見上げると其処には、なのは、シグナム、ヴィータの三人が佇んでいた。

「こちらは時空管理局です。武器を捨てて投降して下さい」

行き成り人を結界で隔離しておいて、こっ来たもんだ。

「子供がこんな時間にこんな所で何をしている。お前が保護者か？
ピンクポニー」

「び、ピンクポニー！？」

銀狼の言葉にシグナムが顔を引きつかせる。

「今日は休日や祝日でもなければ、土曜日でもない。子供を連れてこんな所で何をしている、と俺は聞いている。この付近の学校は今日は休校日では無い筈だ」

「わたし達は管理局です。あなたには重要参考人として一緒に来てもらいます」

「戯けた事を抜かすな、小娘^{ガキ}」

銀狼の怒気の籠った声に、なのはは思わず怖じろぐ。

「この日本に管理局と名の付くものは、国際空港の入国管理局のみだ。そして其処は貴様のような小娘が働ける場所ではなく、空港内

のみでしかその権限は持たない。それに何より、俺が貴様等に従わなければならない義理も義務も道理も存在しない」

「生憎だが此方にはある。抵抗するのなら公務執行妨害で逮捕するぞ」

怒気にたじろぐなのはの前に、シグナムが庇うように立つ。

「貴様等の都合など知ったことか。それに日本では公務に付けるのは義務教育課程を終えた者だけだ。それに逮捕権は警察のみが持つことを許されている。そして、今の貴様等の行いは権力詐称罪だ。警察だと言っなら警察手帳を見せる」

『……………』

銀狼の正論に、何も言う事が出来なくなる三人。

「待ってもらおうか」

「何だ、ガキ」

銀狼の後方に降り立ったクロノに、振り向かずに挑発的に言葉を投げつける。

「…………君の言いたい事は分かった。その三人では説明は難しいから、僕と一緒にきて欲しい」

「断ると言っている。生憎とガキの戯れやお遊戯に付き合っている暇も無い」

「既に君は包围されているんだ。無駄な抵抗は止めて大人しく降伏して投降しろ」

右手に持ったデバイスを突き付け、先端にスフィアを形成する。

あまりに傲慢な物言いに、思わず銀狼はため息を吐く。

左の人差し指を額にやり頭を左右に振り、右手に持ったままだつたお土産の箱を地面に置く。立ち上がる時に右足で軽く、地面を叩く。

「貴様ふざけるな！ 公務しつこくはっ」

銀狼の動作にリンカー術を放とうとした時、クロノの体を何かが突き上げ、その体を宙に浮かす。

気功術、外気功放出操作系。 どりゅうちふんしゅう 土龍地墳蹴。

その瞬間に銀狼は動く。振り向きざまにクロノに詰め寄り、右手で首を掴み地面に叩き付け、右手に持ってたデバイスにスタンロッドの先端を叩きつけ、デバイスのコアらしき部分を砕くと右足で左肩を踏み付ける。

「暴行罪及び危険物所持、並びに脅迫罪と不法入界罪の現行犯で、私刑に処す」

「ぐっ、貴様。管理局員への暴行罪で『ゴキリ』ギャアアアアアアアアッ！！」

まだ下らない事を言おうとするクロノの左肩を、バリアジャケット

ト越しに浸透到で内側から砕く。

「おのれ貴様!!」「テメーこの野郎!!」

あまりの出来事に茫然としていた三人だったが、クロノの悲鳴にシグナムとヴィータは反応して、銀狼に飛び掛る。

砕いた左肩の下に右足を滑り込ませると、ヴィータに向かって放り投げる。

思わずヴィータは、クロノを受け止める為に動きを止めるが、シグナムは気にせず突っ込む。

「はあああああああ!」(カートリッジロード!)

剣を鞘から抜刀すると、右上段に構え、念話でレバンティンのカートリッジをロードする。

排出音と共に空薬莢が排出される。

「紫電……」

対する銀狼も右足をシグナムの方向に下ろす事によって、体制を整えスタンロッドを後ろ溜めに構える。

「スタンロッドオ〜」

スタンロッドの柄尻にあるつまみを親指で操作し電圧を上げ、気功術でスタンロッドを強化し、更に生体電気をスタンロッドに送り込み電圧を上げる。

「……一閃!」「ストラツシュ!」

シグナムの振り下ろしの袈裟切りの一撃と、銀狼の振り上げの逆袈裟の一撃。

スタンロッドとレバンティンが一瞬ぶつかり合うが、ぶつかった瞬間に銀狼はスタンロッドの軌道を、レバンティンを絡め取るように右下へと引き下ろす。

「何ッ!?!」

抵抗が無くなった所為で姿勢を崩したシグナムは、銀狼のすぐ右脇でその死に体を晒す。

体勢を立て直そうと思ったその時、

かげつりゅう
霞月流

右回りに捻った右掌が、シグナムの水月の位置に触れる。

ズン!

右足が音を立てて震脚する。

震脚のエネルギーを一部も洩らす事無く、それどころか足首、膝、股関節、腰、背骨、肩甲骨、肩、肘、手首を伝わる毎に増幅させ、そのエネルギーを浸透到でリアジャケット越しに打ち込むと同時に、手を左に捻りながら喰い込ませた指先で、シグナムを回転させる。

破裏旋掌はりせんじょう

さらに、左足の震脚の力で突き飛ばす。

シグナムはまるでジャイロ回転のボールの如く、吹き飛んでいく。

その先の高町なのはを狙うかのように……。

「シグナム……っ！」

気が付けばなのはの目の前まで飛来している、シグナムの体。

レイジングハートがプロテクションを張ろうとするも間に合わず、シグナムはなのはを巻き込んで吹き飛ばされる。

吹き飛んでいく先には、公園のアスレチック。二人は音を立ててソコに激突する。

地面に落ちるも、二人とも動く気配が無い。どうやら気絶したようである。

「シグナム！ なのは！」

クロノを地面に下ろしていたヴィータが叫ぶ。

ヴィータは今、ありえないものを見ている気分だった。

シグナムの一撃を受け流し、易々と吹き飛ばした。

バリアジャケットがあるから無事だと思っが、ベルカの騎士を一瞬で捌くその技量は驚くべき物がある。

彼は一体、何者なんだ？

「余所見をしている場合か？」

すぐ後ろから、声が聞こえた。

慌てて後ろを振り向く。

瞬間、視界の上下が逆転していた。

目に映るのは男の膝下の足一本。

『一本？』

次の瞬間には、銀狼の右中段蹴りが、ヴィータの左脇腹に突き刺さっていた。

「ガアアツ!？」

止まろうと飛行魔法を発動させようとするが、痛みに意識を取られて発動できない。

ヴィータはそのまま、先程なのはとシグナムが吹き飛ばされたアスレチックに、激突する。

「かはっ」

肺から洩れる空気に、思わず声上がる。

口中で悔しむ中、ヴィータは地面に落ちる衝撃で、意識を手放す。

なのは、シグナム、ヴィータ、クロノ。この四人を瞬く間に気絶させ無効化した銀狼を、アースラの武装隊は恐怖の眼差しで見ている。

一分足らずで、アースラの切り札とAAAランクの魔導師とベルカの騎士が、文字通り手も足も出ずに倒された。

しかも相手はリンカーコアを持たないただの人間。

ただの人間ごときが、時空管理局の魔導師を倒せるはずが無い。

そんなはずが無いのに、負けた。

ありえるはずがないのに、やられた。

彼等はただ茫然と、銀狼が公園から立ち去っていくのを見ているしかなかった。

おまけ。

現代に隠れ住む魔法使い達の学舎マジシャンズ・アカデミー
通称 学園。

「遂に完成だ！」

『おおおおおおおッ！！』

本校舎の一室で、わざわざ魔法実験用に用意されたその特殊実験室の真ん中で、三人の魔法使いがはしゃいでいた。

佐久間榮太郎、フランクラム・シユタイン、神無銀狼。

三人とも学園においては、教授、助教授として非常に優秀な人物たちである。

魔法使いとして達人と^{アデプト}呼ばれる程の称号を持ち、超一流の魔法使いとして知れ渡っている。

全く逆の方向性でも。

「我々はこのミミガー^{ダブルオー}〇〇をもって、全ての萌え行為に介入する！」
『おおおおおおおッ！！！！』

どう見ても、でっかいパラボナ殺人光線砲にしか見えない、金属

の塊を示して彼等は声を上げる。

その後ろに、風紀ゴーレムを連れデスキンを携えた、イヌミミメ
イドが居るのも知らずに……。

おわり。

第七話「海鳴市での邂逅」（後書き）

なのは達をまたも一蹴の主人公。

本来チートが戦闘を行なうと、これくらいアツサリ片が付きそうな気がしますが、物語を盛り上げるには、若干でも原作キャラは奮闘しますが、この作品ではソレは少ないかも知れません。

作者が面倒臭いといって書かないのもありますが（オイ
ネタにつまり気味な今日この頃。

オリジナル話は自由に書けるが、独創性が求められる。

原作シナリオは元があるから楽だが、上手く書かないと在り来たりになり易い。

とりあえず今回、久遠がヒロイン入り。

数回以内にコスモスとテロスも入れたい。

テロスのロスは、エロスのロスだと思う……。

おまけはPSP02がネタ切れになったので替えました。

まじあかシリーズで暫く攻めようかなと……。

WAっしょいWAっしょい。

意味無い次回予告

とある浮遊大陸のとある森の中の村で、一人の少女が言葉を紡ぐ。

「使い魔を召喚せよ！」

現れるのは、世界を渡り歩く者にして、人外を愛する男^{バカ}。

「ただの人間に興味は無い！ケモミミ、角付き、羽付き、尻尾付きにメカツ娘にMS娘にMS少女に擬人化娘がいたら俺の所に来い！」
土くれの義賊は相棒に妹を託し、男と出稼ぎに出る。

「それじゃあアリス。テファと村を頼むよ」

機械仕掛けの乙女は、守るべき者の為に力を振るう。

「システム『ALICE』起動します。目標メイジ一個中隊。これより駆逐します」

オーバーSランク魔導師。マギステル・マギ。魔法使用回数十萬越えの魔術師。これら全てを相手に戦い、不敗を誇るは『百万の魅技』。

それは、ハルケギニアにおいても揺るがず、覆ることはない。

「掛かって来い、メイジ共。魔法の構成は充分か？」

人外を愛し、人外に愛される者『人外の花婿』。その魅力は世界を跨いでも変わる事は無い。

「君のそのミミと尻尾と羽に俺は心奪われた。この気持ち、まさしく愛だ！！」

そして女たちの胸はレボリューションする。

『最近服の胸元がきつくなってきたんだけど……』
エロスは程々に。

「ゼロの使い魔、ザ・ウォーカーズ」

杖無きメイジはただの人」

現在鋭意妄想中！

期待せずして……待たない方がいい。

魔乳秘剣帖、五巻購入しました。

だれかネタで書かないかな……。

おっぱいおっぱい。

第八話「顔の無い男と、フルヘルメットスレイヤー」(前書き)

お待たせしました？

文字数は初の一万突破……たぶん。

そのくせ話は進んでいない。

今回大分無茶(だと思う)設定があります。あまり深くは追求しないで下さい。ガタガタ。

何時もの如く、誤字脱字があったらよろしく願います。

第八話「顔の無い男と、フルヘルメットスレイヤー」

第八話「顔の無い男とフルヘルメットスレイヤー」

ホテル・ラマダン。

世界五指に入り、日本最大の集客力を誇る超高級ホテル。

不況下においても相場の二倍の金額を取りながらも、客足が途絶える事の無い世界最高峰のホテルである。

最高級のスイートに到っては、噂では億単位のカネがかかるとかからないとか。

そんなホテルの本館最上階四十五階。博物館も顔負けの骨董芸術品が並ぶフロアの一室にて、二人の男と一人の少女、一人の女性、そして一匹の子狐がソファーに座り、顔を合わせている。

男たちの名前はそれぞれ、神無銀狼、草刈鷲士。

片や、対峙した相手が使った技全てを見て盗み覚える、戦場生存技巧、見盗覚技『けんとうかくぎ』。霞月流『かげつりゅう』。自称不滅の二十三歳。

片や、地上最強の陸戦生物にして蝦夷えみしの古武道拳法、対仙術武術『くすりゅう』。相模大に通う三年生、二十歳

世界最高のワールド・ウォーカーと世界最強のトレジャーハンター。

戦力に換算するとざっと三個師団程の戦力になる。

一人の少女は結城美沙。株価上昇年率二万パーセントを誇る、フォーチュン・テラー・インダストリーの創設者にして、現在彼女たちが居るホテル・ラマダンのオーナーでもある。ちなみに私立カトリック女学院に通う中学一年生、十二歳。

もう一人の女性は片桐冴葉。フォーチュン・テラーの会長秘書。つまり美沙の秘書である。美女に年齢は聞くものではない。

そして、銀狼の膝の上で金色の体毛を撫でられるは、八束久遠。霊脈と月の精気が集まり、意志を持ち姿をとった存在。人外に歳は無意味。

だが、この場において驚く存在は別にあつた。

「と、言うわけで鷲士くと銀さんには今回、岡山のとある山村まで行って来て欲しいの」

「呼ばれて着て見れば、またトレジャーハント？」

美沙の言葉に質問する鷲士。

この草刈鷲士と言う男、一言で言い表すならみすばらしいである。着ている服がみすばらしい、座ってるソファさえもみすばらしく見えてくる。そんな男である。

「岡山？ 今度は桃太郎伝説か？ それとも榎木神社の伝説か？」

「え？ ちょっと待って銀さん。榎木神社を知ってるの!？」

銀狼が何気に呟いた一言に、美沙は過剰に反応した。

「知ってるも何も、あそこは飲みダチが居るからな。そう言えば何年前前に遊びに行った時、ミュージアムやら管理局やら魔法使いがどうのこうのと聞いた記憶があるが」

「ねえ、少し教えて貰ってもいい？」

「一応機密扱いなんだよ。知っているけど教えられない。そう言う約束だからな」

「むむむ。じゃあ、どの位危険なの？」

詳細などは話せないなら、せめて危険度くらいは知っておきたい。

「下手にあそこに干渉すると、『スター・ウォーズ星間戦争』の帝國に喧嘩を売るよ
うなもんかな？」

「げ。」

力を持ちながらも平穩を望む者は、基本的に手を出さなければ何もしてこないのである。

「すぐ側の村の住民も、身体能力だけなら鷲士並だが、彼等は平穩な暮らしがしたいだけだからな」

そう言つと、銀狼は苳葉が入れた紅茶に口をつける。

「銀狼さんもこう言つてる事だし、今回はやめておいた方がいいと思うよ？ 僕も父親として美沙ちゃんが危険な目には遭つて欲しくないし。それにそう言つ人達には、下手な干渉はしない方がいい」

「むつむつうううううう。おとーさんがそう言つなら、今回は諦める」

鷲士が説得するが、美沙はどうにも納得しきれないようである。

「相変わらずお前らは親子に見えんな。兄妹と言つた方がしっくり来る」

そんな二人を見ながら銀狼は、何時もの事だと思ひながらもそんな事を呟く。

親子。

そう、草刈鷲士と結城美沙は親子なのである。それも養子縁組ではなく血の繋がつた実の親子なのである。

父親二十歳。娘十二歳。歳の差八歳の親子なのである。ちなみに母親は一つ年下の十九歳。さらに双子の弟も居るのである。

「とりあえず、榎木神社には手を出さないようにするわ。銀さんがそう言つんならきつとそうなんだろっけど」

「しかし、話の内容からすると、まるで相手が宇宙軍事国家のようですね」

「……ぎくっ」

冴葉がいった言葉に、銀狼は思わず動きを止める。

その反応を見逃す美沙と冴葉ではなかった。

「じーーーーー」

わざわざ効果音を口に出して、美沙は銀狼を半眼で睨む。

こうなった場合の美沙は、なかなか頑固で強引なのを知っている
驚士は、助けたいが言い包められるのが目に見えているので何もい
えない。

久遠は銀狼の膝上から既に居なく、冴葉が用意したケーキに夢中
になっている。

「はあく。分かった、少し話そう」

やれやれとため息を吐いた銀狼は、知っても問題が無い範囲で彼
女たちに、榎木神社の伝説の話をするのであった。

結果として、美沙が榎木神社関係に手を出すのは諦めた。

平穏を望む強者に下手に手を出して、物理的に消滅はしたくない。

しかし、話の途中で銀狼が口にした、時空管理局に大きく憤慨し、手始めに衛星軌道に軍事衛星を打ち上げる計画を立てたのである。

フォーチュン・テラーもオーパーツと呼ばれるロストテクノロジーアイテムを回収しているが、ソレはあくまで美沙が、自分たち結城一族のルーツを知る為である。それと同時にその技術を解析しての技術発展と経済効果の相乗。その他多くの社会貢献の為である。もつとも社会貢献は資金調達の意味合いが強いが……。

とにかく、時空管理局が掲げるロストロギア回収（と言うのは強奪盗掘行為）と他世界への介入行為（と言うのは侵略行為）に、地球にあるオーパーツやフォーチュン・テラーの技術産物を、ロストロギアとして強奪しようとしてくるのは目に見えていたからである。

それに質量兵器廃絶主義と魔法至上主義に時空管理局魔導師原理主義。

そして何より、子供を平気で戦場に送り出すその考えに、鷺士がキレた。

なにせ実の娘が中学一年の十二歳である。リンカーコアとやらが無いのは、銀狼が術すべを持っていたので持って無い事を確認済みである。

才能があれば、家族から引き離して仕事をさせ、一歩間違えば死ぬ恐れがある任務を平気でやらせる。

本当なら美沙にだって危険なトレジャーハントは止めて欲しいが、これは彼女がやりたいと言い出した事だし、年季は自分より年上だ

し、実際現場じゃ自分が足を引つ張ってしまふ事の方が多い。

だが、それでも、彼女は自分と一緒にいたいと言っている。

だから、二児の父親として、才能があると言う理由だけで、子供から親と引き離そうとする管理局の考えに、心底怒りを覚えたのであった。

フォーチュンと管理局。

技術力で言えばフォーチュンの方が勝っているが、戦力としては向こうの方にアドバンテージが上がりやすい。

何せ相手は空を飛ぶ事が出来るのである。

戦闘において、三次元軌道の幅の広さは、そのまま戦力差の一つのなる。

いくら驚士が九頭竜の使い手とはいえ、空に浮かぶ相手に拳は届かない。戦車には勝てても、ジェット戦闘機には適わないのである。

もつとも管理局の魔導師は、ヘリコプターといった感じのほうが強い。空を飛べるとは言っても、その機動性は戦闘機には及ばない。確かにヘリのように前後左右上下と自由に動けるがその速度は精々三百キロ少々がいい所なのである。フェイトのソニック・ムーブですら、音速を超える事は出来ない。たとえバリアジャケットを纏おうとも、音速の壁というのは容易に突破できるものではない。シールドにバリアにフィールドを張れば何とかなるかもしれないが、高機動系の魔導師は基本的に防御技能が低い。故に魔導師の単身での音速突破は眉唾物の話なのだ。

騎士長槍型の突撃槍ならば、或いは突破出来るかもしれないが、ベルカ式は格闘重視で機動性はそこまで高くないし、防御技能が高い魔導師も機動性が低い。

それに魔導師は基本的に、防御しながらの移動をしない。これはバリアやシールドで受け『止める』傾向が強く、受け『流す』ことをしないからである。それにミッド式は近距離戦や格闘戦が苦手であるし、身体能力も低い。高い技術が必要な受け流しは、魔導師の間で出来る者は数知れないのである。

まあ、室内などの限定空間で戦えば、アドバンテージは圧倒的に驚士に上がる。それに魔導師の射撃魔法は、飛来する弾丸を視認出来る驚士にとっては、止まっているも同然に見えるのだ。たとえ誘導弾で複数同時に攻めようと、直射弾と比較してもその速度は鈍足の一言。反射神経で勝てない魔導師では、九頭竜の使い手を捕らえることは出来ない。

結局のところ美沙は、管理局に対してこちらから干渉はしない事にしたが、向こうが手を出してくるなら徹底抗戦も辞さない気でいたのである。まあ、それ以前に向こうの魔法　リンカー術　を解析してリンカーキャンセラーを作って発動させれば向こうは何も出来なくなるので、数回の接触後に天秤はフォーチュンに傾くだろう。

それにリンカー術は地球では不要な存在だ。リンカーキャンセラーを発動させたところで、地球には何の問題もない。それどころか管理局の存在を知る各国が、挙ってキャンセラーを買い求めるだろう。

理由は言わずもがな……。

「と、言うわけで今回のダーティ・フェイスのお仕事は、東京都西の小鐘井市に出没すると言う忍者の調査を行なう事になりましたあ
！」

美沙は、最近巷で話題になったと言う忍者の調査に乗り出すことにした。

実はこの話は、美沙より鷲士の方が乗り気だった。彼も大学生で父親とはいえ男。たとえ眉場物の噂話だとは言え、忍者に興味が無いと言われれば嘘になる。それに何より九頭竜の水歩行は、忍術のような物だ。

ラーメンの具の忍者漫画ではないが、もし居るなら分身の術と変り身の術を見てみたい。そんな少年心を撥られた鷲士は、この話に実を乗り出したのである。

話の流れに付いて行く気の無い銀狼は、早々に久遠とニヤンニヤンタイムの為に別室に移った。

冴葉も資料を集める為に退室済みである。

美沙も歳相応の好奇心から、忍者調査に意欲を燃やすのであった。

何気に親子揃って初めて気が合った瞬間であった。

その頃別室にて……。

「……ん。……銀狼。気持ちいい？」

間接灯が照らす室内の中で、一人の美女がその体を上下させる。

「ああ。久遠、もう少し前後にも動かしてくれ」

一人の男がキングサイズのベッドに仰向けで寝そべる。

「んっ……。ん、……んっ」

互いの顔が認識できる程度の明るさしかない中で、相手の息遣いで状態を探れる一組の男女は、お互いに高めあっていく。

誰も邪魔されない空間で、男と女は互いに感じあつ。

女はようやく見つけた、伴侶たる存在を……。

男にとっても、悠久の時間の中で愛せる存在を……。

互いに人で無いからこそ、ソコに時間の概念は無い。

たとえ時間は有限とはいえ、今は少しでも相手を愛しむ為に……

……。

場所は変わって第一管理世界ミッドチルダ。

首都クラナガンでは、最近採用したという新装備で犯罪者の逮捕率が、劇的に向上していた。

その装備の性能は凄まじく、魔力のない人間でも魔導師換算でAAランクの魔法の強さを発揮できるのである。何より特筆すべきは防御性能であった。

肩についているアーマーシールドと標準武装のシールドがAAランクまでの魔法を防ぎ、胸部に備わっている魔法プログラム分解装置がAランクのまでの魔法を、魔力ごと分解するのである。

この分解装置のおかげで、魔動師のシールド、バリアはもちろん、バリアジャケットまでもほぼ無効化することが出来るのである。

ちなみに最大稼働すると、バリアジャケットをバクテリア分解の如く消滅させてしまい、女性局員を素っ裸にしてしまうのは、開発研究部と前線部隊の暗黙の情報である。

さすがに一度に分解できる量に限りがある為、A A Aランクを越える魔力を分解するには複数の装置が必要であるが、理論上ではアルカンシエルを防ぐ事も可能なのである。

武器に関しては、スタンガンアームとテイザーガン、スタンロッドにネットガン、トリモチグレネードにトリモチバズーカ。スタンロッドに関しては剣型と槍型があり、必殺技にスタンスパーク（全身から放電）がある。

動力に電気バッテリーを使う事によって、クリーンで誰でも簡単に扱う事が出来る仕様である。

最大出力三百馬力を誇り、各部に設置されたギアモーターとサスペンションが装着者にパワー与え、全身を包む装甲が装着者の身を守る。

アーマードトルーパーと名付けられたこのパワードスーツは、瞬く間に地上部隊に受け入れられて行った。

現在、量産型としてザクトルーパーF型、指揮官用に両肩にアーマーシールドを装備したザクトルーパーS型、格闘戦を重視したザクトルーパー、両肩にキャノンを装備させた支援砲撃型のドムトルーパー、が存在する。なお外見は某種運名と某ライダーのG-3を足して二で割った感じ。ちなみに、カスタム専用機としてゲルググトルーパーも存在するが、こちらは殆どワンオフ仕様で各部隊長が使用する。

なお、女性用にDDトルーパーディーツーと言うタイプも存在する。こちらは女性的なフォルムに、各所にハードポイントを持ち、武装の変更が可能なタイプである。

DDとはデッドリードライブの略称で、設計者が付けた名前だが本人曰く、「DDは高性能な機体ほど女性のフォルムになるから」と言っていたらしい。

そして、このアーマードトルーパー（以下AT）の出現により、ミッドチルダの犯罪率は減少傾向になり検挙率が向上傾向に上がっていた。

何より嬉しいのは、外観がカッコイイという理由で入局する者が急上昇した事であった。おまけにリンカーコア所持者でなくても運用できる為、魔力素質を必要としないという点に注目が行ったのである。

おかげで海の連中に、人材や戦力を引き抜かれなくてすむ陸は大いに喜んだ。何せ本局の連中に一泡吹かせる事が出来たのだ。

本局の幹部や上層部は、この装備に大いに反対したが、最高評議会と伝説の三提督、さらに試作実験機を装着した設計開発者本人との『話し合い死合』で採用に持ち込んだのである。

海の面々は、まさかAからAAAで固めた二個小隊を、単騎で殲滅されるとは思っていなかった。

負けた海は、ロストロギアか質量兵器だと騒いだが、管理法には違法しておらず、この程度の技術も理解、解析出来ないようでは本

局の技術力も高が知れていると言われ、常日頃から『時空管理局本局の技術力は次元世界一』と言っている本局の幹部と技術者達は、何も言えなくなったのである。

本局の連中は、このA Tを禁止にする法を立案していたが、最高評議会やミッドチルダの政治家や資産家達からことごとく却下され、さらには資金援助も減少された為、現在資金難で活動能力低下中なのである。

時空航行艦は維持をするだけで膨大な金が掛かる。さらに本局の幹部は資金横領や会計不正などで無駄金を平気で使っていた為、備蓄もまともに残っていないのである。

ちなみに地上は少ない資金で遣り繰りをして、翌決算に資金を回そうとすると、海が全て掻っ攫っていつてしていた。「金が余っているなら、金が掛かる海に寄越せ。ついでに人も貰っていこう」と言って……。

だが、今年度から資金は海と陸で完全に別にする、と最高評議会が決定が下り、今まで各管理世界の地上から吸い上げていた金が無くなり、各管理世界の資産家たちからの資金援助も減少した海は、その活動が困難になり始めた。

対して地上は、十分に資金が回って来て設備や装備、局員への待遇や厚生を充実させる事が出来るようになったのである。

各管理世界の政治家や資産家は、確りと気付いていた。自分達の平和は地上部隊が築いている事に。

ちなみに空は本局の管轄ではあるが、資金は陸から出ていた為、

今回から海が出すようになった。

そして、裏金作りを止めない海の幹部は、真っ先に武装航空隊や教導隊から資金を巻き上げ始めた。

地上の平和より次元世界の平和が大事だ。

そう言うって空の局員の給料や資金を巻き上げ始めたのだ。

これに怒った空は独自の管轄に移行。エリート出身と、実践で叩き上げられた実力を持つ者が多い空は、海出身と陸出身とで派閥が出来上がり、内部分裂を起こしたが、歴戦の猛者が多い陸出身の派閥に敗れ、海の派閥の半数は海に転属。残りの半分は素直に陸の派閥に従うようになった。

余談ではあるがこの時、陸出身の派閥筆頭にカイ・キタムラ三等陸佐戦技教導官やゼンガー・ゾンボルト三等空佐戦技教導官などがいた。教導官の九割が陸出身で尚且つミッドのために尽力していたのを、海出身の連中は知らなかったのである。

とにかく、ミッドチルダでは現在新装備ATの出現により、犯罪率と検挙率が劇的に変化していた。

そして何より、この装備を一躍有名にした立役者が、現在ミッドチルダ、クラナガンにおいて英雄扱いされていた。その者の名は…
…。

「ジャアアアアアアステイスウー！！ 地獄、昇竜拳！」

漆黒の鎧に身を包んだ男が、今一人の違法魔導師をジャンピングスピナーで打ちのめした。

四股に手甲、具足。胸部装甲の中心には紅く光る宝玉。両肩と両腰は軽鎧を身に付け、ベルトには蒼く光る宝玉が埋め込まれている。

二の腕と太股は伸縮性のあるスーツ。背中の肩甲骨の位置には一対の主力推進装置。メインスラスタ

そして頭部は、フルフェイスヘルメットにV型アンテナとイヤールアンテナを付け、額の部分から真上に伸びる角を付けていた。

男の攻撃はまだ止まらない。

足の裏からバーニアを吹かし、違法魔導師に頭を向ける。

背中のメインスラスタに火を吐け、右手で掴んで一気に加速し、勢いのまま地面に向かって突撃。

土煙と埃が舞う中、一対のデュアルアイが光る。

「この私に、出逢った不幸と不運に、絶望と後悔をし、地獄と味わうがいい」

土煙と埃が晴れた所には、地面に倒れした違法魔導師と、漆黒の鎧に身を包んだ男。

「害悪あるモノに悪夢を、助け求むるモノに安らぎと眠りの闇を…

…」

その眩きと共に、男は北の彼方へと飛んでいく。

その十分後に地上部隊が到着する。彼等は現場に到着し状況を確認すると、全員北の空に向かって敬礼をするのであった。

漆黒の鎧に身を包んだ人物……。

その者の名は『ナイトメア・オブ・ダークネス』。

「闇の悪夢」と犯罪者から恐れられ、本局の魔導師から忌み嫌われる男。

彼の装備の名は、アーマードトルーパーシステム。

ジャスティス地獄アーツを使い、己が信念を貫く漢である。

第一管理世界ミッドチルダ。某所。

「ふう、鎧は蒸れるのでアル」

フルフェイスのヘルメットを脱ぎ、その下から出てきたのは、銀髪銀眼の男。

「とりあえず、ミッドでの名声は大分広まったな。それに海の連中は、捕らえた違法魔導師にリンカーコアがなくなっているから、奉仕させる名目で戦力にしたくても出来ないから、大分苦虫を噛み潰しているしな。態々Aランク以上の魔力持ちをブチのめしている訳じゃないからな」

メットを小脇に抱えながら左手で顎に手をやり、今までの行動を自己評価していく。

男の名は神無銀狼。このミッドチルダにおいては、アラン・スミシーと名乗る男である。

現在ミッドチルダでは、犯罪を犯した違法魔導師が現れた時、何処からともなく現れたナイトメア・オブ・ダークネスが、瞬く間に倒し無力化するという、まるで正義の味方のような話題が拳がっているのである。

最初の頃は地上部隊も、彼の行動は管理局の信頼と威信を妨げる物として、捕らえようとしたがソコに待ったを掛けたのがレジアスだった。

確かにNODの行動は、ナイトメア・オブ・ダークネス管理局としては認めにくい物だった。しかし、彼もまたミッドチルダの平和の為に闘っているのも事実。それに何よりNODが倒した違法魔導師は、リンカーコアを砕かれて消失している為、違法魔導師として二度と再犯を起こす事が無い。そして、管理局に囑託魔導師として奉公する事が出来ない為、罪や

刑期が軽くなる事はなくなつたのだ。

地上部隊の人間も、罪を犯した魔導師が大手を振って地上を歩いているのが、気に入っていない者もいたのである。罪を犯したなら大人しく刑務所に入っている。そう言いたかつた。

たしかに管理局に奉仕活動をすれば、罪は軽く刑期は短くなるが、それに納得しないのが事件の被害者や遺族達だ。彼等は皆、口を揃えてこう言う。『ソレ相応の報いを』と……。管理局の手伝いをした程度で罪が消えるわけではない。いや、その罪は消してはならない。何より、罪を犯して真つ当な生活をしているのが許せない。こつ言つた思いが、被害者や遺族にはあつた。

そして何より、どうして自分や家族が被害にあつたのに、管理局は何の措置もしてくれないのか……。

違法魔導師の被害の中で最も多いのが、子供を庇つた親。そして親を無くした子供は、リンカーコアを持つていれば、管理局の保護児童施設か魔導師養成学校。持つていなければそのまま適当な孤児院に送るだけなのである。リンカーコア持ちの子供は、たとえ親戚がいたとしてもほぼ強制的に管理局の施設に送られる。何せ子供なら自分達の望むように教育（洗脳）した、管理局の魔導師にする事が出来るのである。

そして、その傾向がミッドチルダ以外の管理世界で多い。

ミッドチルダではレジアスが実権を握るようになってから、孤児がそのような目に会う事はなくなつたが、管理外世界で事件が起きた時は、現場の人間は躊躇なく子供を、保護と言う名の名目の元に拉致誘拐してくる。管理外世界は野蛮で危険だから、自分たち時空

管理局が保護すると言って、強制連行してくるのだ。さらには管理外世界だから其方の法に従う必要は無いとまで言って、……………子供が泣き叫ぶのを無視して。

ミッドチルダでも、被害者の遺族の子供がリンカーコア所有者で、そのリンカーコアがランクが高いと、本局の連中は強引にその子供を連れて行くこうとするが、先程も述べられたようにレジアスが実権を握ってからはそのような事は出来なくなっていた。

だから本局の連中は、捕まえた違法魔導師に目を吐けていた。

しかし、此処最近はNODの活躍の所為で、その魔導師も使えなくなってきた。

地上から人材を引き抜こうにも、殆ど低ランクの魔導師ばかりで海では使えない。高ランクがいたとしても飛行適性が低く、海では活動できない者ばかり。

しかも最近は活動資金難の所為で、高待遇で他から局員を転属（拉致）できなくなってきた海は、以前にも増して、活動困難な状況に陥っていた。

とは言えそれでも強大な時空管理局本局。上層部の腐った高官や幹部達は、自分達の意に従わない者達から、切り捨てていく事で、金を回していた。これが自分達の首を締めている事に殆ど気付かず……………。

そんな本局とは裏腹に、地上は今までに無い活気で満ちている。

A Tの副産物による技術で、幾つも特許を獲得し、最近の治安の

向上、入局者の増加。人も金も入ってきた事もあり、レジアスは階級を中将へと昇進させた。

「くくくくくくくくくく。海の連中のお偉方が、悔しがる顔が目に見え。くくくくくくくくくく」

黄色いビン底メガネのケロン星人のような笑いをしながら（ただし、声はしっかり子安）銀狼ことアランは、顔をにやけさせる。

見る者がいればこう言ったであろう。

相変わらずイイ性格してやがる と。

「さてと、次はスカの所に言ってトーレ達の戦闘訓練だな。しかし最近、トーレとチンクとの間で喧嘩が多い。そりゃ男としても戦士としても慕われてるのは嬉しいが、もう少し、こつ……独占欲を制御出来ないもんかねえ」

腕組みをしながら、レジアスと再会する前に少し世話になった、マッドなサイエンティスト広域指名手配犯罪者の娘たちを思い浮かべる。

「最近の二人の戦績はほぼ五分だから、優劣を付けたいのは分かるが、だからと言ってウーノやクアットロまで巻き込んで欲しくないよな……。その度に事務処理を俺とスカがやらなきゃいけないし」

現在管理局に潜入任務中の二番は、オーリスと何かを企んでいる。

最近稼働した六番と十番はよくベッドに忍び込んでくるようになった。

近々稼働予定の九番と十一番は、もう少しまともな情操教育を行なおうと思う。

「とりあえず、そろそろセインとデイエチに基礎戦闘を仕込むか…」。デイエチは砲撃系の武装を準備するとして、問題はセインだな。武装は最小限、それでいて潜入、陽動、かく乱を補助できる武装。ガンズトンファー辺りでも与えるか。それと指先にカメラでも付ければ潜入は問題ないか。使い捨てで手榴弾でも持たせるか？ いや、いつそのことATを着せて……」

誰もいない部屋の中で、NODの装甲を片付けながら、アランは思考に耽る。

此処は時空管理局地上本部、第八特殊資料課機動戦闘部隊、通称『第八特資課』。現在の部隊人数一人。別名『ワンマン・アーミー一人部隊』。

レジアス直轄の機動部隊として設立されたが、入隊条件の難易度があまりにも過酷過ぎて、アラン以外いないのが現状であった。

その入隊条件は

『ビルを占拠したテロリスト三百人を魔法を使わずに制圧』

という、とんでもないモノなのである。

そのため、魔導師は書類審査の時点で不採用。特に空戦魔導師や砲撃魔導師は絶対に、第八特資課には入れない。

屋内戦や室内戦において、彼等の能力は不要で邪魔の一言にしか

ならないからである。

現在銀狼は、NODとして出勤がてら人材をスカウト中だが、中々御眼鏡の適う存在が見付からないのだ。

それに、居たとしても訳有りで入隊できない者が殆どだ。彼らを無理に入れた所で意味がない。

頭の隅で、古い知り合いに声を掛けてみるか、と考えているがそれは最後まで取って置くつもりだ。

セガールかスタローンかジャッキーかシユワちゃんみたいな人居ないかな？。

いつそのこと梁山泊でも雇おうかな……？

そんな事を考える銀狼がいた……………。

A T に関して。

名前に関してはあまり考えずに付けました。装備に関しては種死のMSを参照してください。

ゲルググに関してではゲルググMとリゲルグ辺りでも参考にして置いてください。

ドムはGジエネFのバインニヒツに量産型ガンキャノンのキャノン装備辺りを思い浮かべてください。

G - 3の装甲装着システムにザク、グフ、ドムの外見に見えるパーツ。ザクF型はザクウォーリア、S型はザクファントムを参照。

太股は前と外側だけ装甲を展開。二の腕は外側に装甲が展開してある。

各関節駆動にモーターギアを内蔵させ、装甲によるモノコックシステムで装着者を衝撃から身を守り、四肢と腰、背中、肩のハードポイントにより、武装を変更可能。

頭部はバイザー、フルフェイスの二種類のヘルメットが選択可能。バイザー型は骨伝導マイクなので、インカムみたいになつてません。制御装置は首の付根。其処で脳から発せられた電気信号を読み取る事で、動きをサポートする。

装甲に関しての防御力はシールドがAAまで本体はBまで防御可能。

魔法プログラム分解装置はAランクまでならヴァリアブルショットも完璧に防げます。AMFと違って外側から結合を解くわけではないので、Aランクなら砲撃も防げます。見た目はエフィールドと

かビーム攪乱幕のような感じで。

魔法プログラム分解装置マシンガンシステムⅡ MRS。

AMFも魔法の一種なのでMRSで無効化可能。

MRSは電磁波の類なので出力を上げれば念話も妨害可能。

効果範囲は半径五メートルから十メートル。最大出力で三十メートルまで。

バリアジャケットも問答無用で分解でき、デバイスによってはインテリジェントも待機モードに……？

なおランクは魔力量の方なので、なのはのディバインバスターはシールドでしか防げません。

なお、矛盾が生じる場合はご都合主義で通す場合が、“多々”あります。

今回はおまけはありません。

第八話「顔の無い男と、フルヘルメットスレイヤー」(後書き)

『分解』の単語の発音がわからん……。

ATはG-3とか超電磁砲のワードスーツとか、映画「アイアンマン」とかそこから辺を参考に、ガンダムを足して割って下さい。

銀狼のスーツは見た目、某黒百合っぽいです。メインスラスタはトールギス?を参考にして下さい。最終的には腰にヴェスバー(V2アサルト)、脚はVF19のマイクロミサイル、ショルダーもミサイル、ベルトと胸元はビーム、頭部のアンテナはレーザー機銃、額からもビーム、両腕にイナキャン&ホーミングレーザー砲口と、某鉄の城真つ青の全身武装状態です。ちなみにメットのバイザーの下はさらに、ウルトラゼブンメガネ状態なので目からビームも出れますし、口元もF91みたいにオープンできます。

ぼくがかんがえたさいきょうのばわあどすつつ。

書いてて思ったけど恥ずい……。でもやるからにはとことんやる……かも。

ところで、口から怪光線な巨神兵ビームって撃つていいかな?

ゲロビする主人公。うゝん悩みどころ。レイフォンやサヴァリスもやってるし問題ないかな?目からビームに口から怪光線って完璧に怪獣な主人公ですね。

まあギャグか相手を蹂躪する時にやると思います。ワクドキせずに待ってて下さい。

またしても思いついた、意味無き作品予告。

孤独な吸血姫の前に、人外の男は現れる。

「吸血鬼か、人外ツ娘こな嫁としては悪くないねえ」

「いきなりプロポーズ!? というより人外こっ娘こって……」

「ただの人間に興味はない。ケモミミ（ry）」

人外の花婿が此処に誕生する。

YESロリータ、NOタツチ。

「道徳的にも史観的にも問題があるから成長させるか」

「いや、不老なんだから無理だろう?」

「魔法以外が使える俺に、不老不死が成長できる薬が作れない筈が
無い」

時は戦国、群雄割拠が天下を狙う。

「無双じゃ無双じゃ〜!!」

「御館様〜!!」

「レッツパーリー!!」

花のお江戸に怪盗現る。

『鼠小僧が出たぞ〜!』 『川五右衛門が出たぞ〜!』 『銀狼が出たぞ〜!』

「マウスに斬鉄剣。つてか俺は名前のまんま……」

「如何したで御座るか? 銀之助殿?」

完成形変態刀十二本を求めて。

「見盗覚技の霞月流。神無銀狼だ。始めまして、奇策士に虚刀流」
「お前さん強そうだな。鑢七花だ」

「勝つ事より、負けない死なないが俺の特技さ。逃げは負けにあらずってね」

魔法世界良いところ一度はおいで。

「マギステル・マギ。長いからマギマギでいいか、ネトゲに似たよ
うなのがあつた気が」

「貴様！我等魔法使いを侮辱するか！？」

「ただ魔法が使える程度で、随分偉そうだな。害悪（魔）法使われ」

魔法世界大戦と二つ名。

「ミリオン・マスターの銀狼とは俺の事だ。掛かって来い小僧！」

「へっ！サウザンド・マスターのナギ様を舐めるなよ！」

「魔法なんざ使ってんじゃねえ！」

マギステル・マギ・マダー。

『「人外」の銀狼！ 今日こそ正義の名の下に滅ぼしてやる！』

「また来たのか、マギマギしたい馬鹿が……」

「正義の魔法使いたる私たちが、悪たる貴様を倒す！！」

「ジャステイス地獄アーツでも使うか」

己が信念を貫く男に、魔法使いでは適わない。

英雄の息子。

「ガキ、小僧、坊主、少年、スプリングフィールド職員。どれで呼
んだらいい？エヴァ」

「小僧で十分だ」

「まあ、初対面の女子いきなり『失恋の相が出ている』は禁句だ
ろっ」

「自分の親切を押し付けるのが、マギマギだからな」
歪んだ英雄の息子は、正義と魔法を理解していない。

桜通りの吸血鬼。

「どうしてこんな事をするんですか!？」

「人間は肉や魚を食う時に、罪悪感を感じるのか？ 吸血鬼の私が人間から血を吸うのに、何故そんな事を思わなければならない」

「それでも、血を吸うのは悪いことです!」

「それは貴様の偏見と独善だろう?」

人間だけが持つ価値観は、人間以外には理解されない。

修学旅行。

「リヨウメンスクナノカミか、思ってたのより弱そうだな」

「アレでも飛騨の大鬼神だぞ?」

「別世界で戦ったスクナの方が強いな。おまけに彼女は両性具有だった」

「ソツチの両面っ!？」

弟子入り。

「二十四時間以内に俺に一撃入れたら合格だ」

「本当にソレでいいんですね?」

「構わん。参考までに言っておくが、エヴァ達で4時間。紅き翼で76時間掛かったからそのつもりで掛かって来い」

「父さん達で三日以上も!？」

「今のお前だと八十年位か、従者と一緒で七十ちよつと云った所か」

悪を貫いた存在は、何時の時代も強者である。

悪魔。

「結局のところ、人間の自己解釈が招いた自業自得だよな」

「悪魔は契約には忠実だ。人間の自分勝手に招いた事態だ」
「己の欲望も制御出来ずに負けた存在が、被害者を語るとは見るに耐えん」

武闘大会。

『優勝は、神無銀狼選手です！』

「予選落ちさせた薬味小僧は、随分落ち込んだがまあいいか」

「一千万あれば世界旅行に行けるな」

「今度は茶々丸を加えた四人で、世界行脚の旅でもするか」

そして彼等は旅にでる。

「魔法先生ネギま」ザ・ウォーカーズ」

魔法使いは勇者の従者。英雄は剣の担い手」

妄想と簡易プロットだけなら出来ている。

書くかどうかは、読者の声次第……かも。

また次回。

第九話「黒き幸たる鍵尻尾の黒猫」(前書き)

モニターが壊れた為に一ヶ月以上も更新が出来ませんでした。

金が無かったので買い替えに……。

今回の話はちょっとした幕間のような物です。

ストーリー展開がオリジナルな為ネタに詰まっています。

今回の話のネタが分かった人は感想に大きく一文字入れておいて下さい。

第九話「黒き幸たる鍵尻尾の黒猫」

第九話「黒き幸たる鍵尻尾の黒猫は、手紙届の聖なる騎士」

第97管理外世界近郊、次元空間。

アースラのクロノとが落とされ一ヶ月。

砕かれた左肩は未だ癒えていない為、三角巾で吊りながら艦長席にクロノは座る。

シグナムは肋骨を六本砕かれるという重症の為、海鳴の八神家で療養中である。ヴィータは幸いな事に、蹴られた脇腹は打身と痣で済んだ為、なのはとアースラにやってきていた。なのはの隣にはリハビリから復帰したフェイトも居る。オマケのアルフも。

最近ようやく松葉杖で出歩けるようになって来たはやては、シャルとザフィーラを連れて海鳴商店街へ買い物に行っている。

少しでも戦力が欲しいクロノは、はやてにシャルかザフィーラを貸すように言ったのだが、『余所の所の平和も大事やけど、今はうち等のご飯の方が大事やから、それはうちの足が完治したらな？』と言って出かけて行ったのである。

はのはとフェイトでは、状況判断が未熟と言う事でヴィータが一緒に居るが、当のヴィータもあまり管理局に協力的になれていない。

と言うのも、夏の七篠権兵衛との邂逅で、彼が言っていた言葉の意味を考えていたのである。

彼は管理局に対してこう言っていた。『時空を管理支配搾取したい世界遺産強奪犯罪組織』と。

管理。

その言葉を言い換えれば、支配と言う意味にもなる。搾取は実際に他の管理世界から、管理税という税を徴収している。

世界遺産強奪、に関してもそうだ。

その世界にある古くから伝わる家宝や国宝。世界遺産級のオーパーツなどを、時空管理局は解析、理解出来ないと言う理由だけで、回収と言う強奪を行なっている。

現に此処数年の間に地球でも、国立美術館や国際博物館などから何十点と言う骨董品や美術品を、管理局は解析できない、理解出来ないという理由から強奪、窃盗をしている。

特に酷いのは、持ち主を公務執行妨害と言う理由で逮捕し、家宝を強奪したうえで更に犯罪者と言う理由で管理局に奉仕させるのである。

ほんの半年程前も、日本の国立美術館から『黒き幸・ホーリーナイト』と言う鍵尻尾の黒猫の絵をなのはとフェイトが、回収という窃盗をしている。「住所不明の相手に手紙を届けたい時、この絵に願ってポストに入れると届く」という噂話を、クロノが「それはロストロギアの仕業だ」と言って、回収（窃盗）させたのである。

三月末の春休み中に起こった出来事で、この絵が盗まれた時は、日本中のそれも遠距離恋愛や片思いの若者達の間で、大衝撃が走ったのである。

それに何よりこの絵は、画家を目指す若い男性たちの間で、絶大な人気を誇っていたのである。

『黒き幸・ホーリーナイト』の作者は、五十年程昔に亡くなっているが、彼は死に際にその時に飼っていた鍵尻尾の黒猫に、故郷で帰りを待つ恋人に手紙を届けて欲しい、と頼んだ。

黒猫は悪魔の使者と罵られながらも、石を投げつけられながらも、罵声と暴力を浴びせられても、男の帰りを待つ恋人の家に送り届けたのだ。

己の命と引き換えに……。
優しさや温もりを全て包み込んで呼んでくれた、名付け親にして親友の為に……。

手紙を受け取った恋人の女性は、数年後に結婚した。結婚相手は美術商を営む男。

その旦那が扱って商品の中に、かつての恋人が描いた鍵尻尾の黒猫の絵があった。恋人のタッチは覚えていたので、その絵が昔庭に埋めた黒猫の絵だと分かった。彼女はそれを旦那から買くと、自室に大事に飾った。

旦那は妻が昔の恋人の絵にご執心な事に嫉妬したが、妻からその絵の猫が、彼女の故郷にある家の庭の墓の猫だと聞き、『聖なる騎士』の意味を知った旦那は、偶然手に入れていた他の鍵尻尾の黒猫の絵を、とある宅配業務の会社に売った。その会社の名前は『ヤマト宅配便』。

絵の由来を聞いたヤマト宅急便は、その黒猫をマスコットにした。

そしてヤマト宅急便はその絵を買ってから業績が右肩上がり。これに感銘した社長は社名を『クロネコヤマトの宅配便』と改名。その後も流通業の一角を担う存在となり、中でも『クロネコメール』と言う手紙専用配達業務は、郵便局より格安の値段と、名前さえ分かればお墓にだって届ける事から絶対の信頼を誇った。

そんな中である女性の遺産として、国に一枚の絵が寄付された。

鍵尻尾の黒猫『黒き幸・ホーリーナイト』と言う題名の絵が国立美術館に飾られた。

女性の遺言が、この絵にジnkクスと概念を与えた。

『この絵の猫、ホーリーナイトのおかげで、私は死んだ恋人から、最期の手紙を受け取る事が出来た』

死者からの手紙を運んでくる黒猫。それは不吉とされながらも、死に際の想いを届けるメッセンジャーのシンボルとなった。

そしてこの絵は、『クロネコ』が三億円の値で買い取った後、もう一度国に寄付されたのである。

それ以降この絵は、『手紙と想いと幸せを届ける黒猫』として、国立美術館の無料入館スペースに飾られるようになったのである。

この他にもこの絵に纏わる話は数多く存在するが、それは割愛させていただく。

ちなみに、『手紙を加えた鍵尻尾の黒猫』を見かけたら、数年以内に結婚出来る、と言う逸話も存在する。

一ヶ月前の戦闘の映像を解析しながら、ご高説を述べるクロノと、それに共感しているのはとフェイトを見ながら、ヴィータは時空管理局に対して考えを改めていくのである。

このまま管理局に従事していても、管理局ははやてを使い潰すだけだ。

しかし、夜天の書の罪を償いたがっているはやては、管理局に奉仕するだろう。そして刑期を終えた時にはすっかり管理局の言いなりになっているかもしれない。そしてそれは自分達も例外ではない。

管理外世界出身の人間を、野蛮人や蛮族と言う本局の人間も多数居る。

ミッドチルダ出身時空管理局本局所属魔導師原理主義。

少し前に地上部隊に出向した時、偶然そんな噂を聞いた。ミッド出身の本局魔導師を絶対視し、それ以外の管理局員を見下す連中。彼等は魔法至上主義にして絶対主義を謳い、次元世界全てを管理しようとして企んでいる。彼等は言う。『魔法こそ全て』、『我々の魔法と正義があるから今の世界が存在する』、『我々が世界に平和を与えてやっている』、『魔法以外は世界に不要』、『我等こそが正義』。

他のヴォルケンリッター達とも相談し、如何にかしてはやてを管理局から引き離せないか。

出来る事なら海鳴で静かに暮したいが、管理局は八神家を手放さうとしないだろう。

となれば残るは他の管理外世界か、ミッドに在るベルカ自治区。ベルカの騎士にして歴史の生き証人にも等しい自分達を、聖王教会の者達は迎え入れたがっている。

管理外世界の場合、自分達を受け入れてくれる世界を探す所から始めないといけない。なにせ管理局は管理外世界に関しては、碌に情報を持っていない。

大抵の管理外世界は、文明レベルが低い事から管理外世界になっているが、偶に管理局より技術発展を遂げた世界が現れる。その世界は星間航行技術を有する事が多く、仮に侵略しても次元航行艦以上の高高度から撃たれてお終いである。それに宇宙空間では次元航行艦は移動する事にしか役に立たない。しかも人工衛星軌道の距離まで。おまけに次元航行艦には大気圏外で使える武装が殆ど無い。唯一撃てるアルカンシエルですら発射に時間が掛かり、その間に艦載機などで接近されたら手も足も出ない。

更に言うなれば次元航行艦は、静止衛星軌道以上高度をとる事が出来ない。

これは時空航行艦の魔力動力炉が、大気中の魔力を取り込む事で稼動しており、その魔力は人工衛星軌道までしか存在していないため、それ以上高度をとる事が出来ないのである。

本局にしたって次元空間に在るとは言え、場所はミッドチルダ近郊で電力にしたって原子力発電がせいぜいだ。しかもその施設は広大で本局の一割は発電施設だ。十年程前にヒュードラ型動力炉を導入によつて次元航行艦の活動範囲は広がったが、それとてXL級の大型次元航行艦にしか搭載できない。

ついでに言えば、真空中ではやっぱり魔力が霧散する為、静止衛星軌道の少し上までしか行けない。

故にミッドチルダは月まで行けるだけの星間航行技術を待たない。

魔力エネルギーに依存しているミッドでは、仕方のないことではあるが……。

それに文明レベルが高いと、情報技術も必然と高くなる。そうなると異邦人になる自分達が居られる場所も限られる。

話が逸れたが、文明レベルの低い管理外世界に行ったとしても、その世界に魔法が無い場合自分達は、中世の魔女狩りのような目に遭うだけだろう。魔法が在ったとしてもその世界ではベルカ式魔法を異端として扱われると考えた方がいい。

だが、魔法文明が在る場合は管理局が管理したがるだろうし、そ

マジックアイテム
の世界の魔術道具をロストログアと称して強奪または盗難しようとするだけだろう。

それにヴィータやはやてはともかく、シグナムやシャマルのような美人が噂にならない筈が無いし、男達や権力者が放って置くとは思えない。ザフィーラにしたってそうだ。人型は耳と尻尾が。獣型にしたってアレだけの大きさだ。子犬形態にしたって、成長しないのはおかしいと怪しまれる。チワワやミニチュア系の小型犬としてならともかく……。

無人世界にしたって、管理局が勝手に観測世界と称して私有地扱いをしている。

となれば残るのはベルカ領の聖王教会くらいだ。

あそこならば、ほぼ身の安全は保障される。それに夜天の魔導書はベルカの至宝の一つだ。教会は両手を上げてはやてを迎え入れてくれるだろう。

力を持つ覚悟は有った。力を持ち続ける覚悟も。

力を振るう覚悟も、振るわれる覚悟も。

でも、自分のもつとも大事な者が傷付けられるのだけは、絶対に我慢できない。

利用されるのも。

踊らされるのも。

騙されるのも。

自分は、八神はやての家族で、騎士だ。

彼女のためなら、たとえ世界を敵に回そうとも、この力を振るう事にためらいは無い。

てめらの思い通りはさせねえからな。 時空管理局

待機状態のデバイス。愛機グラーファイゼンを握り締め、ヴィータは心に誓った。

そしてそんな時であった。

「本局から緊急通信！ 未確認勢力が本局を襲撃！ ロストログアを多数強奪して逃走！ 被害甚大！！」

その場にいた全員に緊張が走った。

第九話「黒き幸たる鍵尻尾の黒猫」（後書き）

作者はこの歌、大好きなんです。泣けますよね。少々話が強引ではありますが、読んでくれてなら幸いです。

作者は携帯からの投降が出来ない（と言うか携帯での入力が見えにくい）人間ですので、モニター復活まで執筆してないので少々時間が掛かりました。

モニター故障中に友人からモンスターハンターポータブル2ndGに誘われた為、やりだしたらはまったと言うのも、更新が遅れた原因です。

YouTubeでドラゴンカーニバルが神で興奮して、一時期モンハンの世界に主人公を放り込んだ話を書きなくなっただけです。モンスターハンター ドラゴンカーニバル で検索すると多分当るので見てみてください。ニコ動のアカウントをお持ちの片はそちらでも。

作者は現在HR2で弓装備。ラオシャンロン 老山龍目指して頑張ります。
ドリル装備が作りたい今日この頃。

この世界は 夢をくれる〜。

第十話「時空管理局本局、世界遺産奪還作戦」（前書き）

お久しぶりですこんには。

東京の暑さと残暑にやられて寝込んでいた作者です。

雪国出身な為、夏場はエアコンが無い為、日中は死んでました。

今回から管理局の魔法は勝手に「リンカー術」と呼称する事にしました。魔法はリンカーエネルギーで。

多分この作品のアンチは魔法設定にアンチかと。

それでは本編どうぞ。

テクマクマヤコンテクマクマヤコン。プリティコケティッシュボンバー。

第十話「時空管理局本局、世界遺産奪還作戦」

第十話「時空管理局本局遺失物強奪事件」

次元空間。

生物が存在する事が出来ない空間において、一人の男が空間を見つめながらその場に佇む。

灰色に近い淡い銀髪を首の所で一つに束ね腰まで垂らし、逆立ったウルフヘッ드의髪型を靡かせ、乳白色に近い銀色の瞳は、とある一点を見つめる。

この男、言わなくても分かるが銀狼である。

視線の先数百万キロの地点には、一つの巨大建造物が鎮座している。

時空管理局本局。

この次元世界の全世界の管理を目論み、その世界の遺産を“自分達が解析・理解出来ないから”という理由でロストログアと称して強奪していく犯罪組織の巣窟である。

自称法の番人。 自称世界の守護者。 自称魔法と正義の執行者。

頼まれた訳でもないのに勝手にやって来てはその世界に干渉して、事態を余計に引つ掻き回して、事件の被害を増やし、それを現地住民の『管理局に対する理解と従事と認識の無さ』の所為にして、その世界に内政干渉して管理世界と勝手に決め付け、管理局の管理下に入るように強要する。

従わない場合は犯罪者として武力行使で逮捕、そして管理局に対して奉公活動させる。従わない場合は隔離施設で幽閉か、研究機関で人体実験の研究材料にされるといふ始末である。

しかし管理局は、それは全て正義の為だから問題ないむしろ管理局の役に立ったのだから褒めてやる。そう言ってくる始末である。

歪み腐敗した組織。その管理局に対し、男は何を思っで見つめているのか……。

その時、男の後方に六紡星ヘキサグラムで描かれた魔方陣が出現する。

「こちらの準備は完了した」

現れたのは碧髪碧眼の男。蒼いマントに身を包み、右肩からは剣の鏢と柄が見える。

「サンキュー、『マジック・マスター』。あとでポツケ村集会所で落ち合おう」

「分かった。クックでも狩って待っているとしよう。健闘を祈るぞ『ミリオン・マスター』」

男は足元に先程と同じ魔方陣を描くと、次の瞬間には転移してい

った。

今の魔法を見れば、管理局の人間は驚愕するだろう。

自分達の知らない六絢星の魔方陣に、数秒とかかかっていない転移魔法。

そのどちらもが、ミッド式を上回る魔法術式なのである。

ロストロギアを使っている。と本局の人間なら豪語するだろう光景であった。

そして男が去った後には二人の女性が残っているのみであった。

青白い髪に白いヘッドギアと紅い瞳、白い装甲を身に纏った美女と、白い髪に黒いヘッドギアと青い瞳に褐色の肌、黒い装甲に身を包んだ美女。

二人の女性は同じ顔立ちでありながらも、放つ雰囲気の所為で全く違う顔に見える。

コスモス
K O S - M O S 。 テロス
T - e l o s 。

グノシスと言う異形の生物と戦う為に生み出された、アンドロイドである。

「それで、マスター。管理局の本局に奇襲を仕掛けるのはいいけれど、今回の目的はなんなの？」

褐色肌に白髪の美女、テロスが声をかけてくる。

「今回“は”本局の遺失物保管庫の一つ、第八遺失物保管庫を狙う。ターゲットはとある管理外世界から、強奪された『ジエダイの剣』(しやうたいのけん)と呼ばれる物の回収だ」

「ツルギねえ……魔剣か何かの類いかい？」

「いや、エネルギーセイバーの一種だ。通称は『ライトセイバー』と呼ばれる対人携帯武器の一種で、刀身のエネルギー発生装置に特殊なクリスタルが使われていて、それが管理局の技術では解析・理解出来ない物質と言う事でロストロギアとして回収された」

「持ち主の方はどうなったのですか？」

白い装甲と青白い髪のコスモスが聞いてくる。

武器であると言う事は当然持ち主が存在する。そして持ち主からの強奪が十八番な管理局。ではジエダイの剣を奪われた持ち主はどうなったのか？

個として己を確立しているとはいえ、それと同時にアンドロイドである事を自覚しているコスモスは、それを使うべき持ち主がどうなったのが気になった。

「とある管理外世界で、管理局がライトセイバーをロストロギアと勘違いして接触。武装解除命令と降伏命令をするが拒否され抵抗により、その時の執務官は死亡。その後次元航行艦二隻で逮捕しようとするも二隻とも轟沈。艦隊二つを派遣した。死闘の末、アルカンスィエルで殺された。爆心地には傷一つ無いライトセイバーだけが転がっていたそうだ。そしてソレを管理局はロストロギアとして回収。

構造や物質を一切解析する事が出来なく、刀身を出す事も出来ずにA級ロストロギアとして、しても無意味な封印措置をして保管された」

「相変わらず管理局は馬鹿な事をやってるねえ」

テロスもまた、管理局の頭の悪さと傲慢さに顔を顰める。

「さて、そろそろ作戦を開始する」

銀狼は背後に漆黒の穴を展開する。

直径二十メートルの穴が三つ。そして其処から一体ずつ、人型の機動兵器が姿をあらわす。

一体は髑髏マークとV型アンテナにデュアルアイ。首から下はマントに身を包み、背中からXのように伸びたスラスターが特徴の機体。

クロスボーンガンダムX1

漆黒の鎧に身を包み、大きなショルダーガードに機体より長く伸びたテールバインダー！。

ブラック・サレナ

二つの熱核バーストタービンエンジン。三段階の変形機構を持ち、単独での大気圏離脱・突入、単機による戦術戦闘機。

V F - 2 2 S シュトゥルムボーゲル

三体の機動兵器が、姿をあらわした。（VF22はバトロイド形態）

銀狼はクロスボーンに、テロスはブラック・サレナに、コスモスはVF-22へと乗り込む。

「それじゃあ二人は、亜空間ワープで15分後に襲撃。陽動攪乱をしつつ次元航行艦の停泊所を攻撃。通信施設は破壊するな、応援を呼ばせる」

『イエス・マスター』

ファイター形態へと変形したVF-22とブラック・サレナは、亜空間へと突入していった。

「さて、こちらも仕掛けるか。『蔵』展開。亜光速ブースター装着」

クロスボーンの後部に全長五十メートルにも及ぶ巨大なブースターが出現する。

ただし、ブースターの推進部はノズルではなく、レンズのような物が付いている。

亜光速ブースター。光の速度の半分まで物理加速が可能な推進加速装置である（真空中）。

クロスボーンは背中のメインスラスタを背中中央に折りたたむと、ブースター先端部と接続させる。

「接続確認。動力炉起動確認つと。相対性時間感覚調整期、こちらも起動を確認。管理局本局までの距離算出。……約三百万キロといった所か。加減速の時間を算出して、五分後に管理局本局前千キロの地点に到達するように調整……つと」

ブースターの推進部に光がとる。

「神無銀狼。クロスボーンガンダムX1。発進する！」

次元空間において、一機のMSが時空管理局本局に向けて移動を開始した。

時空管理局本局。

「次元空間より急速に本局に接近する未確認機を確認！ 機影は一つ！ 距離800キロ、移動速度は……ウソ！？ 時速三千六百キロ以上！？」

「何だと！？ 機械の故障じゃないのか！ 何処の世界に時速三千六百キロ以上で移動できる物体が在る！」

突然管理局本局のレーダー網に飛び込んできた、未確認の移動物

体。

時速三千六百キロ。約マツハ3で移動する、未確認機影に時空管理局は大いに慌てた。

何せ時空管理局で最も速いのは、Sランク空戦魔導師の時速四百キロが最高なのだ。（次元航行艦は時速百がいい所）

『此方からの通信に応答無し！ 未確認機、真つ直ぐ本局を目指しています！』

『クソツ！ この時空管理局に攻撃を仕掛けようってのは一体何処のどいつだ！？』

『未確認機700突破！ あと十分で本局に到達します！』

『とにかく船を出せ！ 応答が無いようなら撃ち落してかまわん！』

本局の管制塔が右往左往する中、銀狼はX1のコックピットの中でその通信を傍受していた。

無論、通信の一つには先程から、所属や姓名を問う通信が入っているが、そちらは完璧に無視している。

また、ソレとは別に銀狼は管理局に対して通信を送っていた。

内容は『貴公等は我が世界の貴重なる遺産を強奪した。よって貴公等から我が世界の宝を奪還させていただく。なお、此方の行動に抵抗した場合は即時射殺の許可が下りているので、無駄な抵抗はしないように』という文章を送っているのだが、管理局はこの通信を

理解解読できないでいた。

ソレもそのはず。銀狼が送っている通信は、とある世界の銀河統一国家が使用している通信信号であり、管理局が使っているリンクル術を用いた物ですらない為、通信の内容はおるか通信そのものに気が付いてないのである。

分かりやすく言えばタクシー無線（管理局）では地デジ電波を受信できないような物。

しかし、この事についてはさほど問題はない。相手は時空（を）管理（侵略・支配したい）局。

余所の世界に介入（侵略）したいなら、その世界のことは調べるのが当然である。銀狼は管理局が使っている通信周波数を調べた上で、あえて感知出来ない通信を使っているのである。

理由は単純明快。I・Y A・G A・R A・S E！ の為である。

銀狼にとって管理局は全く脅威にならず、道端に落ちている空き缶をゴミ箱に捨てるような感覚である。ただし、いかにゴミ箱に面白おかしく入れることが出来るか、が目的であるため管理局にたいしては『邪魔だな』の一言で済ませている。

「此方からの通信に応答は無し。抵抗の意志有りと判断し、排除行動に移る」

ちなみに銀狼の言葉はただの雰囲気作りである。

そうこうしているうちに、目標まで残り三百キロを切った所で、

次元航行艦が本局から発進してきた。

本来なら無差別広域通信などで勧告するのだが、銀狼は『面倒くさい』の一言でする気が無かった。

（そもそも今回の作戦も、奪還だから武力行使による強行作戦だしな）

管理局がロストログアを素直に返すなど、微塵にも思っていない銀狼は、目の前の障害を排除する。

本来なら魔導師が出て来るのだが、次元空間では人間は生身で出る事が出来ない。

そして何より次元航行艦は基本的に対艦巨砲主義傾向がある。

人間が次元航行艦を墜とす事など出来ない。何より管理局の次元航行艦に敵う者など、この次元世界に存在しない。そういう考えの者しか、本局にはいなかった。

何より魔導師の圧倒的な力を見せつける為、次元航行艦は基本的に後方待機である。

しかし、その考えと、次元航行艦の運用能力の無さが、彼等の敗北の原因となるのであった。

「見せて貰おうか。時空管理局の次元航行艦の性能……は良くても、中身が悪すぎるから見れないか」

次元空間は真空の宇宙と似たような物だが、真空以上に何も無い

空間だ。魔導師が出てくる事はまず無い。

「艦橋ブリッジと動力炉エンジン壊しゃあ墜ちるか」

次元航行艦との距離が百キロを切った所で、相手方から発砲。しかし直進しか出来ない砲撃の命中率は悪い。

「リンカー術は弾速たまあしが遅いんだよ！」

拳銃の弾丸が初速640メートル。リンカー術の弾速はソレよりも遅い。ましてや秒速二キロの戦車砲すら避ける銀狼にとっては次元航行艦の艦砲射撃など、スローで投げられたバスケットボールのような物だ。

一分と掛からずに射程距離まで詰め寄ったクロスボーンは、ザンバスターを二発放つ。

狙い違わず二発のビームは次元航行艦の艦橋と動力炉を貫く。

轟沈していく次元航行艦を後目に、クロスボーンは額の髑髏を、死神の如く猛威を振るう。

「さあて、海賊がお宝をいただきにやって来たぜえ！
海賊旗ジョリー・ロジャーを揚げろー！！」

次元航行艦を次元空間のもくずと化しながら、本局へと接近していく。

それから僅か十分足らずで銀狼たちは引き上げていった。

本局接触と同時に、亜空間ワープから出現したVF22とサレナが停泊港を攻撃。

発進する間もなく、停泊していた次元航行艦は沈んでいった。

迎撃の目がVF22とサレナに行った隙に、クロスボーンはロストロギア保管庫を襲撃。

第八保管庫から目的の品を手に入れると、ついでに保管庫に有ったロストロギアを全て蔵の中に収納。

さらに両隣の第七、第九保管庫のロストロギアも、全て蔵に収納代わりに保管庫には、廃棄された次元航行艦の鉄屑をこれでもかと言わんばかりに放り込んでおいた。

発進できた次元航行艦も、VF22の機動性とサレナの運動性に翻弄され、次々に轟沈していく。

サレナのハンドカノンとVF22のガンポッドの前に、次元航行艦の装甲は脆すぎた。

艦橋と動力炉は撃ち貫かれ、エネルギーを暴走させて船は爆発する。

船外に吹き飛ばされた局員は、何も無い次元空間で息も出来ずに死んでいく。

後にはただ鉄屑と肉の塊が浮遊するのみ……。

時空管理局始まって以来の重大事件。時空管理局本局襲撃ロストロギア強奪事件は起こった。

撃沈した次元航行艦二十七隻。死亡者二千三百人。重軽傷者二千八百人の大惨事であった。

犯人は大型の機動兵器に乗っていたものと判断されたが、機動兵器に類似的な繋がりが全く無く、その圧倒的性能に管理局本局は、機動兵器をロストロギアと断定。Sランク級ロストロギアと指定して全管理世界に捕獲または破壊の命令を下した。

しかし、十年以上に渡って捜索が続けられるが、全くの進展も見せずに座礁に乗り上げ、事件は迷宮入りとなる。

彼等は気が付かない。管理外と見下したその世界で、襲撃者達はお互いに愛を確かめ合っている事に。

「マスター。もっと……もっと、突いて下さい！出して下さい！！」
「だ、だめえ！ますたあ！あたしいっちゃう！いっちゃいのお！！」
『いっくうううううううっ！！！！』

宴はまだまだ終わらない。……男の精力と体力が尽きるまで。

その頃、とある集会所にて。

「銀狼はまだ来ないのか、テリー？」

ライトボウガンを担いだハンターが、ランス使いのハンターに問い掛ける。

「さっき連絡取ったが、しっぼり中だった」

「じゃあ、後三時間は来ないか。すいませーん、ギガントミートとオニマツタケの料理追加で〜！」

同じテーブルの隣では、大剣使いが突っ伏して居眠りをしている。その右手には黄金芋酒のコップが握られている。

「ZZZZ……………モノブロスたん萌え」

男たちはモンスターハンター。今日も今日とて彼等は狩りに出る。

「ところで気になったんだが、アメザリボウガンの『ツッコミ速射』って何に突っ込むんだろう？」

「俺に聞くな。ライトボウガン使い。作って試せ」

「素材が足りません」

「銀狼がチケット持ってるから貰え」

……………「こつ見えても彼等は一応G級なのである。」

第十話「時空管理局本局、世界遺産奪還作戦」（後書き）

作者は先日、誕生日を迎えました。（それがどうした。）

今回の話は書いてて結構難産でした。

作者は「リリなの」はSTSしか見たことが無い為、この話においてはかなりの独自設定だらけです。

その他の設定資料は大半が二次創作作品を呼んで得た物です。

資料は設定は好きなタイプですが、公式設定を紙媒体で持つというのが私の通なのですが、基本買いません。

これからもこの作品は作者の独自設定で進んでいきます。よろしく願います。

ついでにこの作品における強さはこんな感じ。

銀狼>世界渡航者（上位）>越えられない壁>世界渡航者（平均）
>越えられない世界>>虚数空間>>>リンカーコア無しの強者
>SSS+ランク魔導師 よく居る転生者>アーマードトルーパー
>六課隊長陣 本局エリート>フォワード陣〃武術初段>本局武装
隊>地上部隊一般魔導師>一般局員

こんな感じです。

強さは総合的ですが、戦場を限定しますと、六課隊長陣は結構弱い
です。

特に屋内や室内などの限定空間においては、空戦魔導師はその機動
性を生かせない為戦力は低下。

ちなみに飛行魔法を使わない場合、六課隊長陣は3ランクは戦闘力

が落ちます。特になのはやはり運動能力も低いので下手をすればティアナより弱いです。

幕間「ランスター」（前書き）

とりあえず、ティアナ強化の為のフラグ。

在り来たり展開だけど、ソコは一つひとつぞよろしく。

急遽書き上げた為、ミスがあったら報告下さい。

幕間「ランスター」

幕間「ランスター」

時に新暦69年。雨季の訪れと初夏の訪れが同時にやって来る頃……。

特資八課の部隊長室に、ドアのノック音が響く。

「エルンスト・イエーガーです。ティード・ランスターを連れて来ました」

「入ってくれ」

入ってきたのは、三十代の顔立ちに若干垂れ目掛かった相貌の男と、オレンジ色の頭髮で二十歳程の青年。

エルンスト・イエーガーは二年前に入隊試験に合格して特資八課に入ってきた男だ。

特資八課に来る前は第079陸士部隊で小隊長を務めていたのだが、レジアスが地上部隊の幾つかを再編成する際に、アランが偶然目に付け、入隊試験を受けさせた所、ゲルグトルーパーを使ってではあるが、見事合格を叩き出したのだ。

本人も結果には半ば驚いていたが、現場においての冷静な判断能

力と長年培ってきた指揮能力が、アランの目に付いたのであった。

アランが『行く所に迷っているなら、特資八課ウチに来ないか？』と誘ったところ、首を縦に振ったのであった。

階級は前部隊に居た時と変わらない二等陸尉ではあるが、戦闘能力は文句無しのSランク評価を叩き出しているのである。ただし、エルンストは最新鋭装備より、一昔前のロートル装備を好む傾向があるので、彼は現在ザクトルーパーS型を使っている。

もう一人の男ティータは、半月ほど前にアランが声を掛けてスウトしてきた男である。

特資八課に問わず、特殊資料課というところは非常に膨大かつ複雑な資料を扱う。中にはロストログア解析の為に、特殊資料課の持つ独自の見解力を求める物もあるが。

ティータの夢は執務官として働く事。しかし、その道は険しい。そこでアランは特資八課でティータに執務官としての下地を築かせようと、特資八課に誘ったのである。

これにティータ二つ返事で了承し、執務官候補生として特資八課で、『部隊員見習い』として働く事になったのである。

ちなみに『見習い』なのは正式な部隊員ではなく、現在は首都航空隊からの出向という扱いだからである。

『空』は現在、地上部隊との連携でミッド・チルダを守るのに尽力しているため、かなり『陸』とは仲が良い。その為ティータも特資八課に出向出来ているのである。

「よく来た。ティード・ランスター見習い」

「み、見習いですか？」

いきなりアランの口から出た言葉に、ティードは困惑する。

「君は航空隊からの出向扱いだからな。正式な特資八課隊員で無い場合は、ウチでは全員『見習い』呼ばわりされる。階級に関係なく」

ちなみに見習いは階級で呼ばれることは無い。

「まあ、これは一種の線引きだ。君が首都航空隊の人間だと言う事を忘れさせない為のな。」

とりあえず君はこの第八特殊資料課、起動戦闘部隊。通称『特資八課』で執務官候補生として下地を積んで貰う。君が晴れて執務官になった時は、元の場所に戻るもヨシ、執務官として一人でやるもヨシだ。

ちなみに特資八課入る場合は、例の入隊試験で合格できないと入れないので、ウチに入りたければ死に掛けるくらいガンバレ」

最後の言葉に、ニヤリと口元を歪めるアランに、ティードは思わず汗を流す。

「まあ、とりあえず今日の所は部隊員との顔合わせと、ウチの仕事の見学くらいだ。ちなみにウチには何人か、人間じゃない部隊員もいるが気にするな。使い魔と似たように考えて構わないが、人として扱わない場合は君のコア、ブチ砕くから注意するように」

「わ、分かりました」

他者を圧倒する威圧感と、ドスの聞いた最後の言葉に、ティータは若干恐怖を感じた。

「以上だ。下がっていいよ。イエーガー、手え空いてるなら案内よろしく」

「了解しました」

そう言って二人は部隊長室から出て行った。

「大丈夫か？ ランスター」

部隊長室を出て廊下を歩くティータの顔色が、若干優れなかったためエルンストは声を掛けた。

「え、ええ。大丈夫です。最後の迫力というか威圧感に少々驚いてるところです」

ティータの言葉にエルンストも、入隊した時の事を思い出したのか、苦笑しながら同意する。

「ははは、だろうな。俺もここに来て、最初に部隊長さんと顔合わせした時、同じ事言われたからな」

「そうなんですか？」

「まあな。ちなみに俺の時は殺気も含まれてたから、思わず悲鳴を上げかけたよ。まあ、部隊長は管理外世界出身だし、愛人や恋人はほとんど人間じゃないからな」

「管理外世界……道理で……ってあれ？ 部隊長は愛人や恋人が何人も居るんですか？」

結婚してるわけじゃないから、浮気ではないだろうが、三股とかいいの？

二股と考えない時点で、ティーダはアランが三人以上関係を持っていると考えた。

「部隊長の出身世界は、普通に重婚可能だからな。ミッドじゃ特定の条件を持ってないと重婚できないから、あまり理解はされてないが、当人達は合意の上でらしいからな」

それに女性たち曰く、一人じゃ持たないとか耐え切れないとか……。

「まあ、彼女達に下手なチョツカイ出さなきゃ問題ないさ。それに人間じゃないとは言え、美人だからあまり気にならないしな」

あ、結局ソコなんだ。とティーダは男のサガに若干、呆れと哀し

さを感じた。

だが、それから数カ月後、クラナガンに違法リンカー術師が現れ、緊急の要請により追撃任務に当たっていたティーダは、この任務において殉職する。

逃走していた違法リンカー術師とは別のリンカー術師が、ティーダの進路に設置型のバインドを仕掛け、自爆設定の殺傷設定でティーダを殺害したのである。Aランクの実力があるながらも、仕掛けられていたのはSランクオーバーの威力のモノ。バリアジャケットを纏っていても、爆発が肺の中から彼を焼き尽くしたのであった。

違法リンカー術師の方はティーダが手傷を負わせていたので、応援に駆けつけたAT部隊が取り押さえたが、もう一人のリンカー術師は痕跡を見つけることが出来なかった。

ティーダのデバイスも爆発の影響で、メモリー部分に重大な損傷を負っていた為、犯人の手がかりは掴めなかった。

そして、犯人を首都航空隊のリンカー術師が捕まえられなかった事で、自分の手柄に出来なかったティーダの上司は、彼を『無能の役立たず』とティーダの葬式の席で罵るのである。

もつとも、同席していた特資八課やティータと友人であった地上部隊の面子によって、フルボッコのタコ殴りの袋叩きパーティーになったのは言うまでもない。

ちなみに何故か参加者の仲には何処からともなく駆け付けた、地上部隊の武闘派将官たちも混ざっていた。

フルボッコされた上司は、『海』出身の本局魔導師主義者なのが主な原因らしかった。ちなみに憤怒の形相で現場に駆け付け、修羅の如く制裁を加えていたレジアスは、アランによって本部に連行されて逝った。

墓地に雨が降り注ぎ、雨水が墓石を濡らし、参列者達が帰宅していく中。

雨の中を、傘も差さず、今は亡き兄の形見を、その幼き両腕で抱きしめる、一人の少女。

彼女の瞳は、兄の墓石をただ黙って見つめる。

その瞳には、真っ直ぐな光が宿っていた。

兄を侮辱した愚か者は、その場にいた沢山の優しき参列者たちが制裁を加えてくれた。何人かは胸元に沢山の勲章を付けていたようだったが……。

皆が怒ってくれた。皆が悲しんでくれた。自分の兄はこんなにも誰かに親しまれていた。こんなにも愛されていた。

その兄が愛してくれた自分が、何時までも落ち込んではいられない。

だから、ティード・ランスターの妹であり、家族である、ティード・ランスターは……

「……こんな所で、立ち止まってなんかいられないよね。……お兄ちゃん！」

幼き顔の両頬には、雨が涙かは分からないが何かが流れたあと。

と、そこでティアナは、今時分に雨が当たっていない事に気が付く。どうやら随分と思いついていたらしい。

顔を後ろに向けると、黒いスーツが目飛び込んできた。

視線をゆっくりと上に上げていくと、むさ苦しい男の髭が見えた。

ソコからさらに視線を少し上に向けると、男が自分に差している傘の縁が邪魔して見えなかった。

「……だれ？」

「俺か？ 俺はただのティードの酒飲み仲間の一人さ」

そう言いながら、男は膝を折り片膝を付くと、視線をティアナに

合わせる。

「昔ティーダに、銃の持ち方と撃ち方を教えてやったのも俺だがな」

「……お兄ちゃんの、先生？」

自然と出てきた言葉は、自分の兄の先生と言う言葉。

「そんな大したモノじゃないさ。まあ、アイツからは先生と呼ばれていたがな」

じゃあ、やっぱり先生じゃない。とティアナは思った。

「俺はジャック。ジャック・バレット・ランディバース。お嬢さんのお名前は？」

顔つきは厳ついし、髭はむさ苦しい。どう見てもオッサンと呼べる歳の男。

「ティアナ。ティアナ・ランスター」

だがしかし、その瞳は兄よりも強い光を宿している。

「ティアナか……、いい名だ。ティアナはこれから、どうしたい？」

兄、ティーダが残した財産は、特資八課が管理を請け負った為、親族に取られる心配はない。住んでる家はこれから引き払い、管理局系列の孤児院に入ることになるだろう。

ティアナはリンカーコアを持っているため、リンカー術師になる

素質が有った。

「管理局の孤児院に入れられるか、目の前の知らないオジサンに引き取られるのと、どっちがイイ？」

孤児院に入ったところで、すぐに訓練校に入学させられ、管理局員として働かされるだけだろう。

確かに目の前に居るオツサンは知らない人だが、兄が先生と慕った（多分）人物。

「……じゃあ、オツサンがいい」

「……オツサンじゃなくて、オジサンな」

互いの言葉に挨拶は要らない。

「ちなみに『銃弾・マスター』と、知り合いからは呼ばれている。ジャックとそう呼んでくれ」

ティアナ・ランスター差し出されたその手を握った。

後に『ガンスリンガー』と呼ばれる少女が誕生する。

「あ、言い忘れていたが俺は、管理局から『魔銃』というコードネームで呼ばれている、懸賞金二億四千万の男でもある」

「ちよつと!? それは流石に聞いてないわよ!？」

この数年、無人世界で本局の戦艦墜としをやっていた為、また賞金があがった『魔銃』こと、ジャック・バレット・ランディバースなのであった。

一方その頃の特資八課にて

「仕事放り出して、喧嘩に混ざりに来るとは、テメエは何してやがるっ!!！」

「ワシだって奴の言葉には我慢がならなかったんだ！ それのどこが悪いっ！」

「公私混同してどうする!? テメエ大将だろうが!!！」

「一番真っ先に手え出した、特務大佐が言うか!!！」

大将と特務大佐が取っ組み合っつて喧嘩していた。

部下はそれを見てトトカルチョ。その後二人から鉄拳制裁。ほぼ平和な特資八課の日常だった。

幕間「ランスター」（後書き）

ちなみにジャックの外見は、スネークの眼帯&バンダナ無し。
脳内ヴォイスは勿論、あのお方。

能力は名前から想像がつくと思うので、そのうち本編で説明。

以前『黒き幸・ホーリーナイト』をどうやって管理局が盗んだかの補足。

夜になったら、美術館の電線を切断。なのはとフェイトが正面からドアを壊して突入。

サブ電源に切り替わったら、クロノがサブ電源破壊。監視カメラを破壊しつつ侵入。

警備員なのはとフェイトがごり押しで掃討。

別ルートから侵入したクロノが絵を確保。

なのはとフェイトの砲撃で壁抜き。ソコから脱出。すぐに転移。

という流れ。

ちなみに警備員は、なのは達の攻撃が美術品を傷付ける軌道だった為、体を張って守って気絶。クロノは別ルートだった為、警備員と遭遇せず。

ついでに言えば、クロノは美術品の価値が解らない為、通路にあった美術品を破壊しながら侵攻。侵攻の邪魔だと言う理由で。

監視カメラに映像は残っていなかったが、なのはとフェイトが互いを呼び合っていたので、そこから手配と言った形となります。ちなみに人相書きは本人そっくり。

暗闇？ リンカー術は光ます。黒系の魔力光でない限り。

ではまた。

第十一話「手紙届の聖なる騎士たる黒猫」(前書き)

会話文が殆ど無い事に気が付いた今回(大抵。

妄想と執筆とでは勝手が違う今日この頃。

涼しくなつて頭が冴え出す今日この頃。

秋が近づき読書な今日この頃。

相変わらず不定期更新な毎回!!

それではお楽しみ……しなくてもいいから読んでっ……!

第十一話「手紙届の聖なる騎士たる黒猫」

第十一話「時空管理局は次元世界一」(ウソ)

時に新暦67年。一月下旬。高町なのは墜落。

原因。無茶なトレーニングと睡眠不足、及び魔法絶対視による慢心と油断。

事柄。第8無人観測世界。管理局演習場に指名手配犯『魔銃』が出現。現地で演習予定だった武装隊二個師団が逮捕に向かうも壊滅。損傷。腹部に銃弾を一発受けてショックにより気絶。援軍が来るまでの出血多量で半身不随の後遺症。

追記。指名手配犯『魔銃』。懸賞金三億六千万、危険度SSランクに上昇。

なお、魔銃はその後解析不能転移方法によって別世界へ次元転移。追跡不可能。

応急処置の不適格により脊髄が損傷、両足の壊死という診断結果に絶望するも、プロジェクトFの技術を用いて首から下の交換により治療。

リンカーコアを強化した肉体に交換したことにより、リンカーエ

ネルギーランクがAAAからSランクになる。

最初は脊髄と両足の再生治療の予定だったが、管理局にそれが出来る外科医が存在しない為、プロジェクトFの技術を使う事に変更。クローンの肉体を使うことに若干の抵抗はあったようだが、再びリッカー術を五体満足のまま使いたいという欲望に負け、手術を決行。

この時掛かった手術費用は数億円だが、リンディ・ハラウンが権力などを乱用した為、わずか三百万と言う破格の値段で手術となった。

ちなみに再生治療の場合は十億近くかかり、その手術が可能なのが地上本部第八特殊資料課アラン・スミシー特務大佐のみが可能だった為、リンディはこれを却下したと言う。

三ヶ月間のリハビリ生活後に再び、本局武装隊に再編入。

この事故から、戦技教導官になるべく試験を受けるも、この年より戦技教導資格に年齢制限が付き、特別扱いで試験に臨むも、一次審査の書類選考の時点で不合格。抗議をするも『全てにおいて未熟すぎる』の言葉以外を掛けられず一蹴。

この時高町なのはは、『自分のように、怪我をする人間を出さない』と言う考えしかなく、戦技教導隊への入隊も『怪我をした自分が教導してあげれば、怪我をする人は出ない』という、なんとも傲慢な考えだった。

そして何より彼女は、『戦闘』や『戦争』はもちろん、『戦い』と言う物が何なのかさえも全く理解していなかった。戦いにおいて『殺す』覚悟も『殺される』覚悟もないのに、ただミッド式リンカ

「術を使いたいたいからという、力に溺れた人間が他の者に対して高説を述べているような物だった。」

非殺傷設定リンカー術は誰も何も傷付けないと言う、管理局本局の幻想と妄信を信じている為、いかに自分が持つ『力』と言うモノが、殺戮を振り撒ける『暴力』であるのかに気が付いていない。

例え気が付いたとしても、自分だけは潔癖で正しい考えだから違う。そう言っただけで否定して逃げるのだが……

これ以降彼女は、毎年戦技教導官試験を受験しようとしてたが、教導官資格は25歳以上であるため断念する羽目になるのである。裏でリンデイが圧力を掛けようとしたが、地上からの査察の目が光ったので断念。(一回目の特別扱いはリンデイが権力を乱用したおかげ)

フェイト・ハラウンもまた執務官の試験に受けるも、三回不合格。四度目にして及第点ストレスで合格できたらしい。

なお彼女はテストロツサの性を、ハラウン親子が『犯罪者の名前だから』という理由で捨てさせた。しかし、フェイトはテストロツサの家名を捨てる事に何も躊躇も戸惑いもしなかったらしい。

八神はやては捜査官になる為に、地上部隊にて補佐官として108地上部隊に配属。また、ヴォルケンリッターのことを考え、住居をミッド・チルダに移行する。

それと同時に、聖王教会と接触。管理局での奉仕期間の後は、その身を聖王教会に寄せる事になる。

時に新暦70年までのアースラの三バカ娘の話。

第十一話「手紙届けの聖なる騎士たる黒猫」(こつちがホント)

新暦70年。時空管理局本局において、ロストロギア『黒き幸・ホーリーナイト』が、指名手配中の時空犯罪者、七篠・権兵衛に盗まれた。

事件の二日前、七篠権兵衛から、本局でメンテナンスを受ける為に停泊していたアースラに、犯行メッセージが届けられたのである。

『始めまして諸君。俺様の名前は七篠権兵衛。今回俺様がお前たちにこのメッセージを送ったのは、お前さん達が以前、とある世界のとある博物館から強奪した品物、『黒き幸・ホーリーナイト』を取り返させてもらう為に、この犯行予告メッセージをお前さん達に送って差し上げてやったと言うわけだ。』

このメッセージが再生されてから二日後の深夜午前零時。日付が変わると同時に『黒き幸・ホーリーナイト』を奪還させてもらう。

ああ、ついでと言っちゃなんだが、高町なのはとフェイト・ハラオウンは現地では三百万円の賞金首になってるからな。せいぜい故

郷で犯罪者として追われる身を、楽しんでくれたまえ。ちなみに指名手配したのはお前さん方のご友人の、バニングスと月村の美少女たちらしいぞ〜

ちなみにこのメッセージは、再生後自動的にウイルスをばら撒くようになっていいる。精々ガンバレ」

このメッセージの後、アースラは全てのシステムが再起不能になると言う事態に陥った。そしてソレはメンテナンス中だったデバイスも例外ではなく、レイジングハート、バルディッシュもまたデバイスとして致命的な内部損傷を喰らったのである。八神家のデバイスは、メンテナンス中で無かった為難を逃れる事が出来たのである。

そして二日後の深夜午前零時。

リンディは一応、上層部に報告はしておいたが、そんな事出来るわけが無いという意見を報告に加えており、上層部もまた同じ考えであった為、『黒き幸・ホーリーナイト』を保管してるロストロギア第四保管庫には通常と変わらない人員しか配置していなかった。

高町なのはとフェイト・ハラオウンは、忌々しき七篠権兵衛を逮捕しようと気合を入れるも、己のデバイスが致命的な損傷を受けていた為、本局の自室で大人しくしているしか出来なかった。

七篠権兵衛は予告どおりに『黒き幸・ホーリーナイト』を保管庫から盗み出した。第四保管庫に有った他のロストロギア全ても一緒に奪われて……。

方法はいたって単純だった。

『しゅくち』を使い保管庫に侵入すると、蔵の門を展開してソコに根こそぎ放り込んだのである。

『蔵』の中では時間の経過が無い為、ロストログアが暴走するという事は無い。

ロストログアとは言っても、大抵は 管理局にとっては 超科学の一品に過ぎない。七篠権兵衛 銀狼の蔵の神秘の前には、物理法則すらも捻じ曲げられる。

そして態々、保管庫の扉を、内側から素手で殴り飛ばすと言う芸当をして、管理局員の前に姿を現したのであった。

「それじゃあ時空管理局の皆さん。お宝は確かに頂戴したぜ」

大胆不敵に笑いながら、七篠権兵衛は目の前で啞然と棒立ちする管理局員を後目に、本局の中央に向かって逃走を始めた。

「に、逃がすなあ！！ 追え！」

慌てて指揮官が叫び、局員達は走って七篠権兵衛を追い駆ける。

本局内部において、魔法の使用は基本的に禁じられている。

まあ、それ以前に本局に犯罪者が侵入する事など、ありえないと考えている人間しか居ないので、管理局員はバリアジャケットを展

開するだけである。

飛行リンカー術で追い駆けてもいいのだが、本局の通路を飛行できる技量を持つリンカー術師は少ない。何せ彼等は屋内で戦うという事をしたことが無いのだから。

現に何人かの局員が飛行リンカー術で追い駆けたが、すぐに通路の壁や他の局員と衝突するばかりで、まともに追跡する事が出来なかったのである。

そして、七篠権兵衛の追跡は数分と経たずに不可能となる。

リンカー術師はリンカー術に依存している為に身体能力が非常に低い。七篠権兵衛が百メートルを十秒フラットで走って逃げるのに対して、リンカー術師達は百メートルを二十秒以上掛けて追い駆ける。

おまけに権兵衛は壁や天井なども使い、縦横無尽に走って逃げる。

七篠権兵衛襲来の報告は、すぐさま本局全域に行き渡った。そして追跡以外の局員はすぐさま転送ポートを抑えに向かった。

この時空管理局本局から逃げ出すには、転送ポートか次元航行艦を使用するしかない。しかし、次元航行艦は常にリンカー術師が居る為不可能だと判断し、転送ポートにて七篠権兵衛を逮捕出来ると判断した。

しかし残念ながら、追跡班は数分と経たずに権兵衛を見失ってしまふ。魔力反応で追跡し様にも、権兵衛からは魔力が全く検出できない為追跡が出来ない。おまけに局内の監視カメラには権兵衛の姿

は発見できない。本人映像を流そうにも、監視カメラの映像は、顔の部分が『笑う男』になっていた為に顔が判断できなかった。彼を直接見たリンカー術師のデバイスの映像記憶も全く同じ状態であった為、七篠権兵衛の追跡は困難を極めた。

そんな中、七篠権兵衛こと銀狼は本局商業区画で、執務官の服を着てカフェでコーヒーを飲んで寛いでいた。ちなみに偽名はジョージ・マウンテン。

「さてと、第一目標は達成つと。お次はデータベースにアクセスして本局技術力の低下つと……」

ノートPC型の端末を操作しながら、銀狼は本局の技術関連のデータベースにアクセスして、データを書き換えていく。データベースの資料や技術関連を数世代ほど前の技術に書き換えていく。

管理局本局は自分達の所に在るデータや資料が絶対の物だと信じている為、バージョンアップのはずがバージョンダウンになっているとは知るよしも無いだろう。

銀狼が居る店の前を、何人もの局員が慌しく駆けて行く中、銀狼は端末からデータベースを改竄しつつ、管制塔に七篠権兵衛の偽情報流していく。

「さてと、こんな所か。店員さん、勘定頼むわ」

店を出た銀狼は、悠々と転送ポートのある区画に足を進めた。

転送ポートに到着した銀狼は、執務官権限を使い、個人用の転送ポートを使ってミッドチルダへと跳んだ。

本局でロストロギアが盗まれた中、そんな行動をすれば怪しまれるのだが、行き先がミッド・チルダで、しかもクラナガンの管理局地上本部ならば、それほど怪しまれなかった。ましてや管理局のお膝元に逃げるはずが無いと判断され、さらに偽造したジョージ・マウンテンは資料調査による犯人追跡能力に特化した、非魔導師である為、受付の人間は銀狼を何も疑わずにクラナガンの地上本部へと転送したのだった。

ロストロギア怪盗事件に関しては、本局で起きた事により内々的に処理された為、表沙汰になることは無かった。しかし、時空管理局本局はこの数年の間に四箇所ものロストロギア保管庫を全て奪われた為に、大々的に信用をなくしていった。

七篠権兵衛怪盗事件から数週間後……………。

第97管理外世界のとある国立美術館に、鍵尻尾の黒猫の絵が、再び展示されるようになる。

八神シャマルと八神シグナムがこれを確認するが、美術館周囲一

体を強力なAMFらしきものが展開されていて、デバイスの起動はおろか念話すらも使えないほどに強力であったため、『黒き幸・ホーリーナイト』の絵に関して八神家は秘密にする事にした。

なお、『黒き幸・ホーリーナイト』の絵の側には、常に一匹の鍵尻尾の黒猫の姿が見られるようになった。

美術館の館長がマスコットとして数年前から飼っていたらしい。

名前は勿論、「ホーリーナイト」

「じゃあ」

電波のおまけ。

とある管理外世界。

テガミバチと呼ばれる手紙配達人がいる世界。

「さてと、今日も手紙を届けるとするか。行くぞ、ホーリーナイト」

青い制服に身に付け、蜂の刺繍が施された帽子をかぶる、手紙配達人。

「じゃあ！」

それに従うのは鍵尻尾を持った黒猫。

彼等は今日も、夢と希望を届ける。

終わる。

第十一話「手紙届の聖なる騎士たる黒猫」（後書き）

最後のおまけはちょっとした電波。

冒頭初っ端から非人道的な管理局。

さすが自称正義な犯罪組織！ソコに痺れも憧れもありませんが。

移植手術云々に関してはかなり適当。

本当はアツサリ死亡させてもいいんだけど、STS編書く時に作者が無駄に苦勞する為やりませんでした。

ネタバレですが、八神家はSTS編において起動六課所属じゃありません。

部隊長は別の人間。

次回は特資八課のお話の予定。

ドゥーエの苗字どうしよう……。

スバルとティアナは魔改造するかしないか……。

エリオとキャラロはどうするか……。

そう言えばゼストもいたなあ……。

問題山積みな作者です。

感想に対して返信しない駄目作者ですが、シツカリと目は通しています。

お返事してない事に対して、此処に謝罪と感謝を申し上げます。

それでは皆さんまた次のお話で。

第十二話「序曲」(前書き)

お待たせしましたSTS編。

ただし序章！

フラグ色々。無理無茶無謀も色々。

きつとツッコミも多数有るでしょう。

でも細かい事は気にしない！

それじゃあ、今回もごゆっくり。

第十二話「序曲」

第十二話「序曲」

ミッドチルダ、首都クラナガン。時空管理局地上本部第八特殊資料課機動戦闘部隊。

特資八課発足から五年。

「気が付けばウチも大分人数増えたよなあ……」

部隊長席に座りながら、今度入隊試験を受ける局員の資料を見ながら、アラン・スミシーは呟く。

入隊試験の内容はこの五年のうちに大分ランクが落ちた。最初は『テロリスト三百人をリンカー術を使わず』に占拠されたビルを解放するというものだったのだが、そもそも今のミッドチルダでは、そんなことが起きる確率がかなり低い。

其処で現在は、『単騎で本局リンカー術師一個大隊（300〜400）を殲滅する』と言う、かなり緩い試験内容になっている。時折この試験内容はAT&DDで構成された部隊や、混成の部隊になることもある。

リンカー術の使用は勿論、質量兵器を使っても（非致死性弾頭）ATやDDTを使ってもいい。というルールに変更されている。

この試験に合格できると言う事は、管理局地上部隊にとっては一種のステータスとなっていた。

試験の相手はそれほど難易度が高くはないが、試験中の行動で大きく減点され、時には試験中に強制的に不合格になる場合がある。

特に大きな減点が『周辺の施設や建造物への破壊』である。管理局員たるもの、住民の安全の為に周囲への被害は最小限で戦わねばならない。この事は試験相手の部隊にも評価が行くので向こうも真面目になる。

この五年間での試験を合格した人間の数は、たったの十五人。しかし試験に合格した者は、地上部隊または首都航空防衛隊で見事な活躍を見せている。ちなみに海のリンカー術師は合格者ゼロ。

合格した何人かは特資八課に勤務している。そして合格者以外の特資八課のメンバーは、アランが管理外でスカウトしてきた者達だ。そして今回入隊試験を受けるのは……。

「生憎と、少々リンカー術が使える程度で合格できるほど、ウチの試験は簡単じゃないぞ」

受験者の名前は、高町なのはとフェイト・ハラオウンと言った。

試験結果は二人とも文句無しの不合格。

高町なのはは廃棄された住宅地での試験だったが、砲撃リンカー術で家屋を破壊しすぎた為、開始三分後で強制不合格。

フェイト・ハラオウンは発電施設跡地での試験。射撃リンカー術が発電装置を破壊した為、開始五分で強制的に不合格。

大抵この試験は、廃棄された施設などで行なわれるが、実践を想定している為、被害があまりにも酷すぎる為に二人は不合格となった。

非殺傷設定だろうが何だろうが、現場で同じ事をする可能性がある。そんな人間を合格させる訳にはいかない。

試験の結果に彼女たち二人と、後ろ盾のハラオウン親子やレティ・ロウランは文句を言ってきたが、『試験の時点で周囲に被害を出すやり方の人間に、合格など出せるはずが無い』そういつてアランは切り捨てた。

「生憎俺たちは戦争をしているんじゃないんだ。被害を振り撒くような戦い方しか出来ない輩に、『守る』などと言わせるほど、ウチの部隊は甘くない。試験結果に文句があるなら実力と判断力と思考能力を持ってこい」

教導官の資格も取れないなのはに、アランの言葉はとても重く押し掛かった。

フェイトは執務官として無能と言われたと感じたのか、その場でデバイスを起動しようとするも、一瞬でアランに取り押さえられた。

自分は『魔法』が使えるからそれが出来るはずなのに……。

力に溺れたなのは、自分の力と夢を否定されたようで酷く落ち込み、フェイトはハラオウン親子の期待に応えられなかった事に嘆き悲しんだ。

しかし、現実はとても酷く残酷だった。

「ちなみにもう一度試験を受けたいなら、少なくとも戦闘技能をSランク以上だと戦技教導隊から認められた上で、戦闘ランクをSランクにして、三提督の推薦状を持参してくるのだな」

ちなみに戦闘技能と戦闘ランクは、リンカー術師ランクとは全くの別物であり、二人の戦闘技能と戦闘ランクはCがやっとだった。

技量が足りない。思い（理想）だけでも力（エネルギー量）だけでも、夢が叶うほど目の前の現実には甘くは無かった。

それから少し時間が流れ、新暦71年。

ミッドチルダ第八空港において火災が発生した。

しかし、近隣の地上部隊はここ数日の犯罪事件に人数を割かれて、現場に駆け付けられたのは五十人にも満たない人数だった。

偶然近くに居たという本局のリンカー術師も災害救助活動に参加するが、救助も消火作業も中々進まなかった。

燃え盛る空港施設内で、一人の少女がさまよっていた。

「お父さぁん！ お姉ちゃぁん！」

泣きながら自分の家族を探すために、少女はその足を動かす。

「ひっぐ……ひっぐ。……痛いよう……熱いよう……ひっぐ」

見渡す限り、辺りは炎一面。それでも少女は家族に会いたい一心で、施設内をさまよう。

体が危険を避けてか、その足は施設内のエントランスホールへと足を向けさせた。

幸いなことに開けた空間のおかげか、エントランスの中央は火の手が回っていないかった。

少女の足は自然とエントランス中央へと向かう。その中心に大きな石像を立たせた。

「……………ひっぐ……………おねえちゃん……………ひっぐ……………おとうさぁん……………」

ただひたすら怖かった。父も姉も居ない空間で、自分ただ一人。周囲は火の手で囲まれている。

ズズウウウウウウン！！

施設内のガスにでも引火したのか、大きな爆発音と衝撃がエントランスを揺らした。

その振動に、少女は思わず膝を付く。

ピシリ。

その時であった。少女のすぐ側の石像の下部に、亀裂が走ったのは……………！！

膝を付いた所為で、四つん這いになった少女は、その事に気が付けない。

一度均衡が崩れた石像は、その崩壊から逃れる術はなく、瞬く間に亀裂を広げていく。あとにあるのは倒壊のみ。そして、その倒壊する方向には……………少女が居た。

「……………え？」

気付いた時には、すでに少女に向かって倒れてきていた。

逃げなければならぬ事態にも関わらず、膝を付いた衝撃でほんの僅かではあるが、手足に痺れがあった。普段ならば問題ない程度だが、この状況下においては生死に関わる。

「イヤアアアアアアアアアアアツツツ!!!」

頭を抱えて少女はその場で、身を小さくする事しか出来なかった。

ドガアアツ!!!

すぐに聞こえた音に少女は身を振るわせた。

あれ？どうして音を聞く事が出来た？痛みがない？というかこんな事を考えてられる？

自分のみに起こった出来事に、少女は顔を上げた。

「よう、嬢ちゃん。怪我はねえか？」

すぐ目の前に、誰かが立っていた。

肩が剥き出しになったノースリーブの白いシャツに、黒いズボンを着た男だった。年の頃は二十代半ばといった所か、黒髪に黒目というミッド・チルダでは珍しい色の男だった。

少女はこの男が自分を助けくれたのだと分かった。ただ一つ疑問に思ったのは……。

「おじちゃん、どうしてサンダルなんて履いてるの？」

男の足元がビーチサンダルと呼ばれる物だった事くらいだろうか。

そんな事を思った次の瞬間だった。両頬に痛みが生じた。

「誰がおじちゃんだコラア。俺はまだ二十代だ。お兄さんと呼べオ・ニ・イ・サ・ンと」

「いふあいふあいう」

額に青筋を浮かべて少女のホッペタを引っ張っていた。

「ごぶんふあふあい、ふおふいふあん（ごめんなさい、お兄さん）」

「分かれば宜しい」

「あつう、いたい」

ようやく解放された頬つぺたを摩りながら、少女は涙目に頬を膨らませ男を睨む。

しかし、そんな少女を後目に男は左耳に手を当てる。

「此方ダブル・インパクト。要救助者を発見。これより施設内から脱出する。ナビゲートを頼む」

「どうやら耳に通信機をしているようだ。」

『此方マテリアル・マスター、了解』

「待って！」

しかし、少女はここで男に声を掛けた。

「まだお姉ちゃんがいるの！」

「お姉ちゃんが？ 譲ちゃん、名前は」

「スバル！ スバル・ナカジマ！ お姉ちゃんはギンガ・ナカジマ！」

「分かった」男は通信機に話し掛ける。「此方ダブル・インパクト。救助者の姉が施設内に残っているらしい。名前はギンガ・ナカジマ。情報を回せ」

『此方マテリアル。ギンガ・ナカジマはたった今ドラゴンズ・ピークが救助したところらしい。回線を回す』

『ザザ……』数瞬、回線接続にノイズが混じる『……ちらドラゴン。たった今ギンガ・ナカジマを救助したところだ』

「こちらダブル。妹と思われるスバル・ナカジマを救助した」

『ナイスタイミングだ。じゃあお互い、脱出するとしますか！』

「ああ了解だ」男はスバルの頭を撫でながら、「君のお姉さんは俺の仲間が助けた」

「ホントッ!?」

スバルは顔を喜ばせる。

「ああ、本当だ。後はお外に出るだけだ」男は一步スバルから離れて距離を取り「マテリアル、最短距離での施設からの脱出ルートをナビゲートしてくれ。無論、直線距離で」

『相変わらず無茶するな。今向いている方向から右に七十二、上に十三度が最短で尚且つ、施設の崩壊が少ないルートだ。他は柱が多くて時間が掛かる』

「了解した」男は向きを変えると「それじゃあ脱出といきますか！」

右手を握り締めると、右腕が一回り太くなる。

左手を前方に突き出し、右足を半歩後ろに。

壁まではざっと十メートル程。

「壁ブチ貫く、肉の拳ッ!!!」

轟!!!!!!

拳を突き出した瞬間、周囲の空気が破裂する音が響き渡ると同時に、拳の軌道の延長線上にあった壁が、全て無くなっていた。

男が開けた穴からは、夜景の星が瞬いているのが見て分かる。

拳の一突きをもって、男は空港施設の幾つも存在する壁全てをブ

手抜いたのであった。

スバルはただ目の前の出来事に茫然とするばかりであった。

リンカー術はおろか、デバイスをもつてすらいない彼の魅技に、スバルはその背中を確りと目に焼き付けるのであった。

「よし、譲ちゃん。後は外まで脱出するだけだ」

「うんっ！」

男が抱え揚げ、スバルはその首にしがみ付く。

「ねえねえ！今のどうやったの！」

いままで見たことのない現象に、スバルは興奮が収まらない。

ブチ開けた穴の縁を足場に、男はスバルを抱えたまま跳躍する。

「ただ、拳で殴って、拳の先の物もブチ殴って、ぶっ壊しただけさ。譲ちゃんも頑張ればいつか出来るようになるかもしれないぜ？」

「ホントツ！？」

「ああ、本当さ。ただし、その為には物凄く頑張って練習しなきゃな」

練習と言つ言葉に、スバルは若干嫌な顔をする。

そうしているうちに、最後の壁穴の縁に男は到着した。

穴を開けた時の衝撃によるものか、周囲には火の手がない。

「よし、外に出たぞ」

そう言って男が、壁穴の縁から飛び降りた瞬間だった。

「時空管理局です！ そのつぶえっ!?!」

「……あ!?!」

すぐ下の割れた窓から飛び出してきた、白いバリアジャケットの少女の顔面に、男は着地する。

「にゃあああああつ!?!」

そのまま少女は、奇声を上げながら地面に落ちていく。

下はアスファルトだが、少女はバリアジャケットを着ているから多分大丈夫だろう。そう男は判断すると、空中で体を捻り、壁に足をつけ、

「壁ジャンプってな」

そのまま大きく跳躍して、施設から離れる。

「お兄さん、さっきの人大丈夫?」

「ジャケットも着てたし多分大丈夫だろう」

「そっか。そう言えばお兄さん、なんて言っの？」

「ん？ 俺の名前か？ 俺は賢護^{けんご}。二ノ宮賢護だ」

こうして、肉の拳を持つ男『二ノ宮 賢護』と、後に『双拳のスバル』と呼ばれるようになる少女は邂逅した。

二ノ宮賢護。後に『ダブル・インパクト』の二つ名をもって、時空管理局に大きく名を轟かせる男である。

場所は変わって第六管理世界『アルザス』。

一人の少女が、その腕に小さな白い竜を抱えて、雪の中を歩いてきた。

白い民族衣装のローブに身を包み、深くかぶったフードからは、桃色の頭髪を覗かせる。

少女は生まれながらに力があつた。

その力は容易く他者を蹂躪し、破壊し、殺戮を振り撒く。

その力の所為で、少女は里を追い出された。父親も母親も生まれてすぐに他界し、少女は祖母に引き取られて育てられた。

そして、五つの誕生日の日。自らの守護竜として呼び出したものは、この世界において災厄となる力を持った存在だった。

その力に恐れをなした一族は、彼女を追放した。

祖母だけは、必死に止め様としてくれたが、なす術もなく取り押さえられ、少女は故郷を追放された。

「キユク〜」

「じゅめんね、フリード」

腕のなかの竜は、主である少女に声をかけるが、少女は謝るばかり。

少女は何も悪くない、だが周りが少女の力を良しとしなかった。

少女、キャロ・ル・ルシエは独り、雪の中をさ迷い歩く。

その腕に幼き竜を抱えて……。

「……おなかすいたなあ」

呟く声は雪の中に消えていく。竜もまた空腹であるが、己の主は
一昨日最後の食料を、態々自分に分け与えてくれている。齢数歳の
竜も、今の自分に出来る事が何も無いことに嘆く。

どうか自分の主を救って欲しい。そう願わずには、いられな
った。

「こんな寒空の下を、独りお散歩かな？」

不意にそんな声が掛かった。

声の方を向くと、一人の男性が立っていた。

白いロングコートに身を包み、その右手にケースを持って。

少女は、人に出会えた事への安心からか、その意識を薄れさせて
いく。二日間も何も口にしていない事も相まって、その体を地面に
傾ける。

「お、おい!?!」

キヤロが薄れゆく意識の中最後に見たのは、白と黒のオッドアイ
の男の瞳だった。

『古い結晶と無限の欲望が集い交わる地、死せる王の下、聖地よりかの翼が蘇る。』

偽りの魔法の世界に現れるは、十人の勇者と一人の魔法使い。

勇者は偽の魔法を打ち砕き、魔法使いは本当の魔法で人々に奇跡を見せる。

彼の勇者たちは英雄に非ず、正義に非ず、ただ己が道と信念を貫く者。

其処に法は非ず、善も無く、悪も無い。

彼等が前に立ち塞がりに愚かなる者には、世界と人の力もって討ち滅ぼされる。

世界を渡りし者達が踊り、なかつ天空の法の城はむなしく焼け落ち、

それを先駆けに数多の海を守る法の船も砕け落ちる。

偽りの正義と法は世界に否定され、人々が真の平和を願う時、秩序が生まれる』

同じくして新暦71年。聖王教会カリム・グラシアの予言の著書に現れたこの予言に、本局はミッド・チルダに本局所属の地上部隊設立を立案する。

予言に記されていた『天空の法の城』これはすなわち、時空管理局本部を示すものに間違いないと、関係者は断言した。

時空管理局本局が落ちる。

そのような事などあってはならないと、声高々に叫ぶ本局幹部や上層部は、ミッドチルダに対策部隊を設立に乗り出すのであった。

時同じくして、カリム・グラシアは、予言に記された十人の勇者と一人の魔法使いが、事件を解く鍵であると判断し、聖王教会騎士八神はやてに搜索を命じる。

半年から数年以内に起きるであろう未曾有の危機。しかし、聖王教会にとっては管理局の崩壊はそれほど危険視されていない。

聖王教会は元々、古代ベルカ時代のベルカ縁の物を管理する為に生まれた物である。

しかし今では、ベルカの聖王の威光を信仰するだけの、宗教組織になってしまってきている。

人々が平和に暮していくのに、宗教や信仰は文明を持つ以上、必要不可欠なものである。

『聖地より甦る翼』。これはおそらく古代ベルカ時代の文書に記されていた『ゆりかご』であろうと、聖王教会は予測した。しかし、今の時代となつてはそれは争いの種にしかならないのではないか？ そう不安に駆られたカリム・グラシアはこのミッドチルダに混乱を起こさないために、奔走するのであった。

そして気になったもう一つの言葉。『偽りの魔法の世界』。

場所はおそらくこのミッド・チルダ。

近年管理世界では、ミッド式及びベルカ式の魔法を『リンカー術』と称されてきている。

噂の出所は不明だが、管理局の魔法は魔法と呼ぶには余りにも醜い。そういつた声もあるほどである。

魔法とは神々と世界が起こす奇跡

そう言つた話を、管理外世界ではよく耳にする。特にミッド・チルダより科学文明の進んだ世界では、物理法則を越えられない技術は魔法ではない、と断言されている。

聞いた話では、とある星間航行技術が発達した管理外世界において、超空間跳躍航行（所謂ワープ）して超空間（ワープ空間）に入り込んだ船を、通常空間に引きずり出した。などという、管理局では理解不能な現象も幾つか確認している。

その世界の人間が言うには、基礎的概念である物理法則を書き換えるくらい出来たら、それはすでに魔法の領域であると言う。

時空管理局ですら成し遂げていない、星間航行はもとより、さらに高度な超空間跳躍航行技術を持つその世界ですら、魔法と言う物はそれほどまでに『本来ならありえない現象』なのである。

この噂に対して、本局の人間は大いに憤慨し、噂の出所を突き止めて正義と法の裁きを下す、などと豪語しているが、管理局の『魔法』が魔法でなくなってきたのは、時代の流れなのかもしれない。

世界と時代が、ソレを必要としなくなった時、ソレは世間から消え去っていく。

今や各管理世界の地上は、個人の素質に左右されるリンカー術ではなく、旧暦において管理世界で戦争に使われた、質量兵器に近いATと言う物に成り代わってきている。

本局の人間は『また戦争を起こす火種となるだけだ』と言っているが、『一度起こした悲劇だからこそ、同じ過ちは繰り返さないために、新たな体制と秩序を築かねばならない』と、地上本部やミッド政府は言う。

時空管理局本部本局、時空管理局地上本部、ベルカ聖王教会。

この三つの勢力が三つ巴の状態の中、物語はいよいよ始まりを迎えるのである。

時に新暦75年。

第1管理世界『ミッド・チルダ』。

かの地において、十人の勇者と一人の魔法使いが舞い踊る、舞台の幕が開かれるのである。

第十二話「序曲」(後書き)

次回からSTS編に入るので、主人公の立ち回りをどうしようか困ってます。

アラン・スミシー：特資八課部隊長

七篠権兵衛：魔不世^{ワン}

神無銀狼：????

一応六課サイド、スカサイド、第三勢力とプロットは立ててあるのですが、どこにしようか迷ってます。まあ、六課サイドは3%の確率なので、スカサイドか、第三勢力の予定。

意表についてスカと裏取引してる第三勢力もいいかなと……。

基本的に作者は遅筆で、展開をコロコロ変えたがる駄目作家。

ちなみに次回の更新は、これまで謎だったその他のオリキャラ達の紹介の予定。

とりあえず、マジック・マスター。ゼクナム。ステイ。二ノ宮賢護の四人の予定。多分追加で何人が紹介します。

追記。

アースラとかクラウドディアに対抗するために、オリ主勢も戦艦使おうと思うのですが、作者はGジエネシリーズの戦艦しかほとんど知りません。あとサルファ。戦艦の希望があつたら言つて下さい。マクロスはFも見てるのでOKです。個人的にはマザーバンガードが好きです。

なんでGジエネWARSにマザーバンガードが無いんだよ!!
思わず叫んだ作者は悪くない。

話は変わりますが、銀狼の嫁(人外っ娘)募集中。

久遠にコスモスにテロス。次はディズイーかミク&ルカか魍皇鬼か

ノノかアイルーかハ口か茶々丸か幻想郷かポケモンかモンハンか…
…。
…。
ご意見待ってます。

あ、アイルーはモンハンだった。

オリキャラ紹介その壱（前書き）

今回はオリキャラの紹介。

ちなみに銀狼の嫁に関しては、銀狼の紹介のほうに随時更新していく予定。

基本的にチートバグが多いが、面白ければそれでいいかな？と……。

オリキャラ紹介その壱

名前：ステイ||トラディエンスフィールド||ブレイブハート

身長：168

体重：243

年齢：20前後

頭髪：山吹色

瞳色：金色

性別：基本は男。

性格：ネタとロマンを求めるオタクなマニア。

職種：資産家。主にネットで稼いでいる。ハッキングは常套手段。

特徴。 ナノマシン高次元体。

ナノメートルサイズで出来た極小機械、ナノマシンで構成された肉体の持ち主。そのため正確には人工的高次元体と言うのが正しい。出生に関しては未明。体重が重いのはナノマシンが金属物質だから。

特技。 あらゆる物質を創造出来る程度の能力。

いわゆるチート能力の創造ではない。どちらかと言うと八ガレンの解析、分解、構築の能力に近い。

原子レベルから物質を構築する事が出来、設計図と材料があれば何でも作れる。

自分の体を変える事も出来る。ニードレスのドツペルゲンガーに似ているが、想像の類で作るのではなく、設計図などの化学式と数式によって制作する。

能力。電気運用行使技術。

別名電気人間とも呼ばれる、電気を操る能力。御坂や銀次など。

能力。演算型化学式超能力。

とある科学の超電磁砲の超能力は、全て演算能力によって発現している為、同等の事が出来る。

ただし、ステイは自分の美学の為電気以外は滅多に使わない。ちなみに複数発動可能。

能力。錬金術。

鋼の錬金術師の錬金術を、再現する事が出来る。

なお、創造の時は質量保存の法則ではなく、空間保存の法則によって作る為、空気中の微粒子から物質を生成出来る。

能力。変身。

ニードレスのドッペルゲンガーと同位種。MS（外装のみ）になったり仮面ライダー（外見だけ）になったり、変装もこの能力によって行なう。

この能力の為、ステイには本来性別はないが、戦闘における思考判断の為基本的に男。

戦闘力。

世界渡航者の中では身体的戦闘力が物理法則の範囲を出ないため、バスターマシン七号と同程度がやっとこ。

そのため格闘戦や近接戦闘においては世界渡航者の中では下位。基本戦闘は武器を創造しての射撃攻撃。

遠距離からの攻撃は殆どイナーシャルキャンセルで逸らすので基本後方からの支援攻撃。板野サーカス攻撃が大好きで、VF系かヘビーアームズ系によく変身する。

ただし、電子系においては最強。ホシノルリや草薙素子など電脳戦やプログラムにおいては最強と成りえる。

しかし、一部の世界渡航者はソレをアナログで上回る為、最近少々泣き気味。

銀狼の斜め四十五度チョップがいい例。

世界渡航者。二つ名

「電子の英雄」「マテリアル・マスター」「科学兵器の申し子」「
「ってかアイツ射撃攻撃全部逸らしやがるし！」」

イメージVC：山口 勝平

名前：ゼクナムⅡシュテインボルグⅡマクローイ

身長：192

体重：89

年齢：26（外見）

頭髪：茶色

瞳色：琥珀色

性別：男

性格：剛胆だが日常にユーモアを求める。

職種：イギリスの山奥で陶芸家暮らし。

出生：フェルグスⅡマクローイの養子の一人。

特徴。

魔剣シュテインボルグの担い手。アイルランド王国王室直屬部隊マクローイ教導傭兵団の団長をやっていた男。アイルランド王国亡き後はマクローイ傭兵団を率いてアイルランド各地を転々し、ブリテン王が立ったときにドーバーを渡り欧州を転々。イギリス産業革命以降はアイルランドの山奥で隠居生活。時折噂を聞いた剣士に剣

術を教授している。

宝具。魔剣シュテインボルグ。(オリジナル)

破壊不可と帰還機能、持ち主を不老不死にする効果を待った魔剣。フェルグスの死後カラドボルグを譲り受け、打ち直し改良と改造を加えた物。

クーフリーンの死後ゲイボルグを加える。

真名解放「山峰断ち切る硬き稻妻」十マイル離れた敵軍を撃つ、対軍対城宝具。ランクS

真名解放「絶ち切る死斬の剣」切った後に振るう因果逆転攻撃。

対人宝具。ランクB

真名解放「切り倒す至高の一撃」防具破壊の効果をもった、対人宝具。ランクA

宝具。魔剣の鞘ノーブル・フロンティア

破壊不可と帰還機能、持ち主を呪い、災厄、病魔から守る効果をもった鞘。

シュテインボルグの鞘で、戦闘時は左腕に盾として装備している。

幾つかのギミックが仕掛けてある。

真名解放「貴き理想郷」外傷以外を治せる治癒宝具。

樽では制作に銀狼が関与しているらしい。エクスカリバーの鞘「遥か貴き理想郷」の原型になったとも言われている……らしい。

特技。ルーン魔術。

義兄、クーフリーンから教わった物。専ら戦闘補助がメイン。

特殊技能。魔力回路。

大気中の魔力を取り込むことで、体内で増幅させる事が出来る回路。たとえ一ミリでも魔力を取り込めるとソレを増幅させる事が出来るので、一度起動したら魔力切れを起こす事はないが、最大出力

に難があり、体外放出系が滅法苦手。唯一の手段はガンドのみだが、そのガンドが対物ライフル並に威力がある。

戦闘力。

剣戟戦においては世界渡航者の中ではトップクラス。中遠距離の攻撃は全て剣で迎撃して、近接距離で敵を叩き切る戦法がメイン。補助武器として腰にナイフを二つ差している。

世界渡航者。二つ名。

「ソード・マスター」「サクセサー・オブ・ボルグボルグの後継」「防いだ筈なのに斬られてるんですけど」

イメージVC：森川 智之

名前：テリーⅡSⅡエターナル

身長：188

体重：85

年齢：25（魔法の制約で不老不死）

頭髪：青

瞳色：コバルトブルー

性格：沈着冷静

容姿：ガウリイ・ガブリエフ（スレイヤーズ）とマーク・ギルダ
Iを足して割った感じ。

職種：アースライフ王国近衛魔道騎士団、特殊任務単独遂行魔道
戦士。階級少将。

出身：管理局未確認世界『アストラル』。スレイヤーズに似ている。

特徴。

マジック・マスターの二つ名の通り、ありとあらゆる魔法、魔術、魔道に精通している。

文字通り『魔法』も使えるが制約があり、行使するには段階を踏まないといけない。それでも五分も有れば制約を解く事が出来る。

特技。

主に使用する魔法は、スレイヤーズ、ドラクエ、FF、オーフェン辺り。魔法を念じるだけで使用可能で、複数同時展開から、時間差、遠隔発動なども可能。

一部の魔法は呪文詠唱が必要だが、ドラグ・スレイブくらいなら無詠唱で発動可能。もっとも本人は様式美として技名は叫ぶ派。

服装。

ズボン、シャツ、ジャケット、ハーフグローブ、ブーツが基本。装備は手甲と脚甲、青いマント、背中にはバスター・ソード、後ろ腰にショート・ソード。右太腿にあらゆる格闘武器に変形する武器、ロード・オブ・アーム（通称ロア）のホルスター。

見た目はファンタジーではよくいる魔法剣士。本人曰く魔道戦士。

備考。

嫌いな魔法は『エターナル・フォース・ブリザード（永遠生命吹

雪？）』、『（笑

得意な魔法は『メドロア極大消滅呪文』、『サンダー系』、『ラグナ・ブレイド神滅斬』、『ブラスト爆裂

呪』

好敵手は銀狼。ネギまで言うラカンだから。

世界渡航者、二つ名。

『マジック・マスター』 『ミスター・ブルー』 『超魔法使い（笑）』
『青い奴（笑）』 『ムツツリ魔道士（笑）』 『指パッチンでアルテマ放
つ奴（笑）』

なお（笑）は全て銀狼とステイが付けたもの。

イメージVC：諏訪部 順一

名前：二ノ宮 賢護 （にのみや けんご）

身長：173

体重：67

年齢：27前後

頭髪：黒髪

瞳色：黒目

性格：軽口を叩くが、根は真面目。

職種：冒険家。主に神話や伝記の場所を訪れては、旅の記録を本
にして売っている。最近では西遊記がメイン。

特徴。

ダブル・インパクトの二つ名を持つ男。

その双拳から繰り出される拳は凄まじく、ダイヤモンドすらも三
回に一回は殴り砕く。単純な威力なら『ラカン・インパクト』を上
回るが銀狼の『天破世驚拳』には及ばない。

『天破世驚拳』。拳の延長線上の先にあるモノを全てを消滅させ
られる銀狼の奥義の一つ。叫び方は流派東方不敗のアレな感じで…
…。

特技。

殴る。何でも殴る。とにかく殴る。これでもかと殴る。どんな敵も拳一つで倒す。『天天』のダブルインパクトより腕が太い。

備考。

大学二年の時に、外国を旅しすぎて二度留年しており、ついたあだ名が『ダブリ・インパクト』。その後出版した旅行記がヒットして大学中退&冒険家デビュー。

口癖は『肉の拳が叩いて砕く!』

世界渡航者、二つ名

『ダブル・インパクト』 『ダブリ・インパクト（笑）』 『肉の拳の男』 『Gの装甲も殴って凹ませる凄いやつ』

『PS装甲も殴って凹ませる男』

イメージVC：堀内 賢雄

名前：ジャック・バレット・ランディバース

身長：182

体重：80

年齢：30代後半

頭髪：灰色

瞳色：碧眼

容姿：ビッグボスでスネークな人の眼帯無し。

性格：口数は少ないが、ダンディでハードボイルド

職種：ギャラクシーポリス（天地無用）の元捜査官。現在は辺境

惑星でガンスミス。

特徴。

むさ苦しい髭のオッサンだが、ダンディでハードボイルド。

『バレット・マスター』の二つ名を持つ男であらゆる銃器を使いこなし、手元に取り寄せる事ができる。

銃火器ならば弾切れさせずに使う事ができる。常時無限バンダナ。ただし、様式美的な感じでリロード好きで偶にピンチになつて困つた人。

特技。無限の弾丸。

ミドルネームの『バレット』が示すとおり、銃火器の弾数無制限の銃火器チート。弾の種類も変更可能でダムダム弾からフルメタルジャケットはもちろん、ゴム弾にホローポイント弾などに変更可能。弾丸変更の際はチェンバーを一回装填するだけで変更可能。ガンカタは勿論スタイリッシュな戦い方も出来るナイスガイなおッサンでもある。

備考。

くわえ煙草がトレードマークで一日二箱は吸うヘビースモーカー。ポケットには常に煙草とジッポ。好きな銘柄はハイライト。銀狼の『蔵』が羨ましく、どうにか煙草を無限煙草にするのが現在の目標。

世界渡航者、二つ名

『バレット・マスター』『無限の弾丸』『ちょ、いつになったら弾切れすんだ!？』『煙草とヒゲのむさいヤツ(笑)』『自称オジサン、他称オッサン』

イメージVC：大塚 明夫

なお。『魔人』の彼に関しては本編にもう一回出てからです。
分かりやすい想像は、狂戦士が「悪を断つ剣」な感じですが。
口癖は「我は　！　天と魔を絶つ、剣なり！」です。

オリキャラ紹介その壱（後書き）

亜「どうも亜嵐です」

銀「主人公の銀狼だ」

亜「今回はキャラクター紹介ということで、あとがき初の対談式」

銀「最初に言っておくが、ワールド・ウオーカー世界渡航者は基本的に不老不死、又は不老長寿なため、年齢に関しては見た目だと言っておく」

亜「それぞれのキャラクターの二つ名に関して実は、名前より先に頭に浮かんできたのが本音です」

銀「たしか、俺とテリー以外は、二つ名に名前とキャラを作ったんだっただな」

亜「うん、そう。特に賢護なんて、最初はまんまダブル・インパクトの人だったんだけど、作者個人的に容姿が好きじゃないからこれと言って決まってる」

銀「逆に言えば、ジャックは完全に蛇だな」

亜「勿論装備にはダンボール入ってます」

銀「ますます蛇じゃねえか」

亜「質量兵器つかう有名キャラっていったら、あとは地球防衛軍のストーム1くらいしか思い浮かばないし、ダンテはスタイリッシュだから銃オンリーは似合わないし、ガンダム系は端から除外。銃禁止社会の日本じゃそもそも、主人公が銃を使うアニメも多くない。つい先日のハイスクール・オブ・ザ・デッドはバイオハザードだし、クエイサーなみにエロいシーン多いし、スパロボ2も何気にエロいし……」

銀「分かった分かった。とにかく銃がメインの主人公が、スネーク以外重い浮かばなかったと」

亜「そう言うことだ。ちなみにそらおとfはギャグ過ぎてエロさが低い。」

ちなみに今後の展開では、銀狼と人外ツ娘のラヴラヴいちゃいち

やは、XXXシーンを音声無しで書く程度です」

銀「マテ。お前が台詞を入れない場合は、逆の意味でエロスだろうが」

亜「ちなみに愛の神にはエロスという神様がいるのは本当です」

銀「おい、話を聞け」

亜「ソレでは今回はこの辺で、さよなら、さよなら、さよなら」

銀「懐かしい終わり方してんじゃねえー!!」

第十三話「始まる物語」(前書き)

お待たせしました。

11月半ばに突如パソコンが故障したため、携帯の方から投稿します。

携帯からの投稿は初めての為、変な所があったらごめんなさい。おまけに短くならざるをえませんでした。

第十三話「始まる物語」

第十三話「始まる物語」

時は新暦75年、第一管理世界『ミッド・チルダ』。

首都クラナガン近郊の、とある沿岸部の一等地に新設された、管理局の施設。

地上部隊の新規訓練施設の設営予定地を、強引に買い取り作られた『時空管理局本局、古代遺物管理地上部隊、機動六課』の施設が、今ここに出来上がっていた。

それを見上げる二人の女がいた。

栗色の髪の子と、金髪の髪の子。

二人は口元を微笑ましそうに緩める。

「ついにできたね。フェイトちゃん」

「うん。そうだね、なのは」

時空管理局武装航空隊、高町なのはは三等空尉と、フェイト・ハラオウン二級執務官である。

「クロノ君が部隊長で、私とフェイトちゃんが分隊長。それに本局の優秀なスタッフさんたち。この精鋭部隊があれば、きっとミッド・

チルダの平和を守ってあげられるよ」

「私になのはにお兄ちゃん。母さんやレティ提督。それに本局の人間が協力して作ったこの部隊があれば、ミッド・チルダの平和も守ってあげれるね」

守ってあげる。そのあまりにも傲慢な考えは、他人の意見や意思をまったく無視したものである。

守ってあげるから守られていて、と安に彼女たちはそう言っているのである。

「この一年は実験部隊として、様子見になるけど、実用性を認められれば機動六課みたいな精鋭部隊が増えて、次元世界の平和も絶対守ってあげられるようになるよ」

「私となのはが頑張れば、出来ない事なんてないからね。絶対出来るよ」

「そうだねフェイトちゃん。あとははやてちゃん達を六課に編入させて、私とフェイトちゃんが将来有望な新人をスカウトすれば、機動六課もつと完璧になるね」

そういつて二人は建物を見上げる。

だが二人は気付いていない。その考えが他人の意見をまったく聞き入れずにしていることに……。

自分達の力（魔法）があれば出来ない事なんてない。そう妄信して疑わない彼女達は、すでにこのミッド・チルダにおいて、その存

在が絶対的に必要な物でないことに。

世間がそれを必要としなくなってきたに。

故に彼女達は絶望するだろう。世界が自分達の力を必要としない事に。だが幸せなことに彼女達は、現実から目を背けるだろう。

世界はこんなはずじゃなかったのに、と……。

場所は変わって、特資八課部隊長執務室。

「査察……ですか？」

副隊長のニキ・テイラー三等陸佐は眉を寄せる。

「レジアスからの依頼でな。本来なら地上の指揮系統に組み込まなければならぬ部隊のはずなのに、こつもあからさまに本局の所属と指揮系統を主張する、この地上部隊「機動六課」が怪しいって話だ。まあ、俺も『海』の連中が『陸』を我が物顔で出歩かれるのが気に入らないってのもあるが、部隊発足の行動原理も気に入らない」

そう言ってアランはニキに一枚の資料を見せる。

「拝見します。『事件に対して迅速な部隊の展開と運用。それと今までの地上の部隊運用では対処しきれなかった事件に対しての、早期解決と抑止力の向上における治安維持力の強化』ってふざけているのですかこの部隊は!？」

思わず資料を持つ手に力が籠められる。

「全くもって読んだとおりだ。それでいて対処するのは『レリック』と言つ高純度エネルギー蓄積体だけの物を、ロストロギアとして確保すること、ときたまんだらレジアスは激怒してる。しかも部隊発足後に通達しての事後承諾ときた」

今現在の地上の治安は、アランがATを提案する前の十倍近い検挙率があり、犯罪発生率に関しても三割近くまで減つて来ている。

にも拘わらず、『海』は地上には戦力が有り過ぎると豪語して、人員を奪つていこうとしている。

しかし、地上部隊で運用されている人員の数は、ここ十年でようやく二割ほど増やすことができた程度である。

その影にはAT運用における、リンカーコア非所持者たちの活躍に他ならない。

今までの戦力がリンカー術士だけであり、魔力ランクが高い者ほどその数は少なく、地上部隊の平均ランクはD+からB-の間である。それに対し海はB〜A、さらにAAAランク以上は殆どが海の所属とさせられている。

保有魔力制限という制度が導入されているが、『陸』ではその制限に引つかかるほど高ランクのリンカー術士を確保できていないのが現状である。

故に保有魔力制限に制限されず、尚且つ使い手を選ばないATは

地上部隊において大変重宝されているのである。

それこそ初期の頃は、格納庫が必要になるほど場所を必要としたが、今現在はデバイスの空間収納能力とナノトランサーによって、腕時計サイズにまで待機時の容量を減らし、特撮ヒーローの変身のごとく展開装着ができるようになっているのである。

一部の管理局入局者はこの『変身』に憧れて入局してきているのは、有名な話。

戦技教導隊の一部にいたっては、技名を叫ぶ者までいるほどである。

ヒーロー（英雄に非ず）とはいつの時代も男達にとっては憧れなのかもしれない。

閑話休題。

「ついでに言えば、部隊設立の切欠は聖王教会カリム・グラシア少将の数年前の『予言』に対しての対策部隊らしい」

「数年前の……と言いますと、本局の崩壊と『十人の勇者と魔法使い』の？」

「そうだ。一部で『オーシャンズ・イレブン』と言われている、『十人の勇者と一人の魔法使い』が本局をブツ潰して、ミッド・チルダに平和をもたらすと言われている、あ・の・『予言』対策のためらしい。

よっぽど本局の連中は、管理世界すべてが自分達の管理下（支配下）から外れる事が、お気にめさないらしい」

「部隊長にクロノ・ハラオウン。二つの分隊長に高町なのはとフェイト・ハラオウン。おまけにバック・ヤードのスタッフは全て海所属のものばかり……。完璧に身内で固めてますね」

「互いの信頼性と連携のしやすさの為、らしいがどう見ても公私混同だ。後見人にいたってはリンディ・ハラオウンやレティ・ロウラン。その他海の重鎮や幹部上層部クラスの人間ばかり。それでいて経費は地上のサイフから出るんだぞ？ レティ・ロウランが人事部の所為で、陸の若手達が大分脅されたらしくてな」

あまりの『海』の阿呆ぶりにニキも呆れてモノが言えなかった。

「まあ、もつともその金は最終的に海から出るように、会計のほうに訂正を入れておいたから、機動六課の奴等の給料は向こう三年は五割減だろうがなあ」

ニヤリと口元を歪ませたアランは「クラウドディアも高値で買い取ってくれた富豪がいたしな」と、とんでもない事を暴露したが、売却済み差し押さえのシールを前にOTZしている、クロノ・ハラオウンの映像が頭に浮かんで来た。

まあ、自業自得だと納得したニキが、憐れみ半分でご愁傷様とだけ心の中で呟いた。

「とりあえずジョージ・マウンテン特級執務官か査察がてら、『陸』との連携と摩擦軽減の為に機動六課に出向させる予定だ」

ちなみにジョージ・マウンテンは気付いた者もいるかもしれないが、銀狼の分身体である。

「それとジョージの補佐役として、アシェン・ブレイデル三等陸尉とカルディア・バシリツサ三等陸尉の二名を同行させる」

アランの指示に従い、通達関係を済ませる為に、部隊長室から出て行った。

そして、物語の幕は開かれる。

彼の者たちは舞台にて舞い踊り、観客を魅了する。

時に新暦75年春。

ワールド・ウォーカー事件と呼ばれ、後に時空管理局大革命抗争と呼ばれるようになる事件が起こるのであった。

己が信念を貫く者。

平和を願う者。

強者求める者。

欲望に従う者。

自分が正しいと信じて疑わない者。

正義を掲げる盲信者。

そして、ただ渡り歩く者……

第十三話「始まる物語」(後書き)

ちなみにアランは銀狼の分身体なので特資八課から動かず、ジョー
ジは元々特資八課所属である為、六課がジョージの事を調べても最
低限の情報しか分からない、と言う設定。

パソコン復帰したので密かに加筆修正。 4 / 19

第十四話「やってきた勇者達？」（前書き）

とりあえずお久しぶりです。作者です。

PCが壊れてから約四ヶ月ぶりの執筆で、ここまで延びてしまいました。

遅れてしまって申し訳ございません。

今回一気に新キャラを六人（？）追加。

こんなに増やし大丈夫なのか作者？

出番はちゃんとあるのか？

そもそもちゃんと彼らを描けるのか？

それは作者の腕次第。（マテ

では十四話、どうぞ。

第十四話「やってきた勇者達？」

第十四話「やって来た勇者達？」

場所は変わって、ミッド・チルダ南東部のとある草原。

首都クラナガンから千キロ程離れたこの地に、六人の男がいた。

「ここがミッドって場所か？ 何もねえ原っぱじゃねえか」

真紅の頭髮に真紅の瞳。黒い長ランに身を包み、背中に『喰』と金色の刺繍を施している男が、口を開く。

年は二十歳前と言ったところだが、目つきの悪さがヤクザな不良を彷彿させる。

口にくわえたチュッパチャプスが、なんともギャップ的である。

禍耶麻狂平^{かやま きょうへい}。

奥州退魔士連盟、裏頭領軍団筆頭、の肩書きを持つ日本最強の退魔士ある。

「正確には、ミッド・チルダ首都クラナガンから千キロ離れた場所

だ。

それより、全員いるか？」

狂平に答えながら周囲を見回すのは、灰色の頭髪と左右の瞳が白と黒のオッドアイの男。

白峰しづみね 龍吉りゅうきち。

通称ICPOまたはインターポール、の名で呼ばれる国際刑事警察機構の刑事にして、連邦政府捜査官の役職に付く、凄腕刑事である。

年の頃は三十台、額右上部と左頬の傷に目がいく。

灰色のスーツにロングコートを身にまとい、右手にはアタッシュケースを持っている。

「拙者も竜之介も焰騎も賢護も皆おるぞ」

龍吉に声を掛けてきたのは、侍を髣髴させる着流しを身に纏った男。

鈴木すずき 鬪吉丸とうきちまる 崩敵ほうてき。

戦国武将、武田信玄の武将にして、負け戦の長篠の戦いで、敗走する武田軍の殿を務め甲斐の国まで守った勇将にして、大阪城の戦いにおいて真田幸村と共に徳川軍に大打撃を与え、その後行方をくらましたと言われている鬪将である。

その両腰には一振り十貫目（約37.5キログラム）の鋼鉄の双

鞭、魔撲毆鬼まぼくおつきを携えている。

さらにその左手には長さ一間半（約2.73メートル）、重さ百斤（約60キログラム）の朱槍、華山かざんを手に歩み寄って来る。

その後ろには三人の男。

「ミッド・チルダ。神話のユグドラシルの『人間が住むことが出来る場所』って意味だった気がするな」

革ジャンにジーンズ、足元はやっぱりビーチサンダルの二ノ宮賢護。

世界を旅した冒険記を書きながら、神話や御伽噺を紐解く探検家であり冒険家である。

「どうだっていいわ。あゝ、ヤニがうめえ」

指先に灯された火からタバコに火を点ける、白髪に灼眼の男、魔ま討と焰えん騎き。

東京奥多摩に居を構える、関東随一と噂される炎術士である。

高位の熟練された炎術士は、その炎に独自の色を持ち、色持ちの炎は神炎と呼ばれる。

そして焰騎の炎の色は『白』。当人の名前と絡めて、『白焰』の神炎使いと呼ばれることもある。

なお、一日一箱は吸うヘビースモーカーでもある。

「ずいぶんと魔力が濃いですね、それと同時にリンカーエネルギー汚染も激しい」

袴に道着服を着込んだ、黒髪黒目の男、かんざき神崎 じゅうのすけ竜之介。

東京の御茶ノ水で探偵事務所を開く、探偵である。尊敬する探偵は三毛猫ホームズ。

「とりあえずこの場所から、早めに移動を開始する。ロストロギアエネルギー反応にうるさい、管理局の海の連中が出張ってこないうちにな」

龍吉はポケットから取り出した、二つのカプセルの上部を押すと前方に投げる。

小さな爆発音がした後は、そこに二台の反重力クラフトカーが出現していた。

「俺の方に狂平、崩巖。賢護の方に焰騎と竜之介。クラナガンまで四時間程度だ。あまり飛ばしすぎるなよ」

「誰に物言ってるんだい。ダブル・インパクトの賢護さんの「肉の拳は意味無いからな」……くうう！」

龍吉の先を読んだ突っ込みに、思わずグーを握り悔しがる。

三人ずつ乗り込んだ反重力カーは、騒音を立てることなく、クラナガンへと向けて走って（飛行）行った。

時空管理局の人間がその場にやってきたのは、それから数時間後のことである。

「ここが、正体不明のエネルギー反応があった場所……」

黒いバリア・ジャケットにマント、右手には斧のような先端をしたデバイスの持ち主、フェイト・ハラオウンである。

地上の監察部隊が感知した、正体不明のエネルギー反応。感知した時間は一瞬であったが、報告はあったものの報告を受けた上司は、下手な反応がないなら放置とした。

しかし、何故か偶然その報告を知ったクロノが、フェイトに『正体不明ということはロストロギアに違いない。だから現場に行つて回収してきて欲しい』、と調査命令を出したのである。

正体不明のエネルギーならロストロギアに違いない。

そんな方程式が頭の中で自己完結しているハラオウン兄妹は、意気揚々とロストロギアの回収（強奪・略奪）に乗り出したのである。

「きつとロストロギアを誰かが使ったに違いない。早く回収して確保しないと」

ちなみに地上部隊の意見は、『下手に刺激して自体を大きくするより、まずは静観して様子を見る』、と言つものである。

この意見に対して本局は『迅速に解決する為にすぐ調査すべきだ』と意見を押し通す。

一概にどちらが正しいとは言えないのだが、常に人手と人材が不足している地上は、基本的に後手に回らざるをえない状況なのである。

海も人手不足をよく挙げるが、これは管理しようとする世界を増やすぎ、手の届かない所まで手を伸ばしたのが原因であり、自分の首を自分で絞めていることに、いまだ気付いていない。

とにかく手柄と威厳を手に入れ、力を誇示したい本局の人間は、平気で他の世界に侵略を繰り返す。

自分達がやっていることは正義だから、と相手を悪と罵り武力を行使するのである。

話が少々逸れたので、閑話休題。

フェイトは現場にやって来たはいいものの、辺り一帯はうっそうと生い茂る森林地帯。しかも正確な場所までは特定できていなかった為、自分がいる場所から半径五キロ圏内の何処かが、反応のあった場所なのである。

「地上部隊もちゃんと、場所を特定しておいてくれればいいのに」
責任を他者に擦り付け、フェイトは辺りを搜索する。

【サー。右方向にてエネルギー反応感知。熱量の類です】

「熱量？　と言つことは質量兵器の類。すぐに所持者を逮捕しないと」

バルディッシュの報告に、すぐさま転進すると、反応あつた場所へ向かう。

己の主観で物事を決め付け、価値観を押し付ける事しか、彼女には出来ない。あとは友達なのはの言葉。

【燃烧反応の類なので、おそらく焚き火の可能性が高いと思われませんが？】

「だとしても、こんな所にいるのはおかし過ぎる。事情聴衆をしな」と

本来なら彼女に執務官の資格を持てるほどの能力はない。だが、ハラオウン親子が強引な方法で、彼女に執務官の資格を与えた事を、当の本人は気付いていないのである。

管理局勤務歴十年になるとは言え、所詮二十歳にも満たない小娘である。

その事に気付けるほど、フェイトは人間が出来ていなかった。

燃烧反応地点。

「ふんふふ、ふんふふ、……………」

一人の男が焚き火をしながら肉を焼いている。

淡い銀髪を腰まで伸ばし、首の所で一つに束ね、縁無し of 眼鏡に銀色の瞳。ジャケットにジーンズという在り来たりな服装。在り来たりでないのは、腰に三本の刀を差している所くらいだろうか。

一本は鞘の長さから、刃渡り一メートルはあるであろう長刀を腰の左に差し、残りの二本は刀身およそ五十センチほどの太刀を、腰の後ろで交差するように差している。

「……………！ 今だっ！」

その眼光を鋭くし、焼いていた肉を火から上げる。

『上手に焼けました〜！』

そんな声が聞こえてくるほど、その肉は見事な焼き上がりをしている。

こんがり焼かれた肉の表面は、肉の旨味を逃がさない様に、程よくパリッと焼けており、肉の内側はミディアムレアの焼き加減で、一齧りすればきつと肉汁が滴り落ちてくるだろう。肉好きならばおそらく誰もが飛び付きたくなる程の、見事な焼き上がりをしている。

無論肉の形状は、マンガ肉、であるの言うまでも無い。

「ではさっそく、いただきます〜す！」

いざ、肉に齧り付こうとしたその時であった、

「時空管理局です！ そのあなた、そこで何をしている！」

上空からやって来たフェイト・ハラオウンが、背後から男に声を掛けたのである。その距離はおよそ十メートルほど。

「ががつがつ。くはくつ、うめえ〜！」

しかし男はそんな声を全く耳に入れずに、肉に齧り付く。

「聞いているのですかっ!？」（こうなったら仕方がない） 公務
執行妨害であなたを逮捕します」

全く何も考えずに、自分の思い通りに行かなかったから、とりあえず男を逮捕することにしたようである。本当にこの女は執務官なのだろうか？

「バインド！ ……バインドが発動しない!？」

しかし、いざ拘束しようと拘束リンカー術を発動させるも、男にバインドがかかる様子はない。

「バルディッシュ」

【検索……。どうやら男の周囲にMRFが展開されているようです。それもSランクオーバーの」

「SランクオーバーのMRF!？」

バインドが発動しなかった事をバルディッシュに探らせ、すぐさまバルディッシュは状況を報告した。そして、知らされた情報にフエイトは驚愕する。

MRF＝マナ・リゾルブ・フィールド。

そう呼ばれる、リンカー術士にとって天敵の魔力消滅領域が、先程のバインド不発動の正体だった。

対違法犯罪リンカー術士対策として、地上部隊が運用するATに標準搭載されている、マナ・リゾルブ・システムMRSによって発生させられる領域のことである。

元々はAMFと呼ばれる魔力術式結合飽和術式があった。しかしAMFは多重外殻弾や、実体系のアームド・デバイスなどには効果が薄い。そこでデバイスや、バリアジャケットも無力化する為に開発されたのがMRFである。

MRFはAMFとは違い、魔力結合ではなく、魔力構成物質そのものに働きかける、特殊な電磁波の一種である。

拡散性が高く、持続性が無い為、効果範囲や発動時間は短い為、ATに積まれているチタンリウム・リアクターバッテリーは、最大で三十時間の連続稼動が可能である。

しかし、ATに積み込まれているMRSですら、Aランク程のMRFを作り出すのがやっとである。

余談だが、MRSは複数同時稼動によって、ランクを上げること

が可能なのである。しかも家庭用電力で稼働させても、ゲーム機（PS2）と変わらない消費電力だからとてもエコロジー。

だが男の周囲に展開されているMRFはSランクオーバー。

起動六課設立の際、魔力保有制限の為に、リミッターが掛かっているフェイトの魔力ランクは現在Aランク。

リミッターの解除には部隊長権限クラスの許可が必要である。しかし、敵を前にしてそんな時間を待っていられるほど、フェイトは気が長くない。おまけに頭も回らない。

下手に近づけばバリアジャケットも分解され、素っ裸を晒す事になりかねない。

どうしようかと悩んでいた時であった。

【<接近してくる生体反応感知。数一>】

バルディッシュのセンサーが、近づいてくる物体を感知した。

「<敵の増援！？　バルディッシュ敵の魔力は！>」

【<魔力反応無し。動体反応から小動物と推測されます>】

慌ててフェイトは警戒するも、バルディッシュの答えにそれを解く。

たかが小動物なら、魔導師である自分の脅威にはならない。ましてや魔力も無い存在なら。

そして、近くの茂みから、ソレが現れた。

「がおくん！」

そんな声と共に現れたのは、一匹の白い小さな生き物。

「お、戻ったかてんおうき天皇姫」

その生き物に男が反応した。

ウサギのように長い耳と発達した後ろ足。猫を思わせる相貌を持ち、額には紅く光る宝玉が存在する。

そして、ピジョン・ブラッドのように真っ赤な瞳。顔をよく見なければ、ウサギと認識するだろう。

その正体を、フェイトは知る由も無いだろう。

「がお、がおがお、がおおん！」

身振り手振りをしながら男に、話し掛ける(?)姿は、小動物好きにとっては堪らないほどに、愛くるしく映るだろう。

「そうか。見回りありがとうな。もうすぐ日が暮れるから、今日は此処でキャンプを張るぞ」

「がお」

どうやら男と小動物は、ここで一夜を過ごすようである。

太陽も沈みかかってきており、空が赤くなりだしている。

「がお？　がおがっおっ！」

小動物の視線とフェイトの視線が重なり、男に声を掛けたのは。

「どうした天皇姫、空に何かいるのか？」

男が後ろを振り向くと、フェイトを発見し、

「……なんだ痴女か」

そう呟くと、男はまたフェイトに背中を向けると、調理器具を懐から取り出す。

「ち……、今の言葉取り消しなさいっ！！」

言われた言葉の意味を知り、デバイスを構え、周囲にフォトン・ランサーを展開する。

「天皇姫、あの痴女が何て言ってるか分かるか？　俺ミッド語分かんねえんだよ」

「がお？　がおおん」

片手を口元にやり小首を傾げたあと、フルフルと首を左右に振る。

「そっか、お前もか」

「<どづいづこと、バルディッシュユ?>」

しかし、男と天皇姫の反応にフェイトは困惑する。

【<サー、彼らには翻訳魔法が働いていません。おそらくMRFの影響だと思われます。幸い彼らの会話は日本語、サーなら問題ないでしょう?>】

「<え、ええとね、バルディッシュユ……、言いにくいんだけど>」

【<どうしました?>】

「<私日本にいたときも、翻訳魔法使って生活してたから、日本語話せないんだ>」

【<………。仕方ありません彼らとの会話は、私がやってみましょう。私は英語が話せますので、もしかしたら通じるかもしれない>（もしかしたら『地球』出身かもしれない）】

フェイトの衝撃の告白の事実には、バルディッシュユはつけないため息をついた。

【<その貴方、少々よろしいでしょうか?>（英語です）

「何の用だい? デバイスのニイちゃん」（こっちも英語）

バルディッシュユの英語での問いかけに、男は流暢な英語で答える。

【（やはり英語、しかも私を一瞬で見抜いた）】

たいてい管理外世界の人間が、インテリジェンス・デバイスを見れば、無機物が言葉を話すことに驚くが、この男は一瞥しただけで、声の正体を見抜いた。

【貴方はこのような所で、いったい何をしているのですか？】

「この近くに遺跡があるのさ。それを調べて、誰にも悪用されないようにする事さ」

男の話す言葉は、翻訳魔法で理解出来るが、フェイトの言葉は男のMRFによつて、翻訳魔法が意味をなさず、言葉が通じていない。そんな事など今までありえなかった。

今まで使ってきた魔法が、この場において全く役に立たないことに、フェイトは静かに奥歯を噛み締める。

絶対的である魔法が、無用の物とされている事が、フェイトにはこの上なく屈辱を感じたのであった。

【……。……サー！】

「　　っ！？　なに、バルディッシュ？」

デバイスからの呼び声に、フェイトは思考から呼び戻される。

【彼の話聞いたところ、数時間前に正体不明の六人組が近くに出現、その後反重力クラフトカーに乗って、クラナガンの方角へ向かって行つたらしいです】

「正体不明の六人組？」

おそらくその六人組がエネルギー反応の原因だろう。

実際に男が見たわけではなく、天皇姫が偶然見かけたものを、男が聞いたに過ぎない。

しかし、その後に出てきた反重力クラフトカーと言うのが、フェイトには分からなかった。

「バルディツシュ、反重力なに？」

【反重力クラフトカーです。彼に聞いた所、管理局よりかなり先を行く技術のようです】

「何言ってるのバルディツシュ。管理局の技術力は次元世界一なんだよ？ 管理局より技術力のある世界なんて存在しないよ」

【……………サー、本気で言っているのですか？】

「当たり前だよ。その反重力カーって言うのも、おそらくロストロギアだよ」

あまりの答えに、バルディツシュは思考フリーズさせかける。

「で、俺への用件はもう済んだな？ 俺は行かせてもらっぞ」

しかし、男の声がバルディツシュを現実に戻めた。

いつの間にか片づけを終え、頭に天皇姫を乗せ、背を向け歩き去

ってゆく男がいた。

「待ちなさい！ 貴方には重要参考人として、こちらの指示に従っていただきます」

バルディッシュに翻訳させながら、フェイトは男にデバイスを向ける。

「却下だ小娘。俺がお前に従わなければならない道理はおるか、義務も無い」

しかし、男は振り返る事無く、フェイトの言葉を切り捨てる。

「あります。私は時空管理局の執務官です」

「じゃあ、俺は次元管理局の提督だ。将官クラスになって出直して来い」

男の言葉にフェイトは激昂し、フォトンランサーを放とうと、足元に魔方陣を出現させた瞬間。

フッ。

男は音も無くそこから消えた。

「え？ ば、バルディッシュ！？」

【周囲に反応無し。魔法ではない空間転移の類かと】

男が一瞬で消えたことに、思わず呆然となり、あわててバルディ

ッシュに周囲を感知させるも、反応が無いことを教えられる。

「そんな……魔法も使わないで空間転移なんて、出来るはずがないのに」

目の前で起こった出来事に、思わず現実から目を逸らして、彼女は呆然と呟いた。

おまけ。

八神はやての異世界勇者探索記。

とある世界のとある港町。そこはタコが名産品として有名な町である。

そんな町でとある事件が起こった。

突如住人達がタコの言葉しか話せなくなってしまうという事件である。

だが、数刻をもって事件は、とある四人組の手によって解決し、事なきを得るのであった。

しかし、この時この世界のこの町を訪れていた、とある聖王協会所属の騎士の少女に、不幸が舞い降りる。

『ちゅう、ちゅう、タコかいな。む、むねなし（なんてこった）
~~~~~!!』

「ダレが貧乳つるペタちっパイ胸無しや~~~~っ!!!」

行く先々で発せられる住人達の言葉に、思わず反応したのは言うまでもないだろう。

そして連れれの者達に抑えられている内に、事件は解決したのでした。

おわり。

第十四話「やってきた勇者達？」（後書き）

ちなみに天皇姫は天地無用の、魍皇鬼。GXPの福ちゃんを白くした感じです。

ハイそこ、まんま眷皇鬼だとか言わないでください。

泣き声は「たいがーころしあむ」の「せいばーらいおん」の声を参考にしてください。

分からない方はセイバーの中の人だと思ってください。

ちなみに天皇姫は人型になれます。

生まれの経緯は魍皇鬼が生み出される時に、某力ニマッドが銀狼の遺伝子と掛け合わせて作った（無論内緒で）。

ところで、けっけろ〜。

第十五話「朝の缶コーヒーは、ジョージア・エメラルドマウンテン」(前書き)

サブタイトルに大して意味はありません。

またしても新キャラ登場。

どんなヤツかはたぶん読めば分かっちゃう。

誤字脱字があつたら報告お願いします。

## 第十五話「朝の缶コーヒーは、ジョージア・エメラルドマウンテン」

第十五話「朝の缶コーヒーは、ジョージア・エメラルドマウンテン」

第一管理世界『ミッド・チルダ』。

時に新暦75年。某月某日。

時空管理局本局所属、古代遺失物管理課機動六課、の部隊始動も目前に迫ったその日、機動六課に一人の男がやってきた。

時空管理局地上本部、第八特殊資料課機動戦闘部隊所属、ジョージ・マウンテン特級執務官。

機動六課にとっては、確実に目上のたんごぶになるであろう存在だ。

しかも、彼は査察官と監査官の資格も持ち、教導資格から艦隊指揮資格まで持ち、さらに一等陸佐相当の権限と発言力を持つ。

経歴は、十年前に再編された、地上本部第八特殊資料課に翌年入隊している。それまでの経緯は一切不明。生年月日も入局した年も年齢すら不明だ。

しかし、その功績は見事で、ここ五年の間に百を超える事件を解決している。その内の二十件にいたっては、単独でAランク以上の



リンカー術士を捕縛している。

だが、厄介なのはコレに留まらず、最初の三年は不祥事を起こした本局の局員を、百人以上逮捕しており、尚且つ管理外世界でロストロギアを回収してきた海の局員を、強盗又は窃盗の現行犯で逮捕していることである。

回収したロストロギアは、騒動の合間に元の世界に戻されており、再度回収（強奪）に向かった海の局員が、『何故か』その場所に行く事が出来なくなる、という不可思議な現象のせいで、回収出来なくなるのである。

そして何よりクロノ達が厄介だと判断したのが、彼のリンカー術士適性だった。

ジョージ・マウンテン。リンカーコアランクなし。

彼はリンカーコアを持たない、非魔導師なのである。

リンカーコア所持が絶対の、本局の魔法主義の者達にとって、彼の功績は在ってはならないのである。

彼の功績は、フェイトは勿論クロノよりも優秀だと言うことを、証明していた。

これが気に入らなかった。絶対的である魔法を使える自分達より、リンカーコアすら持たない存在が自分達より上の能力を持つ。これがクロノ達に屈辱的な侮辱と認識されたのであった。

そして、その彼が今日、機動六課にやってくる。

表向きの理由は『査察』。もう一つは機動六課が地上で活動する為の、他の地上部隊との軋轢摩擦を緩衝する、橋渡しの役割の為だ。

機動六課がミッドチルダ地上で活動するあたって、問題点が浮上した。

活動範囲と行動理由の弱さ、である。

活動範囲については言うまでもないだろう。ポツとでの新設部隊が活動する為に必要なほどの未管轄区域が、今のミッドチルダには存在しないからだ。

行動理由にしてもそうだ。『レリック』及びロストロギアだけなら、最初から本局に部隊を作ればいいのである。

おかげで機動六課は、活動直前になって開店休業の看板を背負う事になってしまったのである。

しかし、そこで悪知恵が働くのが人間。

地上部隊の中には、何らかの理由で『海』の前線から遠退き、一時的に地上部隊に移動させる為の、療養とリハビリ調整の為の部隊が幾つか存在する。

リンディヤレティはこれらの部隊を抱き込み、地上での活動範囲を手に入れたのだ。

しかし、そうは問屋がおりさないのが地上本部。先の理由を盾に

査察官を送り込んだのである。

クロノ・ハラオウンは機動六課の部隊長室で、本日やってくる査察官の資料を見ていた。

「それが今日、来るって言う査察官？」

「そうだよ、なのは」

部隊長室には、顔馴染みの高町なのはとフェイト・ハラオウンの姿もある。それぞれスターズ分隊、ライトニング分隊の分隊長である。（指揮能力も無いのに）

「しかし、何だって査察官がこの機動六課に来る必要性があるんだ？ それも地上本部の」

「全くだね。これ程素晴らしく完璧な部隊は無いと言つのに」

さらに二人の男の姿。どちらも二十歳程の男である。

三千院 京四郎（さんぜんいん きょうしろう）。金髪に赤と青のオッドアイの持ち主のイケメンで、見るヤツが見れば『クラウド・ストライフ』と指を指すだろう。

ギルガメッシュ・スプリングフィールド。黒髪に赤と金のオッドアイの持ち主のイケメンで、こちらも見るヤツが見れば『キラ・ヤマト（殺羅・トマト）』と指を指すだろう。

この二人は先月管理局に入局ばかりの、Sランクの魔力を持つ期待の新人である。

三千院はスターズの副隊長、スプリングフィールドはライトニングの副隊長として、機動六課に配属された。

二人は、これからやってくると言う査察官に、不満の表情を隠す事無く、文句を垂れ流している。

そして、なのはもフェイトも二人の言葉に賛同するように、頻りに何度も同意し頷いている。

「それも、六課に常駐してだなんて……。自分達の職務怠慢を棚に上げて、私達に文句を言いたいみたいだね」

「海の犯罪者の危険性は常々言っているのに、地上本部は自分達の足元を固めることしか頭に無いみたいだね」

もしこの場に地上部隊の人間がいたら、彼女達の言葉に激怒していただろう。

地上の仕事が時間が掛かるのは、それに割けるだけの人手がないと言っていることだ。

「はっ！ よっぼど俺らが優秀なのが気に入らねえんだらうよ！」

「きつとそうだよ。今も次元世界は違法魔導師や、ロストロギアの危機に晒されているのに、どうして手を取り合って次元世界の平和に協力しようとしなんだらう」

だがしかし、現実を受け入れることが出来ない者は目を逸らし、都合の良い事にしか目を傾けない。

守れもしないのに守ると言って、管理世界にして支配下に置かれた世界は、手段たる質量兵器を奪われ、世界遺産たる物を奪われ、そして守るべき子供までも戦力として連れて行かれる。

その世界が平和を維持する力を奪って、『世界が平和になった』などとぬかしているのである。

「君達、不満なのは僕も同じだが、これからやってくる査察官にそのような態度でいると、有る事無い事追窮されかねない。なるべく表情が顔に出ないように頼むよ」

クロノに咎められた四人は、不満たらたらながらも了承した。

だから彼等は現実から目を逸らし、自分の妄想に浸るのである。

自分達は絶対的な魔法を持って、平和の為に頑張っているから、世界は平和なのだ。

思い描いただけの言葉が現実になると、信じて疑わないのであった。

そして、約束の時間がやってきた。

『地上本部からの査察だ』

部隊長室のドア越しに、ノックと供に一声。

「(こつもあからさまとはな) 入りたまえ」

入ってきたのは三人の男女。

一人は執務官の制服に身を包んだ、三十代ほどの口髭を生やした銀髪の男。後の二人は二十代と思われる美女であった。スタイルの良さならフェイトも上回る程だ。

「ジョージ・マウンテン特級執務官、ならびに補佐官二名、コレより機動六課査察の為に着任します」

あまりにも堂々とした物言いに、副隊長の男二人は露骨に顔を歪ませた。その行動をジョージの左右にいた二人の補佐官は見逃さなかった。

しかし、彼女達は表情を変える事無く、一瞥しただけでジョージの後ろへと下がった。

「着任を確認した」

「着任早々で悪いのだが、クロノ・ハラウン部隊長。其処にいる男二人は誰だ？ 事前に配布された資料には載っていないが？」

ジョージは、京四郎とギルガメッシュの二人に鋭く視線をやる。

「彼等はいつ先月、機動六課に配属が決まった者達だ。急な配属で不備があった事は謝ろう」

「そうか、まあいい。私が六課に出向してきた理由は、其方も理解

しているだろう。此方も機動六課設立の理由は知っている。だがあえて、一言言わせてもらおう」

「……なんだ」

ジョージの鋭い視線を正面から受け止めながら、クロノは平常を保たせる。

「（つく、何だこの威圧感は！　これが特級執務官だと言うのか！  
？）」

なのはとフェイトの二人も、ジョージの威圧に呑まれている。

『（フェイトよりデカイ胸だと！？　リア充野郎め死ね！）』

副隊長の男二人は、別の所に圧倒されているようである。ただし、その二人の女性から冷徹の眼差しが向けられていた事には、気付く様子も無かった。

「足元を見ないから、掬われるのだ」

「……如何言う意味だ？」

「それは何れ理解するだろう。教えられる様では執務官資格の経歴に傷が付くぞ」

その言葉を最後に、ジョージは補佐官二人と部隊長室を出て行った。

「思ってた以上に、無能揃いのような」

六課の通路を歩きながら、ジョージは先程の部隊長室の人間の顔を思い出す。

Sランクのクロノ。Sオーバーのなのはとフェイト。そして……

「（あれが噂の、バナナの皮で滑って転んで頭打って死亡して、バ神共によって生き返ったと言う転生者とかいうやつらか）」

「あの男二人、魔力は高いようですが、制御能力などはDランクにも劣る程に低いようです。リンカーコアから無駄に魔力が漏れていました」

「肉体も簡易スキャンしたのですが、筋肉の付き方がド素人オタクのニート級でありやんした。おそらく何の訓練も受けたことがないと断定しちゃいます」

カルディアとアシエンからの報告を聞きつつ、ジョージは機動六課の前線部隊の人間を思い出す。

スターズ分隊、分隊長：高町なのは三等空尉。リンカー術士ランクSオーバーだが、実際は魔力頼みの砲撃バカ。魔力の多さを活かしたシューターで、相手の動きを牽制しバインド、そして至近距離で砲撃。近距離戦や格闘戦の才能は皆無に近いらしく、移動も飛行魔法任せ。戦闘ランクはD。

副隊長：三千院京四郎准空尉。リンカー術士ランクS、近代ベル



力式のリンカー術士。魔力変換資質『火』を持ち、デバイスの大剣に纏わせた一撃はそこそこらしい。魔力ランクはSだが戦闘ランクはCマイナス。コールサイン：スターズ2。

スターズ3：ティアナ・ランスター二等陸曹。ミッド式リンカー術士Cランク、珍しいリンカー幻影術という技能の持ち主。

訓練校を飛び級で卒業した秀才で元救助活動部隊所属、リンカー術士Cランク試験を受け、合格発表のときに高町と三千院に声を掛けられ、異動。動悸はキャリアと給料。

あらゆる射撃武器を使えるエキスパートでありながら、爆発物、生体工学、人体工学にも精通しており特に捜査能力は執務官級と言われている。

訓練校に入る前は代97管理外世界『地球』から数光年離れた惑星にいたらしいが、管理局は星間航行技術を持たないので、未確認。

スターズ4：スバル・ナカジマ二等陸曹。近代ベルカ式リンカー術士Cランク。シューティングアーツを使い、移動の時にはブーツに仕込んだローラーを使う。遠距離攻撃能力を持たないが、回避能力と拳での迎撃能力の高さはかなりのものらしい。

ティアナ・ランスターと同期の訓練校卒業生。こちらも元救助活動部隊所属で、部隊ではコンビを組んでおり、ランク試験をティアナと受けた時にスカウトされた。動悸は『会いたい人に会える気がする』らしい。

ライトニング分隊、分隊長：フェイト・ハラOWN二等執務官（三等空尉待遇）。ミッド式リンカー術士ランクS、魔力変換資質『電気』の持ち主で二級執務官。高速移動戦闘型でオールレンジに対応できるタイプ。

移動速度はそれなりに速いが、攻撃速度は普通。戦闘ランクD。

副隊長：ギルガメツシュ・スプリングフィールド准空尉。コールサインはライトニング2。ミッド式のリンカー術士Sランク。レアスキル『ゲート・オブ・バビロン』の持ち主。AAAランククラスの威力のあるロストロギアっぽいものを幾つも持っている。

戦闘タイプは遠距離型、得意リンカー術は『千の雷』。  
魔力ランクはSオーバーだが、戦闘ランクはCマイナス。

ライトニング3：エリオ・モンディアル三等陸士。近代ベルカ式リンカー術士Bランク。魔力変換資質『電気』の持ち主で、フェイト・ハラオウンによって違法研究所に囚われていた所を助けられ、彼女の力になるために入局。

ライトニング4：アーサー・ド・トリステイン一等空士。ミッド式リンカー術士Aランク。AAランクの魔力の持ち主だが制御が甘い。アームド・デバイス『エクスカリバー』と杖型ストレージ・デバイス『ストライクフリーダム』の二つを使う。

以上の八人が、機動六課前線部隊の戦力である。

あとの戦力は部隊長のクロノ・ハラオウンと、魔力持ちのロングアーチが何人か位である。

本来はここにAT部隊が、三個小隊から一個中隊ほど加わるのだが、海の人間はAT嫌いである有名な為組み込まれる事は無い。

「（この八人のうちサイン3と4の四人が、フォワードと呼ばれる最前線で戦うメンバー。しかも四人全員が18歳以下のティーンエイジときた）」

しかも隊長、副隊長の四人は小隊指揮能力すら持たず、まともな

小隊指揮経験すらない者達である。高町なのはは武装隊で中隊長をしているが、突撃脳筋思考のため指揮が出来ていない。フェイト・ハラオウンも部下を持ってはいるが、基本的に単騎特攻型である。後の二人はそもそも一月前に入局したばかりの素人だ。

「（そしてライトニング4のトリステイン。コイツは完璧に力に溺れているガキだ。資料を見たが、味方ごと砲撃に巻き込んで犯人を人質ごと撃つタイプだ。非殺傷設定に溺れた典型だな）」

アーサー・ド・トリステイン。半年ほど前にミッド・チルダの森で発見し保護された、次元漂流者でそのまま管理局に入局した人間だ。その時保護したのはフェイト・ハラオウン。

「（これは探りを入れたほうが良いな）カルディア。「はい」六課ロングアーチ構成員の経歴と背後を調べる。此方に対する切り札用にムシヨ出のブタ（奉仕中の元犯罪魔導師）がいる筈だ。「了解しました」

アシエン。「お呼びで」この建物を徹底的に調べる。案内板や設計図に載っていない、本局御用達が何所かにあると思う、地下は特に奴らの十八番だからな。「あらほらさっさ」

俺はこのままロングアーチのところに顔を出す。新調したデバイスも調整したいからな」

十字通路のところで、カルディアとアシエンは己が任務に向かった。

ジョージもまた、左手首の腕時を何やら操作しながら、ロングアーチの詰め所とデバイスルームへ向かう。

「さて、と。十人の勇者の出迎えと、歓迎の準備もしとかないとな

「アランに連絡入れておくか」

ジョージの声を聞くものは誰もいない。

窓の外から、一匹の鳥が見ていた以外は……。

おまけ。

八神はやての異世界勇者探索記。

「エルフは脱があああああすっ！！」

『きゃあああああああつっ!!!!??』

男の咆哮と共に、耳が長い女性達の悲鳴が巻き起こる！

「耳が長いヤツもついでに脱がああすっ！」

『うぎゃあああああああああつっ!!!!??』

今度はさらに、耳が長い男達の悲鳴も上がる。

彼方此方から悲鳴と歓声上がる中、八神はやては遠巻きに眺めながら頭を抱えていた。

「な、なんであんなが、この世界を救った勇者やねん。どう見ても婦女子暴行猥褻物陳列罪の犯罪者やんけ」

はやての後ろでは、その男にノックダウンされたザフィーラと、止めようとして逆に返り討ちにされ脱がされ、今は布を体に巻きつけて地面に座り込んでいる、シグナムとシヤマルの姿があった。

グイータとツヴァイは、男の仲間の女性達によって、裸になるのは避けられた。

「と言うが、どうやってバリア・ジャケットを脱がしたんやあの男は……」

視線の先にいるのは、空手格闘家の男。

ジュンペイ・リュウゾウジ。

カレーをこよなく愛する世界一のバカである。

第十五話「朝の缶コーヒーは、ジョージア・エメラルドマウンテン」(後書き)

と言うわけで新キャラ三人登場。

ヴィータ、シグナム、キャラの代わりです。

軽くキャラ紹介します。

三千院京四郎。

名前は『ハヤテのごとく』と『侍ディーパー(だったっけ?)KY O』から適当に取りました。名前の文字数多い中二的な感じで付けた。

デバイスは大剣型のアームド、名前は『フェンリル』。容姿つながりです。

性格はコードギアスの玉城のようなアホキャラ。

ギルガメッシュ・スプリングフィールド。

言わなくても分かるよね、これは。

デバイスは見た目エアのアームド、名前も『エアヌ・マリッシュ』

性格はワカメ&ギーッシュといえば分かるだろう。たぶん。

アーサー・ド・トリステイン。

コイツだけ容姿描写が無かったけど、見た目薬味小僧。

デバイスは本文の『エクスカリバー』と『ストフリ』。インテリでないのは作者がこれ以上キャラを考えるゲフンゲフンではなく、アーサーの性格が「デバイスが僕に意見するな!」という性格だからという理由。前の二人も一緒。

性格は完全自己中の、アンチされる為のネギ、の中二どころか小ニ病の性格。

名前と容姿が一致してないのは、転生者の当人達が『その方がカッコいい』と思ったからという理由。

三人の設定が適当なのは、夜食のカップ麺作りながら考えたから。

そして彼らの役目はモチロン、引き立て役、だからです。たぶん六課襲撃の時には死ぬと思う。

早ければ……アグスタか海鳴出張の時かな？

でも作者の私はそんな彼らも愛しちゃう！？

それではまた次回。

ちなみにティアナとスバルは戦闘ランクはBとAあるので、例の模擬戦ではたぶん楽勝。でも、オハナシしたいなのは文句言って、ジョージに究極亡霊蹴打を喰らうという。そんな予定を立てている。

ちなみにキャラは現在……。

やべ、考えてない。

どうしたらいいだろう？アンケートしちゃだめかな？



番外編「もし無印の時に邂逅していたら」(前書き)

今回の話は、没にしたモノのお蔵だしみみたいなものです。設定とかなり適当ですので、ツッコミはお手柔らかに。ただし最初に言っておく、「リニスとアルフが俺の嫁」

番外編「もし無印の時に邂逅していたら」

番外編「もし無印の時に邂逅していたら」

海鳴市、八束神社に突如として現れた、謎の生物。

それはジュエルシードの暴走体だった。

子犬を取り込み、凶暴巨大化したそれは、近くにいた人間に襲い掛かろうとしていた。

「<待て>」

しかし、そこに掛かった一つの声。

突然、体の動きが止まった事に、困惑する暴走体。

声の主は近くの物陰から現れた。

「よーし、いい子だ。<おすわり>」

その腕には子狐を抱き、腰まである銀髪を首の所で一つに束ねた男。

さらに男の声に、暴走体の意思に関わらず、その体は腰を下ろす。

「今のうちに隠れてくれ」

襲われた神社の巫女に、非難を促すと、暴走体の正面に回り対峙した。

「随分とおかしな物が混ざってるみたいだな。〈伏せ〉」

男の言葉に抗えず、言われるがままの暴走体。しかし、その瞳は男に明らかな敵意がこもっている。

「今、抜おう。破邪顕正、神魔滅昇」

男が暴走体の額に触れると、その肉体は緑色の粒子となって消えていった。後に残ったのは小さな子犬が一匹のみ。

「きゅん」

子犬を、子狐が抱かれない反対の手で抱き上げと、子犬はじやれて、男の頭の上に乗る。

「く!? く〜!」

それに対抗意識を燃やしてか、子狐も男の頭によじ登る。

「おわっ、こら、お前らっ!?!」

そんな二匹を落とさないように、手で支える男の顔には笑顔がこぼれている。

しかし、そんなひと時を邪魔する存在が、いつの世も現れる。

「あなたが持つているジュエルシードを、渡してくださいっ！」

上空からそんな声が聞こえて、思わず上を見た一人と二匹の目には、白い服を着て肩にフェレットを乗せた少女が、浮かんでいた。

世界渡航者・神無銀狼と魔法少女は出会った。

「いくぜっ、ジュエルシード！ 俺のこの手が真っ赤に燃える！

浄化の炎が轟き叫ぶ！ 爆熱っ！ ゴッド・フィンガアアアアアアアアアアアッ！！！」

銀狼の掌に現れた真紅の炎が、暴走体のジュエルシードを掴む！

「神魔っ！」

掴んだジュエルシードと一緒に、暴走体諸共、片手で頭上に持ち上げると、指の間から真っ赤な光があふれ出す！

「滅掌ウキウキおおおおおっ！」

辺りを炎の赤さに染める光と供に、真紅色の炎が暴走体を呑み込むんだ！

「これが……霞月流退魔術だ」

跡には何も、残っていないかった。ジュエルシードさえも。暴走体の元になったハエも。

「そんな、ジュエルシードが……」

「魔法文明も無い筈なのに、どうして……」

回収しなかったジュエルシードが、回収出来なかった事にただ呆然とするのはと、魔法文明が無い筈の世界で、魔法を上回り圧倒する神秘に、ユーノは驚愕する。

そしてやはりと言うべきか、彼女は銀狼に噛み付く。

「どうしてジュエルシードを破壊したんですかっ！」

「あんな危険物をこの地に放置しとく方が問題だろう。それにガキが管理できる様な代物じゃない。だからとつと破壊したんだよ、そんなことも分からないのか？」

「わたしには魔法があるから、大丈夫なんです！」

「その魔法とやらがあるなら、そもそもこんな事態にはならなかった筈だろう？ 本当にソイツは『魔法』なのかい？」

地球の魔法を知り、神秘を操り、時に魔法すら凌駕する男は、彼

女達の『魔法』を否定する。

「お前さん達のソレを、魔法と呼ぶには余りにも稚拙すぎる。大人げないかもしれんが、ソイツはリンカー術と呼んだほうが、俺は正しいと思うな」

そして、時空を管理したい局は、管理外であるにもかかわらず介入してくる。

「時空管理局だ！ここでの戦闘は「世界管理法第九条！」な、なんだっ！？」

フェイトとなのはの二人がぶつかり合おうとしたとき、割って入ってきたKY。

「決闘横槍禁止法違反により、貴様を排除する！」

しかし、そうは餅屋が、もとい問屋がおろさないのが銀狼。

一瞬でKYの懐に入ると、その股間を膝で蹴り上げる！！



フェイトの言葉に、そう言うなら、とアルフは納得してフェイトと転移していった。

「じゃ、俺も帰るから、あと頑張れよ」

手を振って『しゅくち』でそこから転移して行った銀狼。あとにはなのはとユーノが残された。

『ちよつとよろしいかしら、お二人さん』

そんな二人の前に、通信モニターが開かれるのであった。

「つまり簡単に言えば、アリシア・テストロッサを生き返らせる事は出来ないが、甦らせる事は出来るというわけだ」

時の庭園にて、アリシアの入ったポットを前に、銀狼はプレシアにそう言った。

「やっぱり貴方の世界の言葉は難しいわね、つまりぶっちゃけるとっ」



「アリシアの遺体を贄にして、魂を呼び戻し、そこに新たに肉体を構成して与える、と言う訳だ。

ぶっちゃけると、この肉体は死んでからの時間がたち過ぎていて、魂を呼んでも肉体に定着しない可能性の方が高い。

ならばいつそのこと新たに肉体を与えた方が、甦る可能性は高いと言う訳だ」

銀狼の言葉に、プレシアは沈痛な顔をする。娘と再び会えるとは言え、娘の肉体を利用するのが耐えられないのかもしれない。

「それに、仮にこの肉体で蘇らせても、今度は肉体と魂の間で何らかしらの異常をきたし、最悪数時間で肉体が崩壊する可能性の方が高い」

「……分かったわ。貴方が其処まで言うのなら、私は貴方の言う可能性に掛けるわ。

元から可能性なんて無いに等しかったし、貴方に言われてアルハザードと言う所が、どういう所だったのかも知ってしまったしね」

アルハザード。それは御伽噺の中にあつた、全ての奇跡と英知が集つたと言われた場所。だが実際は違つていた。

「元々アソコはただの邪教集団で、その謳い文句を掲げていただけの、リンカー族絶対至上主義の集まりに過ぎんよ。

終いには世界征服すら企んでたから、世界渡航者で潰したんだ」

「そうだったわね。でも貴方のおかげで私は、アリシアに怒られなくてすむわ」

「そうだな。以前のお前さんを見たら、『私の妹のフェイトに、酷い事したお母さんなんて、大嫌い！』って言われるのが、目に見えるからな」

「だ、だからそれは……」

銀狼のからかいに、顔を赤くするプレシア。

「さて、それじゃあ管理局が来ないうちに、とっとと終わらせるとしますか。ああ、プレシア」

「なに？」

「お礼がしたいなら、報酬はリニスとの主従丼、『三発』で手をつってやるよ」

「っ！……／＼。か、考えておくわ／＼／＼／＼」

銀狼の要求した報酬に、赤い顔を耳まで染めるプレシアがいた。

プレシアの病気は銀狼の治療薬で完治しているのである。

## 番外編「もし無印の時に邂逅していたら」（後書き）

もともと、リリカル世界で書くウォーカーズは、無印から介入する予定だったので、作者はロリコンではない（ここ重要）のと、原作アニメを見たことが無いのが原因でもあります。

近くのレンタル屋も常に誰かに借りられてるし。

それに私はロリコンじゃないし……（大事な事なので二度ry

当初の予定では、テストロッサ家ハッピーエンド（プレシア、リニス、アロシア生存）で、その後の闇の書編では、闇の書の闇フルボッコシーン（八神家居候が転生者）で介入して、闇の書の闇を回収。アインは結局空へ。

その後のSTS編で、スカリエツティ側として参戦。

テンプレ転生して、六課入りした転生者をフルボッコ。

レジアスとドゥーエは生存フラグ。

フォワード以外の六課陣と転生者は、ゆりかごを棺桶代わり爆殺。

転生者がゆりかごに行くから、フォワードは地上待機。

本局の戦艦もついでに爆殺。

そしてテストロッサ家とスカリエツティ家は管理外世界で……。

そんな予定を立てていた。

ちなみに無印をやめた一番の理由は、『登場キャラに子供が多すぎるから』である。はつきり言って作者の腕では描ききれない。では今回はこのへんで。

本編はもう少し待ってください。

第十六話「六課機動開始」(前書き)

話の内容はほとんど進んでません。

原作隔離は本編に入ってからが一苦労だと思っ作者です。

誤字脱字があつたら教えてください。

後書きで軽くアンケートします。

## 第十六話「六課機動開始」

### 第十六話「六課機動開始」

ジョージが六課での査察任務に付いてから数日、機動六課は無事始動することが出来た。

クロノ・ハラオウンの長ったるい『管理局本局魔導師絶対至上主義』の挨拶を、欠伸をかみ殺しながら左から右へと聞き流していた。

ジョージの後ろには補佐官のカルディアとアシエンの姿もある。

ただ二人の肌艶が妙に艶やかなのが、少ない男性局員の目を引いている。

そんな視線に混じって、二つほど違う種類の視線をジョージに向けているものがいた。

一人はフェイト・ハラオウン二級執務官。彼女の視線は嫉妬の類のモノである。

例に盛れず彼女もまた、本局魔導師絶対至上主義の考えの持ち主である。そんな彼女が、リンカーコアが無いのに、特級執務官の肩書きを持つジョージに良い感情を持たないのは、当然と言えば当然だった。

実力を見るために模擬戦に誘うも、のらりくらりとかわされて、『そんな事をしている暇があるなら、書類の一つでも片付ける』と、注意を受けたくらいである。

トレーニングを覗き見て実力を測ろうとしたが、やっていることは筋トレやランニングなどの、基礎的なことばかりで、実力を見ることは叶わなかった。

それに何より、彼女はトレーニングにおいて、ジョージの身体能力の高さを理解できなかった。

数十キロの重さのトレーニングウェアを、ジョージは着込んでいたのだが、フェイトがそんな事を知るよしも無い。

何百回にも及ぶ反復練習は、常人ですら数十回もやれば筋力の限界に達するものだ。それほどまでにジョージの身体能力は高かったのだ。

そしてそれを理解できぬまま、彼女は悶々とした数日を過ごした。

もう一つの視線。それはスターズ分隊フォワードの者からだ。

ティアナ・ランスター二等陸曹。

彼女の現在の目標は、執務官資格を取ること。

エリート志向の強い本局は、執務官資格を花形の一つと捉えている者が多い。

その執務官の中において、准将クラスの権限と発言力を持つ特級

執務官。一級執務官ですら一尉相当の待遇なのに、特級に到っては将官クラスである。

今は亡き兄の侮辱を晴らす為、執務官資格習得を目指す彼女にとって、ジョージは憧れの存在なのである。フェイトも執務官であるが、彼女は空戦リンカー術士。陸戦型であるティアナにとっては、ジョージの方が理想に近かった。

それに何より、万年二級執務官のフェイトが、ティアナには有能に見えなかったのである。

六課に移るさい、ティアナは構成員の資料を読んだ。

フェイト・ハラオウンは武力によって戦闘行為で逮捕するしか出来ない、魔力量の多さにモノをいわせた、ゴリ押し型の人間だった。魔力量が一般局員より少し多いだけのティアナに、フェイトの戦いは真似したくないモノ。

それに対してジョージは巧みな話術や、トリックなどの技術を用いての技能型。

それに何より、室内戦や市街戦での戦闘において、ジョージの戦い方は奇襲を用いた一発捕縛型。フェイトのようにオーバーキルによる被害拡大型とは、対極的な戦法である。

そんなジョージ・マウンテンが、今自分の目の前に居ることに、ティアナは喜びを感じていた。

「以上で僕の話は終わりにする。では解散して各自の仕事に移ってくれ」

どつやら壇上の挨拶が終わったようである。

本来ならここでジョージの挨拶があってもいいのだが、

「(どうせ、海の連中は地上(陸)の事を、軽視してるんだ。言ってもまともに聞かんだろうな)」

というジョージの考えと、陸の人間の言うことに、耳を貸す気のない海の人間は、ジョージの挨拶を考えもしなかったのである。

それはそれで、後々の面倒は当人達が被るか、と思いつたジョージは達観していた。

各局員が部署に戻るなか、ロビーに集まった前線メンバーとジョージ一行。

ジョージ達はこれから各部署の素行査察。

前線メンバーはトレーニングの……ハズであった。

「さてと、それじゃあさっそく前線のメンバーは、私の教導訓練に移るよ」

さて、高町(バカマチ)。貴様、教導官資格は持っていないだろうが。

思わずジョージとその他四名一(カルディア、アシエン、スバル、ティアナ)は、心の中でツッコミを入れた。その思いにきつと、間違いはないだろう。



「へっへっへ。良かったな新人共、なのは直々の教導を受けられる  
なんざ、本局でも中々無い事なんだぜえ。光栄に思いな」

『（そりゃあ、持っていない（教導官資格）ヤツから、教導を受ける  
事なんてないだろうがっ！！）』

京四郎の言葉に、五人の心は一つになった。

「全く持ってその通りだよ。彼女の「教導官資格も無い者が、よく  
言う」！？ 何だと!？」

ギルガメツシユの言葉を遮るように、決して大きくない声で、そ  
れでいてロビーの端まで響く声が、鋭く突き刺さる。

「どう言う事かな、ジョージさん？」

「高町なのは。お前は何時、教導官資格を取得した？」

半眼で睨み付けるながら、なのははジョージに体を向ける。

スバルとティアナ以外の五人も、ジョージを睨み付けるように構  
える。

「私が質問してるんだよ？ ジョージさんはそれに答えてよ」

「（やれやれ、人の話を聞こうとしない所は相変わらずか）教導官  
資格の無いお前が、どうやって教導訓練をするかと、俺は言ってい  
る。」

よもや、クロノ・ハラオウンがいいと言ったから、などと言うガ

キのたわ言は、言わないよなあ、三等空尉？

仮にも仕官である、本局の人間が」

「……………くうっ！」

ジョージの言っている事が、的を得ているだけに、思わずなのは唸る。

「てめえっ！ そりゃあ、どう言う意味だっ！」「どう言う意味だよっ！」

しかし、それを理解出来ない京四郎とアーサーは、食って掛かる。

「どうやら、部下の教育が出来ていないらしいな、高町、ハラオウン」

「何だとして、京四郎君。ちょっと黙ってて」ナンダよ、なのは！」

「それはいつたい、アーサーも、少し静かにしてて」でもフェイトさん！」

ジョージの言葉に食い下がろうとした二人だが、上司に止められて、その口を閉ざす。

「君が教導官資格を取りたいのも、教導官を目指しているのも知っているが、持ってもいないのに教導をしようなどと言う事は、一種の詐欺行為だと言うのは、君も知らぬなどは言っまい？」

局長なら、その行動は勿論、言動にすら、時には責任を問われるのだぞ？」

「……はい。失言でした」

「まあ、今のは私の言い方にも少々棘があった。それについては謝る。」

だが、佐官以上の者が居る場所においては、ほんの小さな一言ですら、罪に問われる場合もある。

以後気を付けてくれれば、それでいい」

ジョージの今の立場は査察官。たとえ憎まれ役になろうと、指摘するのが彼の仕事である。

少し意気消沈しながらも聞き入れているのはに、若干驚きながらもジョージは彼女を促した。

「さて、いきなり出鼻を挫いてしまったが、切り替えはしてもらおう。」

高町三等空尉。訓練に行きたまえ」

何処か納得していない表情を浮かべたままの五人を促して、なのは前線メンバーを訓練場に連れて行った。

ただし若干一名、尊敬の眼差しで見つめていた者がいたが、誰がとは言わなくとも分かるう……。

前線メンバーが訓練に向かい、人気の無くなったロビーで、ジョージは懐から取り出したタバコを、口に啣えた。

ジッポの蓋だけ開け、火を点けずにそのまま視線を斜め上へとずらす。

「はあ〜。先が思いやられるなあ〜」

ドピンク砲撃筋の高町。アホ（フル）の子フェイト。転生者<sup>バカ</sup>三人トリオ。十歳の子供。

スバル・ナカジマは、コンビのティアナの影響なのか、思考判断は実戦型である。まあ、少々脳筋思考ではあるが、考え無しではないようである。

ティアナに到っては、とても十代とは思えない落ち着きをしていた。おそらく前線メンバーの中で、最も精神年齢が高いのは彼女だろう。

「（そういえば、六年前にジャックが引き取って、四年間だがG Pの实地研修に参加させたって言ってたな。その時に本体が羽鷲<sup>わしゅう</sup>と共謀して、樹雷式の生体強化を施したって言ってたな。」

ナノマシンによる遺伝子レベルでの生体強化。

管理局から見れば、人体改造としか認識できないだろうが、広大な宇宙空間での生活圏を、確立する為には必要な行為であり、あの世界では、ごく普通に当たり前のことなのである。

もつとも施された技術レベルは、宇宙最高級のモノである事は硬くない。

しかも、当人達は『リンカーコア持ちの人間に試すのは初めてだから、ドキワクが止まらない』と、少々危険な発言していた。

下手にリンカーコアまで強化してしまうと、魔法至上主義の管理

局では目立ってしまうので、そこら辺は上手く調整して強化を施したらしい。

「（最大出力はA〜AAだが、魔力が一でも残っていればそれを百にする、『絢爛舞踏』。」

常時最高値で魔力行使が出来る、長期戦型仕様の生体強化。

ジャックのスタイルと同じく、単独任務遂行を常とした戦術思考、執務官としての土台は、十分に出来ている。コレを活かせるかはティアナ次第だが、彼女ならこの一年で十分に化けるだろう……。

問題があるとすれば、周囲の劣悪な環境か？」

しかし、これ以上彼女にばかり肩入れする訳にはいかない。

まあ、困った時に先輩として相談にのってやる位か？

「（賢護が四年前からミッドに飛んでいたから、おそらくスバルに会いに来ていたんだろう）」

本体からの情報を頭の中で整理しながら、ジョージは次の行動を考える。

「カルディア、アシエン。各部署への素行調査は任せる。俺は訓練する前線メンバーをからかってくる。特に副分隊長の二人をな」

『了解しました』

煙草に火を点けながら、補佐官二人に指示を出し仕事を開始する。

「（さてと、とりあえず三馬鹿辺りが喧嘩売ってくるだろうから、ATの準備でもしておくか）」

ゲシュペンストもいいけど、ザクを使うのも捨て難い。新型のジムもいい。G型は切り札だから取っておこう。ヒュッケバインは顔がGとそっくりだからなあ。

左手首の腕時計を操作しながら、ジョージは訓練場の方へと足を進めた。

おまけ。

「八神ハヤテの異世界勇者探索日記、そのさん。」

「はやてはん、はやてはん、うちの屋敷でメイドをやらへんか？」

「一応ボク、お嬢様の執事なんですけど……」

「綾崎はんやのうて、八神はんや」

「そんな会話が、三千院家の屋敷からする。」

「ハヤテは私の執事だぞ！」

八神はやてはその声に親友の一人を思い出す。

「シグナムのおっぱいはウチのもんやでっ！」

ピンクの騎士は胸元を隠す。

「そっちも捨て難いが、ザッフィーが犬耳執事するのも悪くないなあ」

俺は犬ではなく狼だ、の幻聴があつたとか。

「ならばヴィータは私のおもちゃだ！」

同姓同士でのちゅーちゅーは非生産的です。

「シヤマルさんはどうするんですか？」

「「「あれはいらん」「」「ボクも毒味係はイヤです」

「皆してひどいわっ!？」

泉の癒し手が泣いたとか……。

「ハヤテくんはハーマイオニーになってもろて、メイドをするのはどうやるか？」

『それだっ!?!?!』

暴走する腐女子を止められる者は今ここにはいなかった……。

「……………アーたん、助けて」

少年はひっそりと涙を流した。

ところで勇者は……？

「……………やっぱり生徒会長の部屋が、こんな高い所にあるのって、この学院の謎の一つよね」

高所恐怖症の人間にとって、五十メートル以上は地獄も同然である。

おわり。

## 第十六話「六課機動開始」(後書き)

次のお話はジョージVS前線メンバー男組との対決。

一つ目のアンケートはこの模擬戦でジョージが使うATは何がいいか？

？ゲシュペンスト(OG外伝までの機体のどれか。

？ザクトルーパー(F型(量産機)かS型(指揮官機)。

？ジム(ジム・ストライカーか陸戦型ジムか蒼い戦慄一号のどれかで。

？その他(作者が知ってる範囲でATになっても問題ないタイプ。

二つ目は『八神はやての異世界勇者探索日記』で、どこの世界で勇者を探してほしいかと言うもの。

実はネタ切れしてます。探索日記が一番難航中(マテ

次回予告。

「は〜い！ ワールド・ウォーカーズの、銀髪銀眼の男。銀狼です！

ついに始まったSTS本編。でも視点は分身体のジョージやアラヤや権兵衛ばかり！ 偶には本体も活躍したいぜ！

さて次回は、ジョージがATに変身して、転生者達と戦うお話。

巻き込まれたエリオ君は、無事に生き延びることが出来るのか！？

次回、第十七話「MRSと特級執務官の実力」

読んでくれないと、百倍の身体能力で殴っちまうぜっ！」

タイバニ風に言ってみる。



## 第十七話「呼び出す、亡霊」(前書き)

お久しぶりです。暑さとEDFで更新が遅れた作者です。

今回のお話は、少々(かなり?)強引な展開があります。ご都合主義と言わば笑え、イヤなら帰れ。それを踏まえた上で読んでください。

使用機体はアクセル様からのリクエストを採用させて頂きました。

## 第十七話「呼び出す、亡霊」

### 第十七話「呼び出す、亡霊」

ジョージが訓練場に顔を出すと、丁度スバルがバーチャルのガジェットを、殴り倒したところだった。

ティアナは三十メートルほど後方から、スバルを援護するために、アサルトライフル型のデバイスを構えて、周囲に目を光らせている。

対するライトニングの方はと言えば、酷いと言った方が正しいだろうか。

槍を構えて突撃するエリオ。そのエリオに向かって邪魔だと叫びながら、両手のライフルを連結させて収束させた射撃リンカー術で、ガジェットを倒しているアーサー。

陸戦型のフォワード陣の中で、唯一の空戦型とはいえ、斜線上にエリオが居るのにも関わらず、攻撃をしている所を見ると、ジョージは不安になった。

ティアナはそんなアーサーの性格を見抜いたのか、開始数分の行動で思い知ったのかは、定かでは無いがおそらく、早々にアーサーには見切りを付けたといった所だろう。

「（まあ、後ろからの味方の攻撃で撃墜せうたいされたくはないはな……）」  
今もアーサーは、周囲に展開した八つのスフィアと両手のデバイス、腹部に展開させたスフィアから広範囲射撃攻撃を行っているところである。エリオを巻き込みながら。

ただし、ガジェットは全てAMFで防いでおり、それに対してアーサーが何やら叫んでいるようだ。

そんなフワード陣を、訓練場の端からモニター越しに観察する、スターズとライトニングの隊長陣の後ろから、口に咥えたタバコから紫煙を昇らせたジョージが近づく。

「やってるようだな」いまだに爆発音が発生し続けている、訓練場を見ながら「坊主共はかなり荒削りだが、あっちの嬢ちゃん二人は見事な錬度だな」

「……つつつ！！！？？？」

肩を寄せ合うように、幾つものモニターを覗き込んでいた四人は、突然現れたジョージに驚きを隠せなかった。

気が付いたらすぐ隣に、と言っても五メートルほど離れた所だが、何時から居たのか全く気が付かなかった四人は、先程の事も相まってジョージを睨み付けるような視線を送る。

もっとも男二人はあからさまに表情を歪め、中坊のチンピラのような目つきで、睨み付けている。

実際の所ジョージは、軽く気配を抑えながら歩いて来ただけであ

る。

足音程度なら、少々歩き方を工夫するだけで簡単に消せるので、あとは気配を抑えただけに過ぎない。実際なのはとフェイトのデバイスの二人（機？）は、ジョージが近付いて来るのを察知していた。

「何をそんな、『非殺傷設定の魔法でショック死させた被害者の家族』のような目で、俺を見ているんだ？ トリステインの坊主が予想以上にガキだった事への絶望か？ それともランスターとナカジマの二人が、自分達の予想以上だった事への嫉妬と怨恨か？」

煙草を啜えたその口から出てきた言葉に、思わず副隊長の男二人は、チリ紙より切れやすい堪忍袋の緒を切れさせた。

「手前えっ！ アーサーがガキってどう言う意味だっ！」「

左手を突き出し、ジョージの胸ぐらを掴もうと京四郎が飛び掛った。

「嫉妬ってどう言う意味ですか！？」

「私はアーサーに絶望なんて絶対にしないっ！」

二人を皮切りに、隊長陣も怒りあらわにジョージに詰め寄ろうとする。

「トロい」「ぎやあっ！」「

しかし、掴みかかろうとした京四郎の左手を、その手首を逆に掴み捻り上げ、背中へ回させ京四郎の向きをなのは達へと向け、その

背後にジョージは佇んだ。

「自分の攻撃が通用しなかった程度で、喚き散らすガキをガキと言わずになんと言う」

ジョージとの間に、京四郎が人質のように締め上げられているため、迂闊に手出しが出来ない隊長陣は、その場で苦虫を嚙む。

「嫉妬なんてものは、人間誰もがするものだが、自分は一切した事がない『いい子』ちゃんだとでも言いたいのか？」

その言葉に、なのはは憤怒の形相でレイジングハートを起動させ、その矛先をジョージへと向ける。未だに肉の壁として左手を捻り上げられ、その痛みに泣き喚いている京四郎を尻目に。

「絶望したくないなら、したくないと言っていればいい。言うも思うも個人の自由だ。だが言葉は平気で他人を傷付け、時に死へと導く。別に忘れても構わんよ。お前さんの自由だからな」

フェイトもギルガメッシュも、すでにデバイスを起動させ、その切先をジョージへと向け、一触即発の状態となっていた。未だに泣き喚く京四郎はすでに、あまりの苦痛に膝を折っている。

「言葉遊びや駆け引き、談笑や自虐譚の一つも語れなくて、よく尉官をやっているものだ。まあ、海ではそれが基本のようだから仕方ないか」

さすがお綺麗事は本局のお家芸だな、と口を洩らしたジョージの台詞に、ピクリとギルガメッシュが反応したが、それに気付いた者はいなかった。ジョージを除いて。

「先に言っておくが、俺の今回の事を報告しても、然程問題にはならない。何せ准尉が佐官相当権限待遇に暴行行為を行おうとしたのを、俺の一存でなかった事に来るからな。俗に言う『不問にする』と言っヤツだ」

実際ジョージの発言は、中傷性のある言葉ではなく、少々個人的な見解を多少過大表現的に述べたに過ぎず、嚴重な罰が下るわけでもない。

管理局は軍隊ではなく、一応『司法機関』なので、刑罰は重くない。

逆に京四郎の行動は、管理局にとっては十分に処罰の対象になる。

リンカー術士、が非リンカー術士に、暴行をくわえようとしたのである。さらにリンカー術士が三人がかりで殺傷傷害行為（リンカー術は火器と同じ扱い）を、しようとしたのである。

いくら非殺傷設定があるとはいえ、たとえ殺すつもりが無くても、リンカー術を使うと言う事は、力（暴力）を行使したと言う事である。もつとも、当人達はそんなつもりは無かった、そんな気は無かったと言つて、自分の罪から目を背けたがるだろうが……。

「そんなに俺が気に入らないなら、気に入らないと言えればいい。リンカーコアも持っていない、俺より弱いお前達が暴力を振るって、力で訴えたいと言えればいい」

「魔法も使えないお前が、ボク達より強いはずが無いっ……！」

ジョージの事実を述べた挑発に、ギルガメツシュが即座に反応した。

「そこまで言うなら、ボクと模擬戦をしてもらおうか。リンカーコアも持たない人間は、魔導師には絶対に勝てない事と、魔導師より強い人間は存在してはならないと言う事を、このボクが直々に教えて差し上げようじゃないか」

ギルガメツシュから模擬戦を吐きつけられた時、ジョージはその目つきを鋭くさせた。

「いいだろう。そこまで言うのなら相手をしてやろう。だがお前だけでは役者不足だ。文句があるヤツ全員でかかって来い。相手をしてやるのは構わないが、お前達全員を叩きのめしてしまっても構わないだろう?」

ジョージの言った、ある台詞の使い回しに、ギルガメツシュは目を見開き、その顔を酷く醜く歪ませる。

「(その台詞は、このボクだけが、ゆりかごでの戦いの時に言っている台詞なんだぞ!)」

「模擬戦は今から二時間後だ。準備が出来たら訓練場に来い。模擬戦前は食事をしない事と、トイレにしておく事を勧めておこう」

京四郎から手を離すと、ジョージは背中を向けて隊舎の方へと戻っていった。

その場に残った者達は、何時までもジョージの背中を睨み付けていた。

そして、二時間後。

住宅街のホログラムを展開した、シミュレーションフィールドでなのは、フェイト、京四郎、ギルガメッシュ、アーサーの五人が、空き地らしき広場に集合していた。

その後、訓練を早々に切り上げ、デバイス整備室で調整を依頼した五人は、その間に少々早い昼食をしっかりと済ませ、意気揚々と訓練場のシミュレーションフィールドへと集まっていた。

約束の時間まではあと五分少々と言った所である。

『ふむ、参加者はお前達五人だけでいいのだな？』

五人の前に通信ウィンドウが開かれ、ジョージが顔を見せた。

「はっ、そっちこそお前一人で俺達とやりあおう何て、役不足じゃないのか？」

ちなみにこの場合は『役者不足』の方が適している。もともとここにいる全員でも、役者不足なのは否めないかも知れないが……。

「魔導師ですらない君が、僕達とまともにやりあえるとは、全く思えないんだがねえ」

「僕はアーサー・ド・トリステインだ。ガキじゃない！」



ジョージに向かって、口々に文句をあげる男達を尻目に、なのはとフェイトは『ボールは友達』の如く自分のデバイスに話しかけている。

「がんばろうね、レイジングハート」

「私達がいれば何だって出来るよ、バルディッシュ」

すでに必勝の魔法は考えた。あとは皆で頑張れば絶対に上手くいく。そう心に確信しながら、なのは達はモニター越しに、ジョージと向き合う。

『ではルールを説明する。この住宅街フィールドでは、周辺の一般公共施設、及び住宅家屋への損傷をさせるとマイナスの得点が発生する。マイナスポイントが五つ貯まると、その場で即敗北が決定される。』

それ以外の勝敗の判定は、確実に戦闘行動が不可能と思われる状態、にした方の勝ちだ。

この模擬戦は、住宅街における対テロ鎮圧戦闘を考慮したものである。

市民の安全と周辺への被害を如何に抑えられるかが、重要となる』

「はあ？ 何で住宅街なんだよ。普通に草原とかのフィールドでいいだろうが」

ジョージの説明に、模擬戦の意味を理解しきれていない者がいる事に、この模擬戦を観戦している地上部隊の出身者達は、頭痛と目眩を感じた。

海の連中もジョージの言っている事を、理解している者は少ないようである。

『それでは模擬戦、開始する』

一方的に開始を宣言し通信を切られ、思わず戸惑う五人を他所に、模擬戦は開始されていた。

戦いに始まりの合図など、本来無いのだから。

なのは達前線メンバー五人から、数区画ほど離れた場所にジョージはいた。

「さてと、それじゃあ、おっ始めるとしますか」

左手首に付けている腕時計を、眼前に掲げる。

「こういうのは、叫ぶのが決まりなのでな。

コール！ ゲシュペンストツ！」

光の粒子が一瞬ジョージを包み込み、それが収まった時にはジョージの姿は一変していた。

腹部、上腕、太腿、以外を白い縁取りのある濃緑色の装甲が包み、赤いバイザーと頭部両側にある長い耳状ブレードアンテナと、前頭に付けられた角（隊長機仕様）、両腕にある三本の棒状パーツ、そして背部の推進ユニット。

拡張性と発展性があった為、一昨年先行量産型として、三十体程

量産されたが、クセの強さから来る扱い難さから、量産は中止。今では一部の者しか使う者がいない機体。

そしてこの機体は、それを改修し、マイナーチェンジさせたモノである。

量産型ゲシュペンスト・MK?・改

「量産型とはいえ、こいつがただのマイナーチェンジ機でないと言ふ事を、おしえてやらないとな」

【BGMを流しますか?】

バイザー裏のモニター画面の一部に文字が表記された。機体に搭載されている補助AIの、お遊びの一つである。

「もちろんだ。ミュージックは【Rushing Dandy】。ただしRemix版だな」

両腕の棒状パーツ　ダブルプラズマステーク　と拳を二度打ち合わせると、背中のメインスラスタに火を点し、ホバー移動で前線メンバー達がいる地点へ、移動を開始した。

その装甲の下では、ジョージが銀色の瞳を淡く光らせていた。

前線メンバー組の五人は、住宅地の道路を警戒しながら、歩き回っていた。

相手の場所はサーチャーで捜しているのだが、住宅地と言うものは意外と死角が多く、上空から捜そうにも、場所によってはマンションやアパートメント等もあり、軒下に入られただけで簡単に隠れられてしまい、見つけるのは難しくなる。

探査魔法を使おうにも、相手は魔力を持たない人間であり、魔力探査もしくはロストログリア反応しか探査できないなのは達では、ジョージを見つけることは出来なかった。

ちなみに男三人は、攻撃、防御と移動のリンカー術しか使えない。

生命反応や熱源反応にいたっては、住宅の彼方此方から発生しているため、彼女達の索敵は困難を極めた。

そんな時である。ジョージの攻撃に最初に気が付いた、なのはデバイス、レイジングハートがある反応を感知した。

レイジングハートはすぐさまバルディッシュに警告。それと同時になのはに報告をする。

【マスター。十時上六十度の方角から接近する物体を感知。数十六】

「敵！？ みんな散開して！」

上空から飛来してきたのは、十六発の誘導弾頭。ミサイル

なのはとフェイトは斜めに飛び上がり、上空へと回避するが、男三人はいきなり飛んできたのが、ミサイルと驚き回避行動が遅れ、慌ててシールドを張りミサイルを受けた。

ミサイルは、周囲の住宅を破壊する事無く、男三人とその周囲に着弾する。損壊があったとすれば着弾した道路くらいだろう。周囲を土煙と爆煙が蔽う。

「京四郎君！」「アーサー！ ギル！」

思わず二人は仲間の安否を気遣い、叫ぶ。

そして、その為に空中で足を（動きを）止める。十メートルに満たない高さで、足を止めたその瞬間を見逃すほど敵は愚かでも、易しくも無かった。

【ツ！？ マスター！ 五時の方角！】

レイジングハートの警告に、右肩越しに後ろを振り返ると、そこには眼前に迫った白と濃緑色の物体。

回避も防御も間に合わず、なのははジョージのショルダータックルを受け、吹き飛ばされる。

しかし、ジョージの攻撃はそれだけでは終わらない。

背部メインスラスターを吹かし、吹き飛ばしたなのはに追いつくと、右手でなのはの襟元を掴む。

吹き飛ばされてから一秒にも満たない時間に、なのは状況を判断する事も、体勢を立て直す事も出来なかった。

「たかが拳一つを、甘く見るな」

ジョージの左腕のプラズマステークが、音を立てて電気を纏っていた。

「ジェット・マグナム！」

三本のプラズマステークは、なのはの腹部へと叩き込まれ、音を立てて電撃が打ち込まれた。

スタン設定にされた攻撃を受け、なのは意識を手放し、ジョージに襟元を掴まれたまま、レイジングハートをその手から落とした。

「なのはああああっ!？」

フェイトは親友がなすすべもなく、倒された事に対して、ただ叫ぶしか出来なかった。

バイザーを怪しく光らせながら、ジョージは「まず一人」と呟いた。

## 第十七話「呼び出す、亡霊」(後書き)

今回はおまけの「八神はやての異世界勇者探索日記」はありません。異世界日記の世界は、応募しているので、どうぞよろしく。

ちなみにはやて達が合流するのは……………まだ考えてません(マテ今回は前後編になりましたが、そのうち加筆修正して一つに纏める予定です。

ケータイで見ている方は少々観づらくなるかもしれませんが。一つに纏めないでほしいと言う方は、このままがいいと言ってください。加筆修正だけにします。

暑さとEDFで更新が遅れた亜嵐でした。

第十八話「亡霊は舞い踊る」(前書き)

作者。夏風邪を引く。

今回は一部に、スカト○的表現があります。  
お読みの時は、ご注意ください。



## 第十八話「亡霊は舞い踊る」

### 第十八話「亡霊は舞い踊る」

わずか数秒。十秒にも満たない時間の間に、機動六課のエース・オブ・エースは打ち倒された。

模擬戦の様子をモニターで観戦していた、機動六課の隊員はあまりの出来事に、モニターから目が離せなくなった。

陸の局員達の中には、さすがだ、と頷く局員もチラホラという。彼等は実際にジョージの活躍を見た者達であった。

対する海の局員や本局出身の者達は、まるでそれが嘘か悪い夢であってほしい、と言った表情である。

それは、部隊長室で観ていたクロノ・ハラオウンも同じであった。

たかが陸の、それもリンカーコアすら持たない、ただの人間が、こうもあっさりと高町なのはを撃墜した事に、驚愕を感じずにはいられなかった。

ジョージは気絶させたのはを、脇に抱え直すと高度を下げ、近くの民家脇の塀に横たえさせた。

その後姿を見ながら、フェイトは攻撃を仕掛ける為に、バルディッシュをザンバーモードへと変形させた。しかし、

【サー。今攻撃を行えば、確実に高町なのはにも被害が出ます。今他は他の三人と共に撤退して、形勢を立て直したほうが賢明に思われます】

「……分かった、バルディッシュ」

齒軋りをしながら、絞り出すように答え、土煙が晴れてきている三人に向かって念話を繋げる。

「＜三人とも、なのはがやられた＞」

『＜なんだってっ！？　じゃあ今のは！？＞』

「＜一度態勢を立て直すから「あのヤロウ！　よくもなのはを！」っキョウシロウ！？＞」

フェイトの言葉を聞き終えずに、晴れかけた土煙の中から、ジョージの姿を見つけた京四郎は、アームド・デバイスのフェンリルを構えると、駆け出した。

「くらえっ！　超級「遅い」くはっ！？」

必殺の技を繰り出そうと、デバイスを上段に振り上げたその瞬間であった。

剣を振り下ろすために、踏み込んだ足が止まる、ほんの一瞬。

空戦魔導師では絶対に使う事のない、武術において基本となる歩法。それをもつて一瞬にて懐に入り込むと同時に、左腕のプラズマステークを鳩尾に衝き付けた。

「ジェット・マグナム」

開放された電撃は、十分にその威力を發揮し、京四郎の意識を刈り取った。

気絶して倒れ掛かってきた京四郎は、バリア・ジャケットの腰のベルトを掴まれると、後方に投げ捨てられた。

放物線を描きながら投げ飛ばされた先は、ゴミ回収場所に置かれている、ポリバケツである。そこに頭から突っ込んだ京四郎は、数度足を痙攣させると、力なく崩れ落ちた。

倒れ転がったポリバケツ。そこからはみ出た下半身。

そして、濡れだした股間と、漂うアンモニア臭。

ジェット・マグナムを腹部に受け、電撃で痙攣した京四郎は、筋肉が緩んだ事で尿を垂れ流したのである。だからトイレに行っておけと言ったのだ。

「残った面子は、丁度ライトニングのメンバーか」

バイザーが怪しく光り、その奥からの威圧感に、ライトニングの三人は萎縮した。

「アーサー、ギル。撤退して大勢を立て直すよ」

「……分かった」「分かりました」

三人は飛び上がると、住宅地の向こうへと飛んでいった。

ジョージはそんな彼女達を追撃しようとはせず、飛んで行った方向をしばらく眺めていたが、自然な動作で方向を変えると、住宅街の道路を歩き出す。

「あそこで撤退を選んだのは、まあ、及第点と言った所か……。五分やそこらで決着が決まるのも面白みにかける。ここは出方を待つとするか。」

近くに公園があつたな。一服入れるとするか」

ジョージはその足を、近くの公園へと向けた。

「さて、如何出てくるのか、楽しませてもらうぞ？」

フェイト・ハラウン分隊長」

頭部装甲の口元だけを、フェイス・オープンさせ、右腕のステークを使い、器用にタバコに火を点け肺に煙を充填させると、一気に口から吐き出す。

「（三千院京四郎の動きを見たのは一瞬になったが、あの動きは見た目だけを真似た動き。どうやら情報通り、戦いに関しては素人のようだな。おそらくシミュレーションで練習したのだろう。型をな

ぞつた程度で、その技を自分の物にしたと勘違いしている、典型的なド素人だ」

ミッドチルダ郊外の森で、ガジェットと交戦していた所を、なのはとフェイトに保護されたらしいが、戦闘時の周囲への警戒、遮蔽物の注意、死角への考慮、隊列、索敵、報連相（報告、連絡、相談）そのどれもが、訓練を受けた事のない民間人素人の動きであった。

「（おそらく生前は、二次元が趣味のミドル〜ハイティーンの少年  
この場合は子供と言った方が正しいか？ 一ヶ月そこらだとしても、新兵ですらもう少しまともな動きをするぞ）」

アーサーは半年前に、プロジェクトF関連の違法研究所から、保護されたとはいえ、まだ十歳の少年である。実際そこら辺はエリオと似たり寄ったりである。

まだティアナとスバルの方が、戦闘経験のある者の動きをしていた。

それに、目先の感情に囚われて、激情して己を律せず暴走するようでは、あまりにもヒヨッコすぎる。

「（クロノ・ハラウンも、よくアンナノを分隊の副隊長にしようなどと考え付いたものだ。

まあ、魔力が高くて、戦力として使えば、オツムは二の次か。でなければ高町とハラウン妹を分隊長にする筈が無いか……。

あり得ない事はあり得ない、とは何処かの哲学者の言葉だが、コレはあまりにもお粗末過ぎる。ナンセンスだと言いたくなるな）」

実際、隊長陣の事務能力やデスクワークは、壊滅的なまでに最悪

と言っていていいだろう。唯一まともだとすれば、仮にも、一応、二級とは言え、執務官であるフェイトくらいだろう。それでも執務官としては及第点はやれないが。

「やれやれ、先が思いやられるなあ……ってこれは今朝も言ったなあ。あ、あ、あ、あ、あ、先行きが不安になってきたな」

盛大にタメ息を吐きながら、ジョージはガツクリと頂垂れる。

と、ジョージは時刻を確認する。公園で一服を入れだしてから、すでに十分が経とうとしていた。

「いったい彼女達は何をしているんだ？」

<こちらジョージ・マウンテン。バルディッシュ、応答せよ>」

何時まで経っても攻めて来ないライトニング組に、痺れを切らしたジョージは、バルディッシュに念話通信を繋げる。

正確にはバルディッシュは念話だが、ジョージは普通に声に出している。

【<こちらバルディッシュ>】

「<そつちの状況はどうなっている？ 早く攻めてこないと、試合放棄とみなして負けにするぞ？>」

【<現在此方はミスター・ジョージを索敵中です>】

「<……は？ 私の現在位置は既にお前がマークしてあるだろう？>」

「>

【<イエス。しかし、聞かれていませんので教えていません>】

デバイスとして、それは如何だろうと思ったジョージだが、フェイトを鍛える為にあえて黙しているという、バルディッシュの意図を察したジョージは、あえて何も言わなかった。

「<了解したバルディッシュ。だが、後三分経っても私を発見できないようなら、此方から攻勢にでる。いいな？>」

【<サー・イエス・サー>】

バルディッシュとの念話通信を切ったジョージは、バイザーの望遠カメラ機能を使い、公園の木々と住宅の家屋の間から、飛行しているのが見え隠れしているアーサーを捉え、収納機能から展開させたブーステッド・ライフルのスコープを覗き込んだ。

ジョージのレーダーと気配探知覚領域には、フェイト、ギルガメッシュ、アーサーの三人位置が手に取るように分かる。

現在もつとも距離の遠いのはフェイト、次はアーサー、そしてギルガメッシュである。

ギルガメッシュは現在アーサーから二次の方角に、地面に降りて索敵をしている。場所は見通しの良い大通りで、道路沿いはマンションなどの高めの建造物が多く立ち並んでいる。

アーサーは住宅地の上空。フェイトはジョージを挟んだ対角線上の商店街を、歩いて索敵中のようにである。

「三分経過を確認。低速弾道、ファイエル」

引き金を引き、銃口から放たれた魔力弾は、秒速二百メートル、時速にしてたった六百〜七百キロの速度で、アーサーへと襲い掛かった。

ヒットする直前で、右腕に発生させたシールドで直撃は逃れたが、体勢を大きく崩したアーサーは住宅地へと墜ちて行く。

【家屋損傷。マイナスーポイント】

「む？ 住宅に突っ込んだか。AMBACで着地出来ると思ったのだがな」

撃ち落としたアーサーが、住宅に突っ込んだおかげで、ジョージは一ポイント付いてしまった。

ブーステッド・ライフルを収納するジョージのレーダーには、今の攻撃で大よその居場所を特定する事が出来たのかフェイトが、飛行してくるのが分かった。

ギルガメッシュは近くのマンションの屋上に上ったようである。

「さてと、来たか。」

アーマード・トルーパーは伊達に外骨格の強化装甲をしているわけではないぞ」

振り返って、少し視線を斜め上に向ければ、サイズフォームに魔力刃を展開したフェイトが、一直線に向かって来ている。



腰を落とし、左腕のプラズマステークにエネルギーを充填。右手にグリボルバーを展開。

「フォトン・ランサー！」

迫り来る魔力弾は五つ。一つ目を後方に小さく飛んで回避、左から来た二つの魔力弾に向かって、潜り込んで装甲を掠らせるように回避。

この時フェイトは、相手は大きく後方に回避するとはかり考えていた。そこからフォトン・ランサーを数発も当てれば、絶対気絶させられると思っていた。しかし、フェイトの予想は大きく外れる。

まさか、飛んでくる魔力弾に向かって回避行動をとるとは、考えもしなかったフェイトは、残りのフォトン・ランサーの制御を乱す。

その隙を見逃さないジョージは、グリボルバーの銃口を素早くフェイトに向け、三発の魔力弾を放つ。

頭部に向けて放たれた、三発の魔力弾に気が付いたフェイトは、慌てて速度と高度を落とそうとする。

【プロテクション！】

「きゃあああああっ!?!」

直撃寸前にバルディッシュが、バリアを張る事に成功するが、急造であったために三発目の魔力弾がバリアを打ち破り、頭部を掠める。

たかがATを野蛮なだけの、旧世代兵器としてしか見ることが出来ないフェイトは、ジョージからの反撃に思わず飛行リンカー術の制御を乱し、地面へと落下するが、地面と激突する寸前のところで、体勢を立て直すことが出来た。

しかし、その隙を見逃して悠長に待っていてくれるほど、相手は甘くない。

背中メインスラスタが火を噴き、一瞬の加速でフェイトに接近。

左肩のタックルをブチ当てながら、Gリボルバーを収納し、体勢を立て直させる間もなく、右ジャブを二発顔面に打ち込み、一瞬怯んだ隙に腹部に一撃。

バリアジャケットでダメージは無いが、小さな衝撃は確実に彼女を揺らし、リンカー術の制御を落とす。

「その有用性と……」

さらに顎を掠らせるように一撃。魔力障壁を貫通させながら、脳を揺らし脳震盪を引き起こさせ、一瞬怯んだ瞬間、足首につま先蹴りを打ち、フェイトの重心を揺らす。

「可能性を……」

右脚を股の間まで入れ上半身を左に捻り、左手でフェイトの右手首を、右手で襟首を掴み、右へ捻りながら引き寄せると、自分の重心を相手の重心の下へと潜り込ませる。

「教えてやるっ！！」

左手と右脚の高さを入れ替えるように、フェイトを投げるっ！

それは見まごう事無き、柔道の背負い投げである。

地面に叩き付ける瞬間に掴んでいた手を離し、撥ねて死に体をさらすフェイト。

そしてそこに、左腕のプラズマステークにエネルギーを、十分に溜め込んだジョージが突っ込む。

「ジェット・マグナムッ！！」

腹部をぶん殴られ放物線を描きながら、胃の中の者を撒き散らして、フェイトは公園の噴水へと落っこちる。

舞い上がる水飛沫と、噴水からジョージまでの間に点々と跡を残す、フェイトが食べた昼食のナカミ。

それらをそのままにしたまま、ジョージはギルガメッシュのいる場所へと、スラスターを噴かして移動を開始する。

ギルガメッシュはマンション屋上の上ってから移動してないので、ジョージは道路のと真ん中を進みながら、最短ルートで移動する。

と、そこへいくつもの剣が飛来してきた。

しかし、狙いが甘く、回避運動をする事無く直進する。

マンションの真下付近まで来ると、角度が悪いのか剣は飛んでこなくなつた。

「よくもフェイトをおおおおおおつ！」

怒鳴りながら、右手にアームドバイスを展開したギルガメッシュが、急降下で落下の勢いを乗せて攻撃してきた。

しかし、右足を引いて紙一重でその一撃をかわす。攻撃後の硬直、その一瞬の隙にジョージは反撃に移る。放たれた右拳は的確に、ギルガメッシュの顎を打ち抜く！

「ぐぶへえあああつ！？」

仰け反りつま先が地面から離れたまま、棒立ち状になるギルガメッシュの右側頭部に向けて、絵に描いたようなモーシヨンでハイキックをブチ当て、振り抜く！

「あぶろはあああつ！？」

風車のように回転をしながら、ギルガメッシュは道路を転がる。

後を追うようにスラスターを吹かし、停止予測地点へと移動を開始。ギルガメッシュが停まる瞬間、スラスターを一時カットし着地、慣性を利用して勢いに逆らわずに、前方へ空中回転。

地面を二転三転して停まったギルガメッシュは、慌てて起き上がりジョージを捜す。

そこ目掛けて、ジョージの回転蹴りが叩き込まれた！

「どへるはあっ!?!」

ギルガメッシュが打ち撥ねて落ちる最中、さなか ジョージはATのバッテリーからの電力供給を、最大値へと変更させる。

「(ジエネレーター、フル・ドライブ! プラズマ・バックラー最大稼動!)」

余剰エネルギーが排熱機構から溢れ出し、量産型ゲシユペンスト・MK?・改が闘気を放出したかのような光景にさせた。

そこからジョージは、怒涛のラッシュをギルガメッシュへと打ち付ける。

右ジャブの連打に始まり、左のフック、右のアップパー、左のハイキック、そして左ストレートで殴り飛ばし、メイン・スラスターを点火し追いかける。

両腕のプラズマ・バックラーに取り付けられているプラズマステークからは、コレでもかと溜め込まれたエネルギーが、放電現象を起こしている。

「このダブルプラズマステークは特別仕様だ。その身でとくと味わえ!」

先に放たれた右の一撃が、ギルガメッシュの体を、完全な死に体状態へと追い込む。

そして其処に、左の一撃が放たれる。

「ジェット・ファントムツ!!!」

打ち抜いた左のプラズマステークの跡に添って、残留放電が軌跡を画く。

打ち出した拳を下ろし、残身するその後ろでは、何故か真上に打ち上げられたギルガメッシュが、頭から地面へと突き刺さる。

「ぐへえっ」

その顔に似合わぬ、中身に似合った声を出してギルガメッシュは、力なく地面に崩れ落ちる。

二、三度全身を痙攣させると、上と下の両方の穴から、ナニかが洩れ出る。

「だから言っておいただろうが。食事は摂るな、トイレには行っておけ……と」

肩越しに一瞥すると、レーダーに残る一つの反応に向けて、ジョージはメインスラスタを吹かし、移動を開始した。

この先の結果は、既に誰の目にも明らかに映っていた。

ジョージ・マウンテンの勝利と言う結果で……。

おまけ。

八神はやての異世界勇者探索日記。

空見町と呼ばれる町に、天空より舞い降りし、翼を持った少女達。彼女達は今日も愛するマスターと、平穩の日々を送っていた。

「そはらはんの発展途上を続ける双子山も、アストレアはんのドヤ顔級富士山もええけど、ここはちっぱいからぶるんまで楽しめる、カオスはんも捨てがたいなあ……うへへへへへ」

「私と致しましても、メロンのシグナム嬢、グレイプフルーツのシ

ヤマル嬢、どちらも甲乙付け難いと思います。ぐっへっへっへっへ」  
「わかつとるやないか、トモキはん」

「いえいえはやて様程ではございませんよ」

突如現れた二体のスケベ魔人。空見町は魔人の手に落ちてしまうのか？

「カオスちゃん。あの二人にちよっとお仕置きしてきて」

「はっい」

しかし、勇者そはらと天使カオスが立ち上がった。

「二人とも、OSHIOKIだよ」

『ちよ、カオスやめ、あ~~~~~っ』

こうして魔人は討ち取られた。

おわれ。

おまけ2。

別バージョン。「ジェット・ファントム&マグナム」

「俺のステーキが光って唸る。ゲシュペンスト・パンチ！」

怒りのスーパードモードはありません。

「ジェット・ファントムをレクイエムにしな。ファントム・フォー・ザ・レクイエム！」

最終回まさかの撃たれEND。

「ちよいとなつかしいネタでいくぜ。直接打撃亡霊拳！」  
やってることはただのパンチ。

「蒼いランタンは無いが、機体が蒼けりゃ十分か。ジェット・マグナム！」



南瓜切りハサミ、OP。

「勇気の力を見せてやるぜ。ゲ〜シュペンストオ・マグナム！」  
勇者王のマグナムは破壊の拳。

おわる。

## 第十八話「亡霊は舞い踊る」(後書き)

いや、本当に。

八月下旬はおかげですつと鼻水垂れ流しながら、ズルズルしてました。

最近といっても少し前によく知ったんですが、第2次OG発売決定らしいですね。

今度の話は封神戦争？

龍人機を確認したんで、ニルファの流れに近いものになるのでは？と予想しています。

でも親分はすでに大親分に乗ってますし、ビルトの番もそろっている。

クスハとアイビスに視点が行くでしょうね。

仮面キヨン、もといブリット君登場か？

発売が楽しみではあるが、作者はPS3を持っていない。

ISかタイバニが書きたくなった今日この頃。あと種死も書きたいな。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9871k/>

---

魔法少女リリカルなのは～ザ・ウォークス

2011年9月13日13時51分発行